禪門法語全集

第三輯

163
300

特

禪門寶訓講義

禪宗諸大德題序　圓覺寺派管長釋宗演禪師校閲　禪宗編輯局著述

大本洋裝全貳冊
紙數四百頁以上
定價金七拾錢
郵稅金拾四錢

曩に內務省は訓令第九號を發布して各宗教師の學力は一般人民の學力より低度にては其任に適せざれば尋常中學科相當以上の學識なかるべからずとて新に教師撿定條規を制定すべき由達せられたり依りて各宗は各々其條規を制定せられしが臨濟宗各派の條規は已に其筋の認可ありたれば其實施も近きに在るべし而して該條規に定められたる撿定試驗宗部の科書中には必ず『禪門寶訓』を採用せられしにより自今該條規の下に教師となるべき撿定試驗を受んには必ず『禪門寶訓』に精通せざるべからず故に之を今日に講習するは特に臨濟宗各派下の僧侶各位の最大急務なりと謂はざるべからずよりて弊院は各位の爲めに同書講習の餘師と爲さんと欲し『禪宗』編輯局に請ふて該講義を發行せんとす而して講義は專ら平易通俗を旨とし且つ最も丁寧親切に詳解したるものなれば受驗者は勿論苟も本書を講習せらるゝ者は何人にても閲讀して至大の利益を得らるべし乃ち『禪門寶訓』は禪門諸士必讀の書なると同時に此講義は『禪門寶訓』講習者必閲の良書也請ふ各位必ず一本を座右に備へられんことを

（注意）發行期日は三月廿八日◉發行期日前に前金御送附の方へは特別減價金五拾錢（外に郵稅金拾四錢）を以て貴需に應す◉發行後は必ず定價に復す◉爲替は京都丸太町郵便受取所にて受取るべき樣御取組の事

發行所　京都市木屋町二條　貝葉書院
　　仝木屋町二條下ル　一切經印房

特 18
751

鴻儒鋏齋居士序文

「禪宗」編輯局編纂

校訂 箋註 禪門法語全集

第三篇

京都 貝葉書院藏版

禪門寶訓講義

禪宗諸大德題序　圓覺寺派管長禪宗演禪師校閲　禪宗編輯局著述

大本洋裝全貳冊
紙數四百頁以上
定價金七拾錢
郵稅金拾四錢

発に内務省は訓令第九號を發布して各宗教師の學力は一般人民の學力より低度にては其任に適せざれば尋常中學科相當以上の學識なかるべからずとて新に教師撿定條規を制定すべき由達せられたり依りて各宗は各々其條規を制定せられしが臨濟宗各派の條規は已に其筋の認可ありたれば其實施も近きに在るべし而して該條規に定められたる撿定試驗宗部の科書中には『禪門寶訓』を採用せられしによりて自今該條規の下に教師となるべき撿定試驗を受んには必ず『禪門寶訓』に精通せざるべからず故に之を今日に講習するは特に臨濟宗各派下の僧侶各位の最大急務なりと謂はざるべからずよりて弊院は各位の爲めに同書講習の餘師と爲さんと欲し『禪宗』編輯局に請ふて該講義を發行せんとす而して講義は專ら平易通俗を旨とし且つ最も丁寧親切に詳解したるものなれば受驗者は勿論苟も本書を講習せらるゝ者は何人にても閲讀して至大の利益を得らるべし乃ち『禪門寶訓』は禪門諸士必讀の書なると同時に此講義は『禪門寶訓』講習者必閲の良書也請ふ各位必ず一本を座右に備へられんことを

（注意）発行期日は三月廿八日◎發行期日前に前金御送附の方へは特別減價金五拾錢（外に郵稅金拾四錢）を以て貴需に應す◎發行後は必ず定價に復す◎爲替は京都丸太町郵便受取所にて受取るべき樣御取組の事

發行所　京都市木屋町二條　貝葉書院
　　仝木屋町二條下ル　一切經印房

禪定屈端堂主人序

屬余題一言余取而閱之蓋
禪家名師之假字法語
也余乃立曰禪家諸祖云
教書既汗牛充棟百年矣

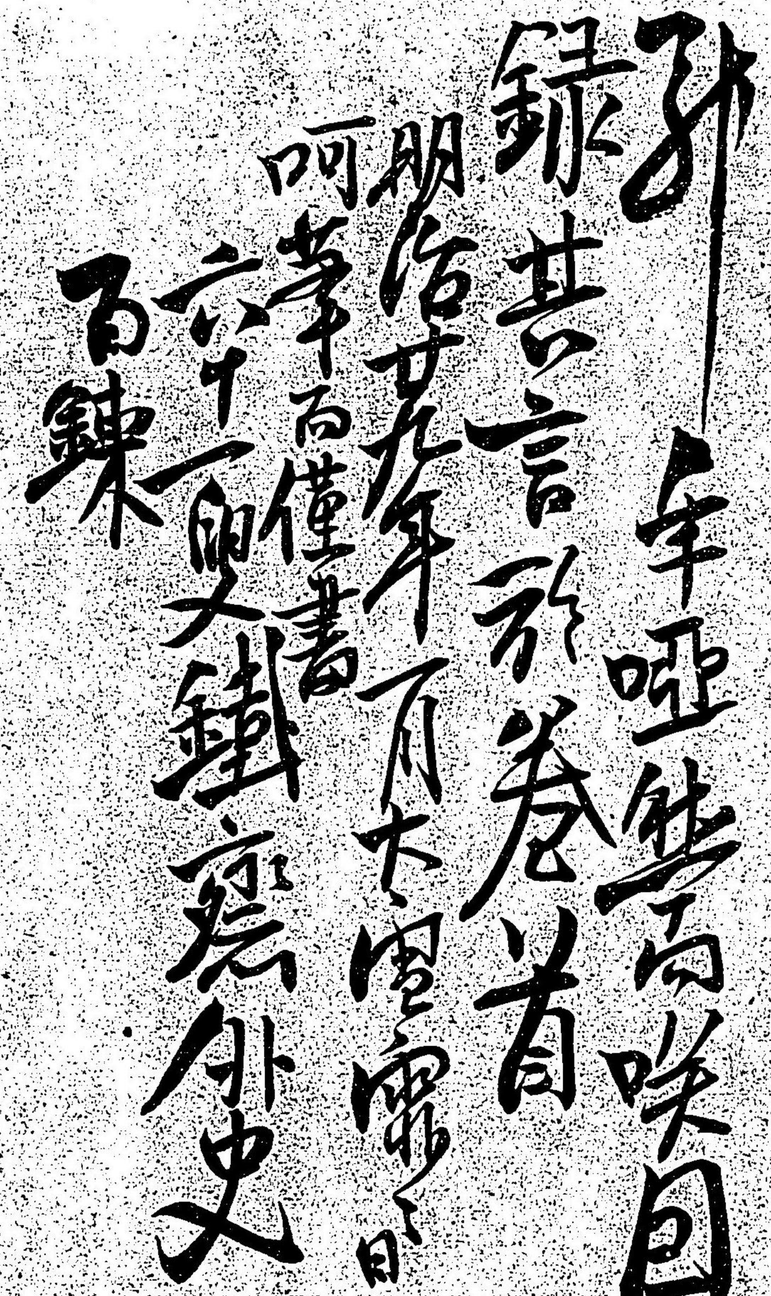
輔世淺近書果爲何用
乎全曰否近時禪教盛行
而世之敏捷者暫措之愚
魯之質欲窺禪門
苦無林路引之迷不進
豈不大可憾哉余之老
漫心欲授易解之管
鑰也且夫詰言雖淺意
旨即深奥故緣此書而
進登其祖室知易易
見余曰果能所謂不
立文字此書爲之指模

禪門法語全集

第三篇

目次

正法眼藏隨聞記
麓草　分鞭
快馬



禪門法語全集

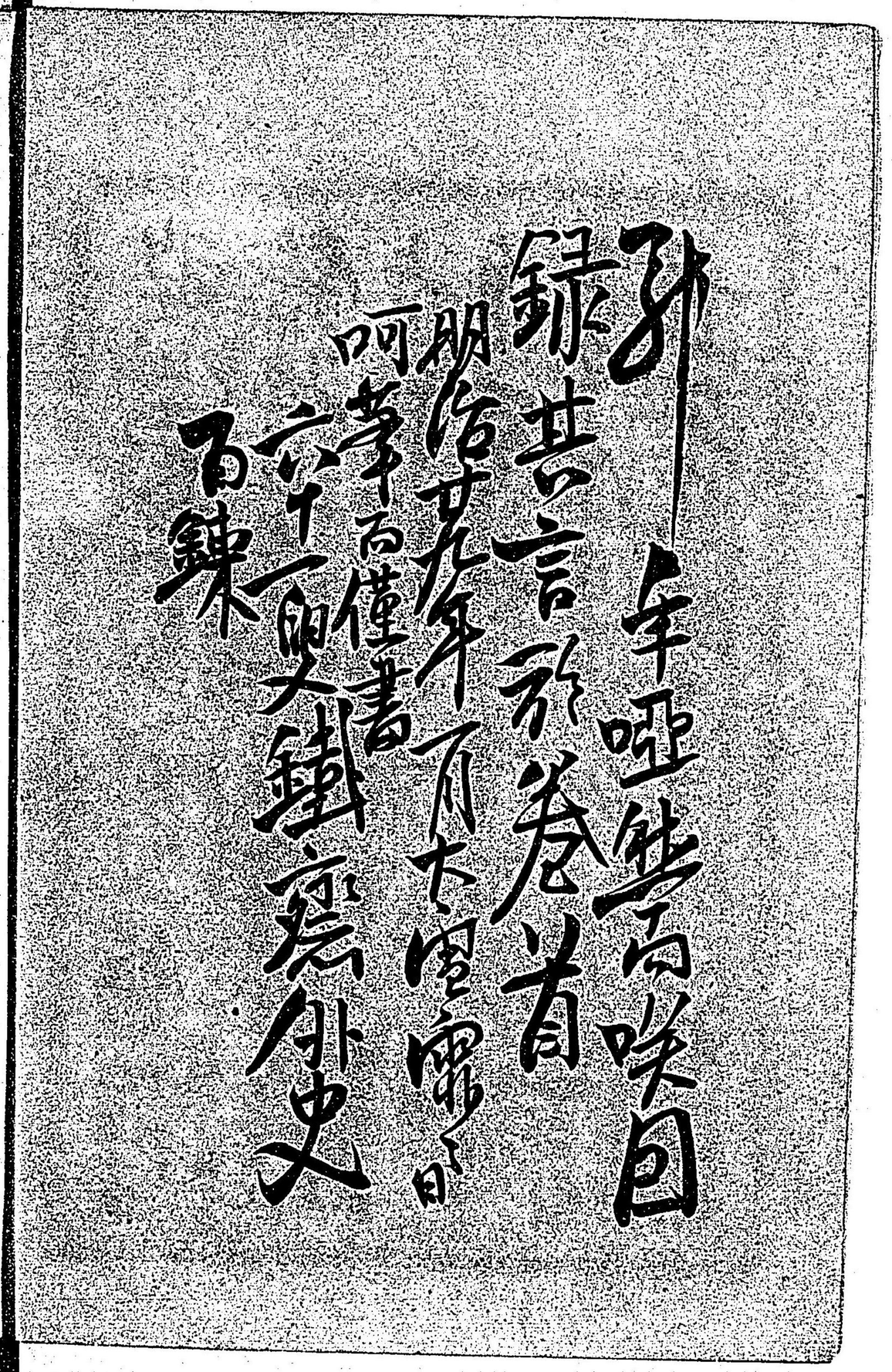
第三篇

目次

正法眼藏隨聞記

麓草分

快馬鞭



正法眼藏隨聞記

解題

本書は曹洞宗永平寺二世懐奘禪師が開祖道元禪師に隨侍せられし時學道の至要を聞くがまに〳〵記るされたるものにして其の金文玉字なること論を俟たず正さに是れ洞家の眼目たる「正法眼藏」の拾遺たる也

道元禪師初めの名は希玄、京兆の人、村上天皇五世の孫亞相通親公の子也、正治二年を以て生る年十四にして剃髪し尋て具戒を受く三學に通貫し最も台教に精し十八歳にして二たび大藏を閲し顯密の奥旨を究む疑ありて未だ決せず即ち三井の公胤僧正に投じて之を叩く胤曰く此旨幽深也說を成すありと雖も恐くは未だ善を盡くさず聞く宋國に佛心を傳ふる者あり乃ち能く子が疑を釋かんと因て建仁寺に抵て栄西禪師に參す禪師一見して直に大器を以て之を期す貞應二年商船に便乘して宋に入り徑山に登て派無際に謁す際之を許して掛搭入室せしむ未だ幾くならずして辭し去て雙徑に入り琰浙翁を禮す時に天

童の長翁淨禪師は具眼の大宗匠なりと聞き乃ち往て相見す淨、師を遇すること常に異なり師亦日夜勉勵して飢凍を忘るゝもの殆と二年、一夜淨、巡堂の次で僧の坐睡するを見て之を責めて曰く參禪は須らく身心脫落すべし只管打睡して什麼をか爲さんと師傍に在り之を聞て豁然として大悟す天明に方丈に入て燒香す淨曰く燒香して什麼をか爲さん師曰く身心脫落し來る淨曰く身心脫落脫落身心と師曰く濫りに某甲を印する莫れ淨曰く我れ濫りに汝を印せす師曰く如何か是れ濫りに印せざる底、淨曰く脫落々々と淨に服勤すること四載日に智證を增益し盡く其蘊を得たり既にして淨を辭し覲を解て歸航す實に安貞元年也乃ち京師に入て建仁に寓す天福年中弘誓院正覺等大禪苑を洛南に建て興聖寶林寺と號し師を請して開山第一祖と爲す寛元元年夏師退休の計を爲す雲州の太守波多野義重勝地を越前志比の里に相して堅く師を請す其境幽邃なるを以て師亦此に終焉の志あり居ること未た幾くならすして天下の宿衲臈至す明年秋義重大佛寺を剏む已にして開堂說法大に玄風を振ふ其叢林の規一

に天童に則る後ち大佛を改めて永平といふ後嵯峨帝、師の道譽を聽き賜ふに紫衣徽號を以てす師力辭すれとも許さず、よつて偈を獻して叡恩を謝す云く『永平雖レ出レ山淺シト、勅命重キ重々、却被レ猿鶴一笑ス、紫衣一老翁』と建長五年夏微恙を示す王公親族使を遣して之を迎ふ仲秋駕に命して洛に入り西洞院に館す緇白雲會し瞻禮虛晷なし帝官醫を遣して診せしむ語笑平日の如し八月二十八日怡然として坐化す世壽五十有四、法臘四十有一、洞門の眼目たる『正法眼藏』は則ち其著也

懷奘禪師、孤雲と號す洛陽の人、鳥居中納言爲實公の孫也、建久九年を以て生る幼より俗と雜り居るを喜はす遂に橫川の圓能に從て剃落し年二十一にして登壇受具す博く止觀法相俱舍成實三論を學して其源底を究め兼て淨土の法門を修す、一日喟然として嘆じて曰くたとひ普く三藏十二分經を究盡して說法雲の如く雨の如くなるも豈生死を免れんやと去て大和の多武峯に抵り覺晏師に謁して見性成佛の旨を聞く時に道元禪師宋より歸り洛の建仁寺に寓すと聞

き往て之に見る其言下に於て機あるを知て發せず禮辭して諸方に遊ぶ文曆元年冬再び元禪師に寶林に參し愈〻牆仞の高きを見て親炙す元容れて侍者と爲す師是れより斧搜鑿索盡く元の髓を得たり元、宇治の興聖に住し又越州の永平に遷る師皆之に從ふ建長五年の秋元法席を師に讓る師平日宗乘を負荷し禪規を振起す是に由て龍象歸仰し宰官贈禮して道價海内に高し弘安三年八月溘然として寂す世壽八十有三僧臘六十有二

顧ふに二祖の兒孫後來天下に多く宗風頗る熾盛を致せるのも豈二祖が遺德の致す所に非ずや

編者識

正法眼藏隨聞記序

余歲念七。閱二藏一於總一之山王林一。衆中二有二上毛一東海慧命一。長二于余一也。幾乎ト二十夏。雖レ然ト亦時二訪二藏殿一而話ス。因二謂ク曾テ留二錫一於越一之祖山一。拜二讀ス古寫一正法眼藏隨聞記ヲ。與下所二印版スル本上。對二考スル二之一ヲ。大二有二差異一。無レ暇二繕寫一。到レ今二慊慊タリト。畧話下自所二記持スル一之差異上ヲ。余聞テ歡喜。頗ル好本也。自レ爾追慕不レ止ス。到處尋二覓スル二之一ヲ。亦不レ獲。後二寓ス加一之大乘一。時二益堂甫公爲二堂頭一也。復示二ス如一向一ノ事一ヲ。後經テ十餘年一ヲ。粥二飯ス于空印一。前席雪心和尚ハ。是レ甫公ノ神足。以レ此ヲ語レ之。和尚謂ク。我レ知二其ノ事一ヲ。且ツ持ストニ其ノ本一ヲ。因テ懇請ノ拜讀ス。其ノ與二印版一。所二差異スル一之三家。皆符二合ス前聞一。雖レ然ト。住持事繁。無レ暇二淨寫一。泊テ隱二此ノ菴一。從二事テ于此一。幾乎ト周年。逐行較正ス。漸ク得二完全一ヲ。不レ欲二私淑一ヲ。重刻ノ以テ布二宇内一。因テ首二擧ス凡例一ヲ。令二讀者ヲシテ知二差異ノ之梗槩一ヲ。伏ノ冀ハ。祖訓親密ノ之諄諄。傳テ

之ヲ悠久ニ。以ヲ不ン與ニ鼎鹵一磷カ者ノ也。

寶暦八年戊寅二月吉日

若州永福開闢面山瑞方拜題

正法眼藏隨聞記第一

侍者懷奘編

一日示して云く、續高僧傳の中に、或禪師の會下に一僧あり、金像の佛と亦佛舍利とをあがめ用ゐて、衆寮等にありても常に燒香禮拜し、恭敬供養しき、有時禪師の云く、汝ぢが崇る處の佛像舍利は、後には汝がために不是あらんと、其の僧うけがはず、師云く、是れ天魔波旬の作す處なり、早く是を棄つべし、其の僧憤然として出ぬれば、師すなはち僧の後へに云ひ懸て云く、汝箱を開て是を見べしと、其の僧いかりながら、是を開てみれば、毒蛇わだかまりと臥せりと、是を以て思ふに、佛像舍利は如來の遺像遺骨なれば、恭敬すべしと云へども、また偏に是を仰ひて得悟すべしと思はゝ、還て邪見なり、天魔毒蛇の所領となる因緣なり、佛說の功德は定まれる事なれば、人天の福分となると生身と等しかるべし、總じて三寶の境界を恭敬供養すれば、罪滅び功

（来ることなし。一日示して云く、）（へるは道元禪師の聖示なり以下皆同じ）（波旬は梵語にして惡と譯しいふ世尊在世の時の魔王の名なり）

（叢林）僧の聚る處を名けて叢林といふ大樹の叢聚するを名けて林と爲すの義に取れる也

德を得、また惡趣の業をも消し、人天の果をも感ずることは實なり、是によりて法の悟りを得んと思ふは僻見なり、佛子と云は佛敎に順じて直に佛位に到る爲なれば、只敎に隨て工夫辨道すべきなり、其の敎に順ずる實の行と云は、即今の叢林の宗とする只管打坐なり、是を思ふべし、

亦云く、戒行持齋を守護すべければとて、强て宗として是を修行に立て、是によりて得道すべしと思ふも、亦これ非なり、只是れ衲僧の行履、佛子の家風なれば、隨ひ行ふなり、是れを能事と云へばとて、必すしも宗とする事なかれ、然あればとて破戒放逸なれと云には非す、若し亦かの如く挑せは邪見なり、外道なり、只佛家の儀式、叢林の家風なれば、隨順しゆくなり、是を宗とする事、宋土の寺院に寓せし時に、衆僧にも見て來らす、實の得道のためには唯坐禪工夫佛祖の相傳なり、是によりて一門の同學、五眼房故葉上僧正の弟子が、唐土の禪院にて持齋をかたく守りて、戒經を終日誦せしをば、敎て捨てしめたりしなり、

（佛照）は宋の東京法雲佛照の呆禪師なり（延壽堂）は涅槃堂ともいふ病人を扱ふ處なり

懷奘問て云く、叢林學道の儀式は百丈の淸規を守るべきか、然あれば彼れはじめに受戒護戒を以て先とすと見えたり、亦今の傳來相承は根本戒をさつくとみえたり、當家の口訣面授にも、西來相傳の戒を學人にさづく、是便ち今の菩薩戒なり、然あるに今の戒經に日夜に是を誦せよと云へり、何ぞ誦ずるを捨てしむるや、

師云く、しかなり、學人最とも百丈の規繩を守るべし、然あるに其の儀式は受戒護戒坐禪等なり、晝夜に戒經を誦し專ら戒を護持すと云は、古人の行履に隨て只管打坐すべきなり、坐禪の時何れの戒か持たざる、何れの功德か來らざる、古人行じおける處の行履皆深き心あり、私しの意樂を存せずして、衆に隨ひ、古人の行履に任せて行じゆくべきなり、

有時示して云く、佛照禪師の會下に一僧ありて、病患のとき肉食を思ふ、照是を許して食せしむ、ある夜自ら延壽堂に行て見たまへば、燈火幽にして病僧亦肉を食す、時に一鬼病僧の頭べの上にのり居て件の肉を食す、僧は我が

（五祖演）は宋の蘄州の五祖山の法演禪師なり

口に入ると思へども、我れは食せずして頭上の鬼が食するなり、然りしより後は病僧の肉食を好むをば、鬼に領せられたりと知て、是を許しきと、是について思ふに、許すべきか許すべからざるか、斟酌あるべし、五祖演の會にも肉食のことあり、許すも制するも古人の心、皆其意趣あるべきなり、

一日示して云く、人其家に生れ、其道に入らば、先づ其家業を修すべしと知るべきなり、我道にあらず己が分にあらざらんことを知り修すれば即ち非なり、今も出家人として、便ち佛家に入り僧侶とならば、須く其業を習ふべし、其業を習ひ其儀を守ると云は、我執をすてゝ知識の教に隨ふなり、其大意は貪欲無きなり、貪欲なからんと思はゞ、先づ須く吾我を離るべきなり、吾我を離るゝには、無常を觀ずる、是れ第一の用心なり、世人多くは、我はもとより人にもよしと云はれ思はれんと思ふなり、然れども能くも云はれ、思はれざるなり、次第に我執を捨て知識の言に隨ひゆけば、精進するなり、理を修すれば、彌よ沈淪するなり、禪僧の能くなる第一の用心は、只管打坐すべきなり、利鈍賢愚を論せず坐禪すれば、自然によくなるなり、

（不昧因果）とは因果歴然の義なり

示して云く、廣學博覽はかなふべからざることなり、一向に思ひ切て止べし、唯一事について用心故實も習ひ、先達の行履を尋ねて、一行を專らはげみて、人師先達の氣色すまじきなり、

或時問て云く、如何是不昧因果底道理、師云く、不動因果なり、云く、なんとしてか脫落せん、師云く、因果歴然なり、云くかくの如くならば因、果を引起すや、果、因を引起すや、師云く、總てかくの如くならばかの南泉の猫兒を斬るがごとき、大衆既に道ひ得ず、便ち猫兒を斬卻しおはりぬ、後に趙州頭に草鞋を戴きて出たりし、亦一段の儀式なり、亦云く、我れ若し南泉なりせば即ち云べし、道ひ得たりとも便ち斬卻せん、道ひ得ずとも便ち斬卻せん、何人か猫兒をあらそふ、何人か猫兒を救ふと、大衆に代て云ん、既に道ひ得ず、和尚猫兒を斬卻せよと、亦大衆に代て云ん、和尚只二刀兩段を知て一刀一段

（南泉云々）南泉和尚因みに東西兩堂猫兒を爭ふ泉のち提起して云く大衆道ひ得はず即ち救んば道ひ得ずんば即ち斬卻せんと無し遂衆晩に趙州外より歸る泉州に擧示する州乃ち履を脫て頭上に安して出づ泉

云く子若し在りしならば猫兒を救ひ得んと

を知らずと、奘云く、如何是一刀一段、師云く、猫兒是、亦云く、大衆不對の時、我れ南泉ならば、大衆既に道不得と云て、便ち猫兒を放下してまし、古人の云く、大用現前して軌則を存せずと、亦云く、今の斬猫は是便ち佛法の大用現前なり、或は一轉語なり、若一轉語にあらずば、山河大地妙淨明心と云べからず、亦即心是佛とも云べからず、便ち此一轉語の言下にて猫兒即佛身と見よ、亦此詞を聽て學人も頓に悟入すべし、亦云く、此斬猫即是佛行なり、喚て何とか云べき、云く、喚て斬猫と云べし、奘云く、是れ罪相なりや否や、云く罪相なり、奘云く、なにとしてか脫落せん、云く、別別無見なり、云く別解脫戒とはかくの如きを云か、云く然り、亦云く、たゞしかくの如きの料簡、たとひ好事なりとも無らんにはしかじ、

（料簡）料は量也揀簡也は擇斷也

奘問て云く、犯戒の語は受戒已後の所犯を云か、唯亦未受已前の罪相をも犯戒と云べきか、如何ん、

師答て云く、犯戒の名は受後の所犯を云べし、未受已前所作の罪相をば、只

罪相罪業と云て、犯戒と云べからず、

問て云く、四十八輕戒の中に、未受戒の所犯を犯と名くと見ゆ、如何ん、

答て云く、然らず、彼は未受戒の者今受戒せんとする時、所造の罪を懺悔するに、今の戒にのぞめて、前に十戒を授かりて犯し、後ち亦輕戒を犯するをも犯戒と云なり、以前所造の罪を犯戒と云にはあらず、

問て云く、今受戒せんとする時、まへに造りし所の罪を懺悔せんが爲に、未受戒の者に十重四十八輕戒を敎へて讀誦せしむべしと見えたり、亦下の文に、未受の前にして說戒すべからずと、此の二處の相違如何、

答て云く、受戒と誦戒とは別なり、懺悔のために戒經を誦ずるは、猶是念經なり、故に來受者戒經を誦せんとす、彼が爲に戒經を說かんこと咎あるべからず、下の文に、利養の爲のゆゑに未受戒の前にして是を說こと、を制するなり、今受戒の者に懺悔せしめん爲には最も是を敎ふべし、

問て云く、受戒の時は七逆の受戒を許さず、先の戒の中には逆罪も懺悔すべ

しと見ゆ、如何ん、

答て云く、實に懺悔すべし、受戒の時、許さゞることは且く抑止門とて抑ゆる義なり、亦上の文は破戒なりとも還得受せば、淸淨なるべし、懺悔すれば淸淨なり、未受に同からず、

問て云く、七逆すでに懺悔を許さは、亦受戒すべきか如何ん、

答て云く、然あり、故僧正自ら所立の義なり、既に懺悔を許す、亦是受戒すべし、逆罪なりとも、悔ゐて受戒せば授くべし、況や菩薩はたとひ自身は破戒の罪を受とも、他の爲には受戒せしむべきなり、

夜話に云く、惡口を以て僧を呵嘖し毀呰すること莫れ、設ひ惡人不當なりとも、左右なく惡くみ毀ることなかれ、先づいかにわるしと云とも、四人已上集會しぬれば、これ僧體にて國の重寶なり最も歸敬すべきものなり、若くは住持長老にてもあれ、若くは師匠知識にてもあれ、弟子不當ならば、慈悲心老婆心にて教訓誘引すべし、其時設ひ打べきをば打ち、呵嘖すべきをば呵嘖すとも、毀呰謗言の心を發すべからす、先師天童淨和尚住持のとき、僧堂にて衆僧坐禪の時、眠りを誡じむるに履を以て打ち、謗言呵嘖せしかども、衆僧皆打たるゝを喜び讚歎しき、有時亦上堂の次でに云く、我れ既に老後、今は衆を辭し、菴に住して、老を扶けて居るべけれども、衆の知識として、各の迷を破り道を授けんがために住持人たり、是に依て或は呵嘖の詞ばを出し、竹篦打擲等のことを行ず、是頗る怖れあり、然あれども佛に代て化儀を揚る式なり、諸兄弟慈悲を以て是を許し給へと言へば、衆僧皆流涕しき、此の如きの心を以てこそ、衆をも接し化をも宣ふべけれ、住持長老なればとて、亂に衆を領し、我が物に思ふて呵嘖するは非なり、況や其人にあらずして、人の短處を云ひ他の非を謗るは非なり、能々用心すべきなり、他の非を見て惡しゝと思ふて、慈悲を以て化せんと思はゝ、腹立まじきやうに、方便して、傍ら事を云ふやうにて、こしらふべきなり、

亦物語に云く、故の鎌倉の右大將、始め兵衞佐にて有し時、內裡の邊に、一

（故僧正）は建仁寺の榮西禪師也

（天童淨和尚）は宋の明州天童山の長翁如淨禪師にして道元禪師の本師なり

日はれの會に出仕の時、一人の不當人ありき、其時の大納言あふせて云く、是を制すべしと、大將の云く、六波羅に仰せらるべし、平家の將軍なりと、大納言の云く、近か〳〵なればなりと、大將の云く、其の人に非ずと、是れ美言なり、此の心にて後には世をも治められしなり、今の學人も其心あるべし、其人にあらずして人を呵すること莫れ、

夜話に云く、昔魯仲連と云ふ將軍ありき、平原君が國に在て能く朝敵をたひらゞ、平原君賞して數多の金銀等を與へしかば、魯仲連辭して云く、只だ將軍のみちなれば敵を能く討のみなり、賞を得て物をとらん爲めに非ず云て、敢て取らずと云ふ、魯仲連が廉直とて名譽のことなり、俗猶を賢なるは、我れ其の人として、其の道の能をなすばかりなり、かはりを得んと思はず、學人の用心もかくの如くなるべし、佛道に入り、佛法の爲に諸事を行して、代に所得あらんと思ふべからず、內外の諸敎に皆無所得なれとのみ勸むるなり、

法談の次に、示して云く〳〵、設使我れは道理を以て云ふに、人はひがみて僻事を云ふ、理を攻て云ひ勝つはあしきなり、亦我は現に道理と思へども、吾が非にてそと云て、はやくまけて退くもあしばやなり、只人をも云ひ折らず、我が僻ことにも謂はず、無爲にして止みぬるが好きなり、耳に聽入れぬやうにして忘るれば、人も忘れて嗔らざるなり、第一の用心なり、

（顯密）顯は顯露定敎なり密は祕密不定敎なり

示して云く、無常迅速なり、生死事大なり、且く存命の際だ、業を修し學を好まず、只佛道を行じ佛法を學すべきなり、文筆詩歌等其の詮なき事なれば、捨べき道理なり、佛法を學し、佛道を修するにも、猶を多般を兼學すべからず、況や敎家の顯密の聖敎、一向にさしおくべきなり、佛祖の言語すら多般を好み學すべからず、一事を專らにせんすら、鈍根劣器の者はかなふべからず、況や多事を兼て、心操をとゝのへさらんは不可なり、

示して云く、昔し智覺禪師と云し人の發心出家のこと、此の師は初は官人なり、才幹に富み、正直の賢人なり、國司たりし時、官錢をぬすみて施行す、傍人是を帝に奏す、帝聞て大に驚怪す、諸臣も皆あやしむ、罪過すでに輕か

らず、死罪におこなはるべしと定まりて、爰に帝議して云く、此臣は才人なり賢者なり、今ことさらに此罪を犯す、若し深き心あるか、頸を截らんとき悲み愁へたる氣色あらば速かに截るべし、若し其の氣色なくんば定めて深き心あらん、截るべからずと、敕使引去て截らんとする時少も愁る氣色なし、還て喜ぶ氣色あり、自ら云く、今生の命は一切衆生に施すと、敕使驚き怪で帝に奏聞す、帝云く然り、定て深き心有ん、此事あるべしと兼て是を知ると、依て其志を問ふ、師云く、官を辭して命を捨て、施を行じて衆生に緣を結び、生を佛家に受て一向に佛道を行せんと思ふと、帝是を感じて許して出家せしむ、故に延壽と名を賜ふ、殺すべきをとゞむる故なり、今の衲子も是らはどの心を一度發すべきなり、命を輕じ衆生を憐む心深くして、身を佛制に任せんと思ふ心を發すべし、若し先きより此の心一念も有らば失なはじと保つべし、是れはどの心一度おこさずして佛法を悟ることは有るべからざるなり、

夜話に云く、祖席に禪話をこゝろゑる故實は、我が本より知り思ふ心、次第

次第に知識の詞に隨ひて改めもて行くなり、假令佛と云は我れが本より知たりつるやうは、相好光明具足し、說法利生の德ありし釋迦彌陀等を佛と知たりとも、知識若し佛と云は蝦蟆蚯蚓ぞと云はゞ、蝦蟆蚯蚓を是れぞ佛と信じて日比の知解を捨つべきなり、此の蚯蚓の上に佛の相好光明、種々の佛の所具の德を求むるも、猶情見あらたまらざるあり、只當時の見ゆる處を佛と知なり、若し此の如く詞に隨て情見本執をあらため行かば、自ら契ふ處ろあるべきなり、然あるに近代の學者自らの情見を執し、已見を本として、佛とはかふてそあるべけれと思ひ、亦吾が存ずるやうに差へば、さはあるまじいなんどゝ云て、自らが情量に似たることやあらんと迷ひありくはどに、大方佛道の精進なきなり、亦身を惜まずして、百尺の竿頭に上りて、手足を放て一步を進めよと云ふ時は、命ちありてこそ佛道も學すべけれと云て、眞實に知識に隨順せざるなり、能々思量すべきなり、

夜話に云く、世間の人も衆事を兼學して、何れも能くせざらんよりは、只一

事を能くして、人前にしても、しつべきほどに學すべきなり、況や出世の佛法は、無始より以來修習せざる法なり、故に今も疎し、我性も拙し、高廣なる佛法に事の多般を兼ねれば一事をも成すべからず、一事を專にせんすら、本性昧劣の根器、今生に窮し難し、努めて學人一事を專らにすべし、

葉間て云く、若し然らば何ごといかなる行か佛法に專ら好み修すべき、師云く、機に隨ひ根に順ふべしと云へども、今祖席に相傳して專らする處は坐禪なり、此の行能く衆機を兼ね、上中下根ひとしく修し得べき法なり、我れ大宋天童先師の會下にして、此道理を聞て後ち、晝夜に定坐して、極熱極寒には發病しつべしとて、諸僧しばらく放下しき、我れ其の時自ら思はく、設ひ發病して死すべくとも猶只是れを修すべし、病ひ無ふして修せず、此の身をいたはり用ひて何の用ぞ、病ひして死せば本意なり、大宋國の善知識の會下にて、修し死に死して、よき僧にさばくられたらんは先づ勝緣なり、日本にて死せば、是れほどの人に如法佛家の儀式にて沙汰すべからず、修行していまだ契

悟せざらん先に死せば、結緣として生を佛家に受くべし、修行せずして身を久く持ても詮無きなり、なんの用ぞ、況や身を全ふし病ひ起らじと思はんはどに、知らず亦海にも入り横死にもあはん時は、後悔いかん、此の如く案じつゞけて、思ひ切て晝夜端坐せしに、一切に病ひ發らず、今各も一向に思ひきりて修して見よ、十人は十人ながら得道すべきなり、先師天童の勸めかくの如し、

示して云く、人は思ひ切て命をも棄て、身肉手足をも截ることは中々せゝるゝなり、然あれば世間の事を思ふに、名利執心の爲にも多くかくの如く思ひ切るなり、只依り來る時に、事に觸れ物に隨て、心品を調ふること難きなり、學者身命を捨ると思ふて、且くおしゝづめて、云ふべきことをも、修すべきことをも、道理に順ずるか順せざるかと案じて、道理に順せば云ひ、若くは行じもすべきなり、

示して云く、學道の人、衣糧を煩ふこと莫れ、只佛制を守て、世事を營むこ

（常乞食）とは常に乞食を行して色身を資け以て道業を助成する是なり

（神丹）震旦なるべし支那の非なり

（常住物）は厨庫衆具華果樹林田園僕畜等なり

と莫れ、佛の言く、衣服に糞掃衣あり、食に常乞食あり、いづれの世にか此の二事の盡ることと有ん、無常迅速なるを忘れて、徒らに世事に煩ふこと莫れ、露命の且く存せるわひだ、佛道を思て餘事をことゝすることと莫れ、

有人問て云く、名利の二道は捨離し難しと云へども、行道の大なる礙りなれば、捨てずんばあるへからず、故へに是れを捨つ、衣糧の二事は小緣なりと云へとも、行者の大事なり、糞掃衣常乞食は是れ上根の所行、亦是西天の風流なり、神丹の叢林には常住物等あり、故に其煩ひ無し、我か國の寺院には常住物なし、乞食の儀も即ち絶て傳はらず、下根不堪の身いかゝせん、然あらば予が如きは檀信の信施を貪らんとするも、虛受の罪隨ひ來る、田商士工を營むは是れ邪命食なり、只天運に任せんとすれば果報亦貧道なり、飢寒來らん時是を愁ひとして行道を礙へつべし、或人諫めて云く、你が行儀はなはだし、時を知らず機をかへり見ざるに似たり、下根なり、末世なり、かくの如く修行せば、亦退轉の因緣となりぬべし、或は一檀那をも相かたらひ、若は一外護をもちぎりて、閑居靜處にして、一身をたすけて衣糧に煩ふこと無く、靜に佛道を行すべし、是れ便ち財物等を貪るに非ず、暫時の活計を具して修行すべしと、此の詞を聞くと云へどもいまだ信用せず、かくの如きの用心いかん、

（外典）總して佛書を內典とし其他の書を外典といふこゝには論語を指していへり

答て云く、但夫れ衲子の行履、佛祖の家風を學ぶべし、三國ことなりといへども、眞實學道の者いまだ此の如きの事あらず、只心を世事に執着することなれ、一向に道を學すべきなり、佛の言く、衣鉢の外は寸分も貯へざれ、乞食の餘分は飢たる衆生に施せ、設ひ受け來るとも寸分貯ふべからず、況や馳走あらんや、外典に云く、朝に道を聞て夕べに死すとも可なりと、設ひ飢に死に寒に死すとも、一日一時なりとも佛敎に隨ふべし、萬劫千生幾回か生じ幾度か死せん、皆な是れ世緣妄執の故へなり、今生一度佛制に隨て餓死せん、是れ永劫の安樂なるべし、いかに況や未だ一大藏敎の中にも、三國傳來の佛祖一人も飢に死にし、寒に死にしたる人ありときかず、世間衣糧の資具は生

得の命分ありて、求に依ても來らず、求ざれども來らざるにも非ず、只任運にして心に挾むこと莫れ、末法なりと謂ふて、今生に道心發さずば、何れの生にか得道せん、設ひ空生迦葉の如くにあらずとも、只隨分に學道すべきなり、外典に云く西施毛嬙にあらざれども色を好む者は色を好む、飛兎綠耳に非ざれども馬を好む者は馬を好む、龍肝鳳髓にあらざれども味を好む者は味を好む、只隨分の賢を用るのみなり、俗なほ此の儀あり、佛家亦かくの如くなるべし、況や亦佛二十年の福分を以て末法の我らに施す、是に依て天下の叢林人天の供養絶ず、如來神通の福德自在なるも、馬麥を食して夏を過しましましき、末法の弟子豈に是を慕はざらんや、

問て云く、破戒にして虛く人天の供養を受け、無道心にして徒に如來の福分を費やさんより、在家人に隨ふて、在家の事をなして、命ながらへて能く修道せんこと如何ん、

答て云く、誰か云ひし、破戒無道心なれと、只强て道心を發し、佛法を行ずべきなり、いかに況や持戒破戒を論せず、初心後心を分かたず、齊しく如來の福分を與ふとは見えたれども、破戒ならば還俗すべし、無道心ならば修行せざれとは見えず、誰人か初めより道心ある、只かくの如く發し難きを發し、行じがたきを行ずれば、自然に增進するなり、人々皆な佛性あり、徒らに卑下すること莫れ、亦文選に云、一國爲二一人一興、先賢爲二後愚一廢と、言ふこゝろは、國に賢者一人出來れば其の國興る、愚人ひとり出來れば先賢のあと廢るゝなり、是を思ふべし、

雜話の次でに云く、世間の男女老少多く交會婬色等の事を談ず、是を以て心を慰むるとし、興言とすることあり、一旦意をも遊戲し、徒然も慰むるに似たりと云ふとも、僧はもつとも禁斷すべきことなり、俗猶よき人、まことしき人の、禮儀をも存じ、げにげにしき談の時、出來らざることなり、只亂醉放逸なる時の談なり、況や僧は專ら佛道を思ふべし、雜語は希有異體の亂僧の云ふことなり、宋土の寺院なんどには都て雜談をせざれば、其やうなること、

をも云はざるなり、吾が國も近ごろ建仁寺の僧正存生の時は、一向あからさまにも此の如きの言語出來らず、滅後にも存世の時の弟子等、少々殘りとゞまりたりし時は一切に云はざりき、近ごろ此の七八年より以來、今ま出の若き人たち時々談ずるなり、存外の次第なり、聖教の中にも麁强惡業令人覺悟無利言說能障正道とありて、只うち出して云處の言ばすら、無利の言說は障道の因緣なり、況やかくの如きの言語は、ことばに引れて卽ち心も起りつべし、最も用心すべきなり、故さらにかくなん云はじとせずとも、惡きことゝ知りなば漸々に退治すべきなり、

夜話に云く、世人多く善事を作す時は、人に知られんと思ひ、惡事を作す時は、人に知られじと思ふに依て、此の心冥衆の心に合はざるに依て、所作の善事には感應なく、密に作す所の惡事には罰あるなり、是に仍て還て自ら謂く、善事には驗しなし、佛法の利益すくなしと思へるなり、是れ卽ち邪見なり、最も改むべし、人も知らざる時に密に善事をなし、惡事を錯りて、後には發露してとがを悔ゆ、かくの如くすれば、便ち密々になす處の善事には感應あり、露るゝ惡事は懺悔せられて、罪滅する故に、自然に現益もあるなり、當果をも亦知るべし、

（當果）は未來の果報なり

爰に有る在家人來りて、問て云く、近代在家人、衆僧を供養し、佛法を歸敬するに、多く不吉のこと出來るに依て、邪見起り三寶に歸せじと思ふ、いかんと、

答て云く、是は衆僧佛法の咎にはあらず、便ち在家人自らの錯なり、其の故は、假令人目ばかりに持戒持齋の僧をば貴び供養し、破戒無慚の飲酒食肉等するをば不當なりと思ふて供養せず、此の差別の心寔とに佛意にそむけり、故に歸敬の功もむなしく感應もなきなり、戒の中にも處々に此の心を誡めたり、僧ならば德の有無を擇らまず、只供養すべきなり、殊に其の外相を以て內德の有無を決定すべからず、末世の比丘いさゝか外惡相尋常ならぬ處見ゆれども、亦是れにまされる惡心も惡事もあるなり、然る間たよき僧あしき僧を

（現生後報）一に現世は現報也現世に惡を作り現世に直に苦惡樂の報を受くるをいふ　二に生は生報也今世の善惡の果報を來世に受くるをいふ　三に後報とは過去及今生の善惡の報を今世に受け或は未來無量生の中に受をいふ

差別し思ふこと無ふして、佛弟子なれば貴びて、平等の心にて供養歸敬もせば、必ず佛意に契ふて、利益もひろかるべし、亦冥機冥應顯機顯應等の四句あることを思ふべし、亦現生後報等の三時業のこともあり、是らの道理能々學すべきなり、

夜話に云く、若し人來て用事を云ふ中に、或は人にものをこひ、或は訴訟等のことをも云んとて、一通の狀をも所望すること出て來ること有んに、其の時我は非人なり、遁世籠居の身なれば、在家等の人に非分のことを云んは非なりとて、眼前の人の所望をかなへずば、實に非人の法には似たれども、其の心中をさぐるに、猶我れは遁世非人なり、非分のことを人に云はゞ、人定めてわるく思ひてんと云ふ道理を思ふて聽かずんば、なを是れ我執名聞なり、只其の時に望んで能々思量して、眼前の人の爲に一分の利益となるべき事をば、人のあしく思はんことをも顧みず、なすべきなり、此のこと非分なり、わるしとて、疎みもし中をもたがはんも、かくの如くの不覺の知音、中たがはん事何か苦るしかるべき、外には非分の僻事をすると人には見ゆるとも、内には我執を破り、名聞を捨つる第一の用心なり、佛菩薩は人の來て請ふときは、身肉手足をも截れり、況や人來て一通の狀をこはんに、名聞計りを思ふて其の事を聞かぬは是れ我執深きなり、人々ひじりならず、非分の事を云ふ人かなと、所詮なく思ふとも、我は名聞をすてゝ一分の人の利益とならば、眞實の道に相應すべきなり、古人も其の義あるかと見ゆること多し、我も其の義を思ふて、少々檀那知音の思ひかけざる事を、人に申傳へて給はれと云事をば、文み一通遣りて一分の利益を作すは易きことなり、

裝問て云く、此こと寔に然り、たゞし善事にて人の利益とならんことを人にも云ひ傳へんは最もなるべし、若し僻事を以て人の所帶を取んと思ひ、或ひは人の爲にわしき事を云んをば云ひ傳ふべきや、如何ん、

師云く、理非等のことは我が知るべきに非ず、只一通の狀を乞へば與ふれども、理非に任せて沙汰あるべき由をこそ人にも云ひ、狀にも載すべけれ、請

け取て沙汰せん人こそ、理非をば明らむべけれ、吾が分上にあらぬ此の如きことを、理を枉てその人に云んことも亦非なり、亦現の僻事なれども、我を大事にも思ふ人にて、此の人の云んことは善惡たがへじと思ふほどの知音ありて、檀那の處へひがごとを以て不得心の所望をなさば、其れを只今その人より所望のことを一往聞くとも、彼の狀には去り難く、申せば申すばかりなり、道理に任せて沙汰あるべしと書くべきなり、一切に是なれば彼れも是れも遺恨あるべからざるなり、此の如くのこと、人に對面をもし、出來ることにつきて、能々思量すべきなり、所詮は事に觸て、名聞我執を捨つべきなり、夜話に云く、今ま世出世間の人、多分は善事をなしては、かまへて人に知られんと思ひ、惡事を作して人に知られじと思ふ、是に依て內外不相應のこと出で來たる、あひかまへて內外相應じ、錯まりを悔ゐ、實德をかくして、外相をかざらず好事をば他人にゆづり、惡事をば己れにむかふる志氣あるべきなり、

問て云く實德を藏し外相を飾らざらんこと、寔とに然るべし、但し佛菩薩は大悲利生を以て本とす、無智の道俗等外相の不善を見て是を謗り難せば、謗僧の罪を感せん、實德を知らずとも、外相を見て貴とび供養せば、一分の福分たるべし、是らの斟酌いかなるべきぞ、

答て云く、外相を飾らずとて、卽ち放逸ならば亦是れ道理に差ふ、實德を藏すと云ふて、在家等の前にて惡行を現せば亦た是れ破戒の甚たしきなり、只希有の道心者、道者の由を人に知られんと思ひ、身にある失を人に知られじと思へども、諸天善神及び三寶の冥に知見する處なり、夫をば愧ずして、世人に貴とびられんと思ふ意ろを誡むるなり、只時にのぞみ事に觸て、興法の爲め利生の爲に、諸事を斟酌すべきなり、擬して後に云ひ、思て後に行して、卒暴なること莫れとなり、一切のことにのぞんで道理を案ずべきなり、念々止まらず、日々遷流して、無常迅速なること眼前の道理なり、知識經卷の敎へを待つべからず、只念々に明日を期することなく、當日當時ばかりを思ふ

て、後日は太だ不定なり、知り難ければ、只今日ばかり存命のはど、佛道に隨はんと思ふべきなり、佛道に隨ふと云は、興法利生の爲に身命を捨てゝ、諸事を行じもてゆくなり、

問て曰く、佛敎のすゝめに隨はゞ、乞食等を行ずべきか、如何ん、

答ふ、然あるべし、たゞし是れは土風に隨て斟酌あるべし、なににても利生も廣く、我が行もすゝまんかたにつくべきなり、是らの作法通路不淨にして、佛衣を着して經行せばけがれつべし、亦人民貧窮にして、次第乞食もかなふべからず、行道も退きつべく、利益も廣からざらんか、只土風をまもり、尋常に佛道を行じ居たらば、上下の輩から自ら供養を作し、自行化他成就せん、此の如きの事も、時に臨み、事に觸て、道理を思量して、人目を思はず、自らの益を忘て、佛道利生の爲に能やうに計ふべし、

示して云く、學道の人世情を捨つべきについて、重々の用心あるべし、世をすて、家をすて、身をすて、心を捨つるなり、能々思量すべきなり、世を遁て山林に隱居すれども、吾が重代の家を絶やさず、家門親族のことを思ふもあり、亦世をものがれ、家をもすてゝ、親族境界をも遠離すれども、我が身を思て、苦るしからんことをばせじ、病ひ起るべからん事は佛道なりとも行せじと思ふも、いまだ身を捨ざるなり、亦身をも惜まず、難行苦行すれども、心佛道に入らずして、我が心に差ふことをば、佛道なれども せじと思ふは、心を捨ざるなり、

正法眼藏隨聞記第一終

正法眼藏隨聞記第二

侍者懷奘編

示して云く、行者先づ心をたにも調伏しつれば、身をも世をも捨ることは易きなり、只言語につけ行儀につけて、人目を思ひて、此の事は惡事なれば人あしく思ふべしとてなさず、我れ此の事をせんこそ佛法者と人は見んとて、事に觸て善きことをせんとするも猶は世情なり、然あればとて、亦恣いまゝに我が心に任せて惡事をするは一向の惡人なり、所詮惡心を忘れ、我が身を忘れて、只一向に佛法の爲にすべきなり、向ひ來らんごとに隨て用心すべきなり、初心の行者は、先づ世情なりとも、人情なりとも、惡事をば心に制し、善事をば身に行するが便ち身心を捨つるにて有るなり、

示して云く、故僧正建仁寺におはせし時、獨りの貧人來りて云く、我が家貧うして、絶煙數日におよぶ、夫婦子息兩三人餓死しなんとす、慈悲を以て是

れを救ひ給へと云ふ、其の時房中に都て衣食財物等無し、思慮をめぐらすに計畧つきぬ、時に藥師の像を造らんとて、光の料に打のべたる銅少分ありき、是れを取て自ら打をり、束ねまるめて、彼の貧客にあたへて云く、是を以て食物にかへて餓をふさぐべしと、彼の俗よろこんで退出しぬ、時に門弟子等難じて云く、正しく是れ佛像の光なり、これを以て俗人に與ふ、佛物己用の罪如何ん、僧正の云く、誠に然り、但し佛意を思ふに、佛は身肉手足を割きて衆生に施こせり、現に餓死すべき衆生には、設ひ佛の全體を以て與ふるとも佛意に合ふべし、亦云く、我れは此の罪に依て惡趣に墮すべくとも、只衆生の飢ゑを救ふべしと云々、先達の心中のたけ、今の學人も思ふべし、忘るゝこと莫れ、

亦有る時、僧正の門弟等の僧の云く、今の建仁寺の寺屋敷川原に近し、後代に水難ありぬべしと、僧正の云く、我れ寺の後代の亡失是れを思ふべからず、西天の祇園精舍もいしずゑばかりとゞまれり、然あれども、寺院建立の功德

失すべからず、亦當時一年半年の行道、其の功德莫大なるべしと、今ま是れを思ふに、寺院の建立寔に一期の大事なれば、未來際をも兼て難無きやうにこそ思ふべけれども、さる心中にも亦此の如きの道理存せられたる心のたけ、寔に是れを思ふべし、

夜話に云く、唐の太宗の時、魏徵奏して云く、土民等帝を謗することありと、帝云く、寡人仁ありて人に謗せられば愁ひとすべからず、仁無ふして人に讃せられば是れを愁ふべしと、俗猶をかくの如し、僧は最も此の心あるべし、慈悲あり道心ありて、愚癡人に誹謗せられんは苦しかるべからず、無道心にて人に有道と思はれんは、是れを能々つゝしむべし、

亦示して云く、隋の文帝の云く、密々に德を修して飽けるをまつ、言ふ心はよき道德を修して、あけるをまちて、民をいつくしうするとなり、僧猶を是に及ばずんば、もつとも用心すべきなり、只内に道業を修すれば、自然に道德外にあらはれて、人に知れんことを期せず望まずして、只もつはら佛敎にしたがひ、祖道に隨がひゆけば、人自づから道德に歸するなり、こゝに學人の錯まり出で來るやうは、人にたつとばれ、財寶いで來るを以て、道德のあらはれたると自からも思ひ、人も知り思ふなり、是れ卽ち天魔波旬のつきたると心にしりて、最も思量すべし、敎の中に是は魔の所爲と云ふなり、いまだ聞かず三國の例、財寶にとみ、愚人の歸敬をもつて道德とすべきことを、道心者と云ふは昔しより三國みな貧にして、身をくるしくし、一切を省約して、慈あり道あるをまことに行者と云ふなり、德のあらはるゝと云も、財寶にゆたかに、供養にほこるを云にあらず、德の顯はるゝに三重あるべし、先つは其の人其の道を修するなりと知らるゝなり、次には其の道を慕ふ者いで來る、後には其の道をおなじく學し同じく行ずる、是を道德のあらはるゝと云ふなり、

夜話に云く、學道の人は人情を棄べきなり、人情をすつると云は、佛法に隨がひ行くなり、世人多く小乘根性にて、善惡をわきまへ、是非を分ちて、是

をとり非をすつるは、みな是れ小乘根性なり、只先つ世情をすてゝ佛道に入るべし、佛道に入るには、我こゝろに善惡を分ちて、よしと思ひ、惡しゝと思ふことをすてゝ、我が身よからん我が意なにとあらんと思ふ心をわすれて、善くもあれ、惡くもあれ、佛祖の言語行履に隨がひゆくなり、吾が心に善しと思ひ、亦世人のよしと思ふこと、必らずしも善からず、然あれば人めもわすれ、吾が意をもすてゝ、佛敎に隨がひゆくなり、身もくるしく、心も愁ふるとも、我が身心をば一向にすてたるものなればと思ふて、苦るしくうれへつべきことなりとも、佛祖先德の行履ならばなすべきなり、此の事はよきこと佛道にかなひたらめと思ふて、なしたく行じたくとも、もし佛祖の行履に無からん事はなすべからず、是れ必らす法門をもよくこゝろ得たるにてあるなり、吾が心にも亦本より習ひ來たる法門の思量をは棄てゝ、只今見る所の祖師の言語行履に次第に心を移しもてゆくなり、かくのごとくすれば、智慧もすゝみ悟りも開くるなり、本より學せし處の敎家文字の功もすつへき道理あらは棄てゝ、今の義につきて見るへきなり、法門を學する事は、本より出離得道のためなり、我が所學多年の功つめり、なんぞたやすく捨てんと、猶を心深く思ふ、即ち此の心を生死繫縛の心と云ふなり、能々思量すべし、

夜話に云く、故建仁寺僧正の傳をば、顯兼中納言入道の書れたるなり、其の時辭することばに云く、儒者に書かせらるべきなり、そのゆへは儒者はもとより身をわすれて、幼き時より長となるまで學問を本とす、故にかき出したるものに誤まり無きなり、只の人は身の出仕交衆を本として、かたはらごとに學問をもするあひだ、自から好人あれども、文筆のみちにも誤まり出で來るなりと、是を思ふに、昔しの人は外典の學問も身をわすれて學するなり、亦云く、故公胤僧正の云く、道心と云ふは、一念三千の法門なんどを、胸の中に學し入れてもちたるを道心と云ふなり、なにと無く笠を頸に懸て迷ひありくをば、天狗魔緣の行と云ふなり

夜話に云く、故僧正の云く、衆僧各所用の衣糧等の事、予があたふると思ふ事

（公胤僧正）は三井寺の僧にして開祖の師なり

なかれ、皆な是れ諸天の供する所ろなり、吾れは取り次ぎ人にあたりたるばかりなり、亦各一期の命分具足す、奔走すること莫れ、吾が恩と思ふこと莫れと、常にすゝめられける、是れ第一の美言とおぼゆるなり、亦大宋宏智禪師の會下、天童は常住物千人の用途なり、然あれば堂中七百人堂外三百人にて、千人につもる、常住物なるに、好き長老の住したる故へに、諸方の僧雲集して、堂中千人なり、其外に五六百人あるなり、知事の人、宏智に訴へて云く、常住物は千人の分なり、衆僧多く集まりて用途不足なり、枉げてはなたれんと申しゝかば、宏智云く、人々みな口あり、汝ぢか事にあづからず、歎くこと莫れと云々、今ま是を思ふに、人々皆生得の衣食あり、思念によりても出で來らず、求めざれば來らざるにもあらず、在家人すらなほ運に任かせて、忠を思ひ孝を學す、いかに況や出家人はすべて他事を管せんや、釋尊遺付の福分あり、諸天應供の衣食あり、亦天然生得の命分あり、求めず思はずとも、任運に命分あるべきなり、直饒ひ走り求めて、寶をもちたりとも、無常忽ち

に來らん時如何ん、故へに學人は只須からく餘事を心ろにとゞめず、一向に學道すべきなり、亦ある人の云く、末世邊土の佛法興隆は、閑居靜處をかまへ、衣食等の外護にわづらひなく、衣食具足して佛法修行せば、利益も廣かるべしと、今これを思ふに然らず、それに付ては有相著我の諸人あつまり學せんはさに、その中には一人も發心の人は出來るまじ、利養につき、財欲にふけりて、縱ひ千萬人集りたらんも、一人無からんに猶おとるべし、惡道の業因のみ自ら積で、佛法の氣分なきゆゑなり、もし清貧艱難にして、或は乞食し、あるひは果蓏等を食して、常に飢饉して學道せんに、是れを聞て、若し一人も來り學せんと思ふ人あらんこそ、誠との道心者、佛法興隆ならめとおぼゆれ、艱難清貧によりて、もし一人もなからんと、衣食ゆたかにして、諸人あつまりて、佛法の無からんとは、只八兩と半斤となり、亦云く、當世の人多く造像起塔等の事を佛法興隆と思へり、是れ亦非なり、直饒ひ高堂大觀、玉をみがき金をのべたりとも、是れに依て得道の者あるべ

からず、只在家人の財寶を佛界に入れて、善事をなす福分なり、亦小因大果を感ずることわれども、僧徒の此の事をいとなむは佛法興隆にはあらざるなり、たとひ草菴樹下にてもあれ、法門の一句をも思量し、一と時の坐禪をも行せんこそ、誠の佛法興隆にてあらめ、今は僧堂を立んとて、勸進をもし隨分にいとなむ事は、必ずしも佛法興隆と思はず、只當時學道する人もなく、いたづらに日月を送るあひだ、只あらんよりはと思ふて、迷徒の結緣ともなれかし、亦當時學道の徒がらの坐禪の道場のためなり、亦思ひ始めたる事のならぬとても恨みあるべからず、只柱ち一本なりとも立てゝ置たらば、後來もかく思ひくはだてたれども、成らざりけりと見んも、苦るしかるべからずと思ふなり、

亦ある人勸めて云く、佛法興隆のために關東に下向すべしと、

答て云く、然らず、若し佛法に志しあらば、山川江海を渡りても來て學すべし、志ざし無らん人に、往き向ふて勸むるとも、聞き入れんこと不定なり、

只我資緣のために人を誑惑せんか、亦財寶を貪らんがためか、其れは身の苦しみなれば、行かでもありなんと覺ゆるなり、

亦云く、學道の人教家の書籍をよみ、外典等を學すべからず、見るべくんば語錄等を見るべし、其の餘はしばらく是を置べし、近代の禪僧頌を作くり、法語を書かんがために、文筆等をこのむ、是れ便ち非なり、頌につくらずとも、心に思はんことを書出し、文筆とゝのはずとも法門をかくべきなり、是をわるしとて見ざらんほどの無道心の人は、よく文筆を調べていみじき秀句ありとも、只言語ばかりを翫んで理を得べからず、我れ本と幼少の時より好のみ學せしことなれば、今もやゝもすれば外典等の美言案ぜられ、文選等も見らるゝを詮なき事と存ずれば、一向にすつべき由を思ふなり、

一日示して云く、吾れ在宋の時、禪院にして古人の語錄を見し時、ある西川の僧、道者にてありしが、我に問て云く、語錄を見て何の用ぞ、答て云く、古人の行履を知ん、僧の云く、何の用ぞ、云く鄉里にかへりて人を化せん、

僧の云く、何の用ぞ、云く利生のためなり、僧の云く、畢竟して何の用ぞと、予後に此の理を案ずるに、語錄公案等を見て古人の行履をも知り、あるひは迷者のために說き聽かしめん、皆な是れ自行化他のために畢竟じて無用なり、只管打坐して大事をあきらめなば、後には一字を知らずとも、他に開示せんに用ひつくすべからず、故に彼の僧畢竟してなにの用ぞとは云ひける、是れ眞實の道理なりと思ひて、其の後語錄等を見ることをやめて、一向に打坐して大事を明らめ得たり、

夜話に云く、其實內德なふして人に貴びらるべからず、此の國の人は眞實の內德をば知らずして、外相を以て人を貴とぶほどに、無道心の學人は、即ち惡道にひきおとされて、魔の眷屬となるなり、人に貴とびられんは安き事なり、中々身を捨て世にそむく由を以て爲すは、外相ばかりの假令なり、只なにともなく世間の人の樣にて、內心を調へもてゆくが是れ實の道心者なり、然あれば古人の云く、內ち空しふして外したがふと、云心は、內心は我心なふして、外相は他に隨がひもてゆくなり、我が身我が心と云ふ事を一向に忘れて、佛法に入て佛法のおきてに任かせて、行じもてゆけば、內外ともによく、今も後もよきなり、佛法の中もそぞろに身をすて、世をすつればとて、棄つべからざる事をすつるは非なり、此の土の佛法者、道心者を立る人の中にも、身をすつるとて、人はいかにも見よと思ひて、ゆへ無く身をわるくふるまひ、或は亦世を執せぬとて、雨にもぬれながら行きなんどするは、內外ともに無益なるを、世間の人はすなはち此らを貴き人かな、世を執せぬなんどゝ思へるなり、中に佛制を守りて、戒律の儀をも存じ、自行化他佛制にまかせて行ずるをば、かへりて名聞利養げなるとて、人も管せざるなり、夫れが却て吾がためには佛敎にも隨ひ、內外の德も成ずるなり、

夜話に云く、學道の人、世間の人に智者もの知りとしられては無用なり、眞實求道の人の一人もあらん時は、我が知る所の佛祖の法を說かざることあるべからず、直饒ひ我を殺さんとしたる人なりとも、眞實の道を聽んとて、誠

との心を以て問はゞ、怨心をわすれて是が爲に說くべきなり、其外か敎家の顯密、及び內外の典籍等の事、知りたる氣色しては全く無用なり、人來りて此の如きの事を問はゞ、知らずと答へたらんに、一切に苦るしかるべからざるなり、其れをもの知らぬはわるしと、人も思ひ、愚人と自らも覺ゆる事を傷んで、ものを知らんとて、博く內外典を學し、剩さへ世間世俗の事をも知らんと思ふて、諸事を好み學し、あるひは人にも知りたる由をもてなすは、究めて僻事なり、學道のため眞實に無用なり、知りたるを知らざる氣色するもむつかしく、やうがましければ、却てあたる氣色にてあしきなり、本とより知らざらんは苦るしからざることなり、我れ幼少の時外典等を好み學しき、夫れがのち入宋傳法するまでも、內外の書籍を聞き、方語を通ずるまでも、大切の用事、亦世間のためにも尋常ならざる事なり、俗なんども尋常事に思ひたる、かたかたの用事にてありけれども、今ま熟〳〵思ふに、學道のさはりにてあるなり、只聖敎を見るとも、文に見ゆる所の理を次第に心得てゆか

ば、其の道理を得つべきなり、然るに先つ文章を見、對句韻聲なんどを見て、よきぞあしきぞと心に思ふて、後に理をば心得るなり、然あれば、中々知らずして、初めより道理を心得て行かばよかるべきなり、法語等を書くにも、文章におほせて書んとし、韻聲差へば礙へられなんとするは知りたる咎なり、語言文章はいかにもあれ、思ふ儘の理を順々と書きたらんは、後來も文はわろしと思ふとも、理だにも聞えたらば、道のためには大切なり、餘の才學も斯くの如し、傳へ聞く故高野の空阿彌陀佛は、本は顯密の碩德なりき、遁世の後ち念佛の門に入て、後に眞言師ありて、來て密宗の法門を問ひけるに、彼の人答へて云く、皆わすれおはりぬ、一字もおぼえずとて答へられざりけるなり、是らこそ道心の手本となるべけれ、なゞかは少々覺ではあるべき、然あれども無用なる事をば云はざりけるなり、一向念佛の日はさこそ有べけれと覺ゆるなり、今の學者も此の心あるべし、縱ひもと敎家の才學等ありとも、皆忘れたらんは好事なり、況や今ま學することを努々あるべからず、宗門の語

錄等猶を眞實參學の道者は見るべからず、其の餘は是を以て知るべし、

夜話に云く、今此の國の人は多分或ひは行儀につけ、或ひは言語につけ、善惡是非世人の見聞識知を思ふて、其の事をなさば人惡しく思ひてん、其の事は人善しと思ひてんと、乃至向後までをも執するなり、是れ全く非なり、世間の人は必ずしも善とすることあたはず、人はいかにも思はゝ思へ、狂人とも云へ、我がに心に佛道に順じたらんことをば作し、佛法に順せずんば行せずして、一期をも過ごさば、世間の人はいかに思ふとも、苦るしかるべからず、道世と云は世人の情を心にかけざるなり、たゞ佛祖の行履菩薩の慈悲を學して、諸天善神の冥に照す所を慚愧して、佛制に任せて行じきもてゆかば、一切苦るしかるまじきなり、さればとて亦人の惡しゝと思ひ云んも苦るしかるべからずとて、放逸にして惡事を行して、人を愧ざるは是れ亦非なり、たゞ人目にはよらずして、一向に佛法に依て行すべきなり、佛法の中には亦然のごときの放逸無慚をば制するなり、

亦云く、世俗の禮にも人の見ざる處、あるひは暗室の中なれども、衣服等をきかゆる時も、亦坐臥する時にも、放逸に隱處なんどをも藏くさず無禮なるをば、天に慚ぢず鬼に慚ぢずとてそしるなり、只た人の見る時と同じく、かくすべき處をもかくし、はづべきことをもはづるなり、佛法の中も亦戒律かくのごとし、然あれば道者は內外を論せず、明暗を擇はず、佛制を心に存して、人の見ず知らざればとて、惡事を行ずべからざるなり、

一日學人問て云く、某甲なを學道を心にかけて年月を經るといへども、いまだ省悟の分あらず、古人多く道は聰明靈利に依らず、有智明敏を用ひずと云ふ、然あれば我が身下根劣器なればとて、卑下すべきにもあらずときこえたり、若し故實用心を存すべき樣ありや、如何、

示して云く、然あり、有智高才を用ひず、靈利聰明によらぬはまことの學道なり、あやまりて盲聾癡人のごとくになれとすゝむるは非なり、學道は是れ全く多聞高才を用ひぬ故へに、下根劣器と嫌ふべからず、誠の學道はやすか

るべきなり、然あれども大宋國の叢林にも、一師の會下の數百千人の中に、まことの得道得法の人はわづかに一人二人なり、然あれば故實用心もあるべきなり、今は是を案ずるに、志の至ると至らざるとなり、眞實の志しを發して、隨分に參學する人得ずと云ふことなきなり、その用心の樣は、何事を專らにしその行を急にすべしと云ことは次のことなり、先づ只欣求の志の切なるべきなり、譬へば重き寶をぬすまんと思ひ、强き敵をうたんと思ひ、高き色にあはんと思ふ心あらん人は、行住坐臥、ことにふれ、おりに隨て、種々の事はかはり來るとも、其れに隨て際を求め、心に懸くるなり、この心あながちに切なるもの、とげずと云ふことなきなり、此の如く道を求る志し切になりなば、或は只管打坐の時、或は古人の公案に向はん時、若くは知識に逢はん時、實の志しを以て行ずる時、高くとも射つべく、深しとも釣りぬべし、是れほどの心發らずして、佛道の一念に生死の輪廻をきる大事をば如何んが成せん、若し此の心あらん人は、下智劣根をも云はず、愚癡惡人をも論せず、

必ず悟りを得べきなり、亦此の志しをおこす事は、切に世間の無常を思ふべきなり、此の事は亦只假令の觀法なんどにすべきことにあらず、亦無きことをつくりて思ふべきことにもあらず、眞實に眼前の道理なり、人のをしへ、聖敎の文、證道の理を持つべからず、朝に生じて夕べに死し、昨日みし人今日はなきこと、眼に遮ぎり耳にちかし、是は他のうへにて見聞することなく我が身にひきあてゝ道理を思ふに、たとひ七旬八旬に命を期すべくとも、終に死ぬべき道理に依て死す、其の間の憂へ樂み、恩愛怨敵等を思ひとげば、いかにてもすごしてん、只佛道を信じて涅槃の眞樂を求むべし、況や年長大なる人、半ばに過ぬる人は、餘年幾く計りなれば學道ゆるくすへきや、此の道理も猶のびたる事なり、眞宗には今日今時こそ、かくのごとく世間の事をも佛道の事をも敎へ、今夜明日よりいかなる重病をも受て、東西を辨へぬ重苦の身となり、亦いかなる鬼神の怨害をもうけて頓死をもし、いかなる賊難にもあひ怨敵も出來て、殺害奪命せらるゝこともやあらん、實に不定なり、然

あれば是れはどにあだなる世に、極て不定なる死期をいつまで命ちながらふべきとて、種々の活計を案じ、剩さへ他人のために惡をたくみに思ふて、いたづらに時光を過すこと、極めておろそかなる事なり、此の道理眞實なればこそ、佛も是れを衆生の爲に說きたまひ、祖師の普說法語にも此の道理のみを說る、今の上堂請益等にも、無常迅速生死事大と云ふなり、返々も此の道理を心にわすれずして、只今日今時ばかりと思ふて、時光をうしなはず、學道に心をいるべきなり、其の後は眞實にやすきなり、性の上下と根の利鈍は、全く論ずべからざるなり、

夜話に云く、人多く遁世せざることは、我が身をむさぼるに似て我が身を思はざるなり、是れ便ち遠慮なきなり、亦是れ善知識にあはざるに依てなり、縱ひ利養を思ふとも、常樂の益を得て龍天の供養を得んことを願ひ名聞を思ふとも、佛祖の名を得、古德の名を得ば、後賢も是れを聞ては慕ふべきなり、

夜話に云く、古人の云く、朝に道を聞て夕へに死すとも可なりと、いま學道の人も此の心あるべきなり、曠劫多生の間だ、いくたびか徒らに生じ徒らに死せしに、まれに人身を受けて、たまたま佛法にあへる時、此の身を度せずんば、何れの生にか此身を度せん、縱ひ身を惜みたもちたりともかなふべからず、ついに捨てゝ行く命ちを、一日片時なりとも佛法のために捨てたらんは、永劫の樂因なるべし、後のこと明日の活計を思ふて、棄つへき世を捨てず、行すべき道を行せずして、徒らに日夜を過すは口惜きことなり、只思ひきりて明日の活計なくば、飢へ死にもせよ、寒ごへ死にもせよ、今日一日道を聞て、佛意に隨て、死せんと思ふ心をまづ發すべきなり、然るときんば道を行じ得んこと一定なり、此の心なければ世にそむき道を學する樣なれども、猶しり足をふみて、夏冬の衣服等のことをした心にかけて、明日猶明年の活命を思ふて佛法を學せんは、萬劫千生學すともかなふべしともおぼへず、亦さる人もやわらんずらん、存知の意趣、佛祖の敎へにはあるべしともおぼへざるなり、

夜話に云く、學人は必ずしぬべきことを思ふべき道理は勿論なり、たとひ其のことをば思はずとも、暫く先づ光陰を徒らに過さじと思ひて、無用のことをなして、徒らに時を過さず、詮あることをなして、時を過すべきなり、其のなすべきことの中にも、亦一切のこといづれか大切なると云ふに、佛祖の行履の外は無用なりと知るべし、

或る時裴問て云く、衲子の行履、舊損の衲衣等を綴り補ふて、すてざればものを貪惜するに似たり、亦舊きをすてゝ新しきを隨て用れば、新しきを貪求する心あり、兩ながら咎あり、畢竟していかんか用心すべき、

答て云く、貪惜貪求の二つをたにも離れなば、兩頭ともに失なからん、たゞし破たるを綴て、久からしめて、新きをむさぼらずんば可ならんか、

夜話の次に裴問て云く、父母の報恩等の事は作すべきや、

示して云く、孝順は最用なる所なり、然あれども其の孝順に在家出家の別あり、在家は孝經等の説を守て、生につかへ死につかふること、世人みな知れ

り、出家は恩をすてゝ無爲に入る故に、出家の作法は恩を報ずるに、一人にかぎらず、一切衆生をひとしく父母のごとく恩深しと思ふて、なす處の善根を法界にめぐらす、別して今生一世の父母にかぎらば、無爲の道にそむかん、日日の行道、時時の參學、只佛道に隨順しもてゆかば、其れを眞實の孝道とするなり、忌日の追善中陰の作善なんぞは、皆在家に用ふる所ろなり、衲子は父母の深きことをば實の如くしるべし、餘の一切も亦かくの如しと知るべし、別して一日を占て、ことに善を修し、別して一人を分て廻向するは佛意にあらざるか、戒經の父母兄弟死亡之日の文は、且く在家に蒙むらしむるか、大宋叢林の衆僧、師匠の忌日には、其儀式あれども、父母の忌日は是を修したりとも見へざるなり、

一日示して云く、人の利鈍と云ふは志しの到らざる時のことなり、世間の人の馬より落る時、いまだ地におちざる間に、種種の思ひ起る、身をも損じ命をも失するほどの大事出來る時は、誰人も才學念慮を廻すなり、其時は利

根も鈍根も同くものを思ひ義を案ずるなり、然あれば今夜死に明日死ぬべしと思ひ、あさましきことに逢ふたる思ひを作して、切にはげまし志しをすゝむるに、悟りをおすと云ふことなきなり、中々世智辨聰なるよりも、鈍根なるやうにて、切なる志しを發する人、速に悟りを得るなり、如來在世の周梨槃特のごときは、一偈を讀誦することも難かりしかども、根性切なるによりて一夏に證を取りき、只今ばかり我が命は存ずるなり、死なざる先きに悟を得んと切に思ふて、佛法を學せんに、一人も得ざるはあるべからざるなり、

一夜示して云く、大宋の禪院に、麥米等をそろへて、惡きをさけ、善きをとりて、飯等にすることあり、是れを或る禪師の云く、直饒ひ我が頭をうち破ること七分にすとも、米をそろふることなかれと、頌につくり戒めたり、此のこゝろは、僧は齋食等をとゝのへて食することなかれ、只有るにしたがひて、よければよくて食し、惡きをもきらはずして食すへきなり、只檀那の信施、清淨なる常住食を以て、餓を除き命をさゝへて行道するばかりなり、味ひを以て善惡を擇ふことなかれと謂ふなり、今ま我が會下の徒衆も此の心あるべし、

因に問て云く、學人若し自己これ佛法なり、外に向て求むべからずとさて、深く此の言を信じて、向來の修行參學を放下して、本性に任せて善惡の業を（ゆき）なして、一期を過さん、此の見解いかん、

示して云く、此の見解、言と理と相違せり、外に向て求むべからずと云て、行を捨て學を放下せば、此の放下の行を以て所求ありときこへたり、これ覓めざるにはあらず、只行學もとより佛法なりと證して、無所求にして、世事惡業等は我が心になしたくともなさず、學道修行の懶うきをもいとひかへりみず、此行を以て打成一片に修して、道成するも、果を得るも、我が心より求ることなふして行ずるをこそ、外に向て覓ることなかれと云ふ道理にはかなふべけれ、南嶽の磚を磨して鏡となせしも、馬祖の作佛を求めしを戒めたり、坐禪を制するにはあらざるなり、坐はすなはち佛行なり、坐はすなはち

（南嶽云々）馬祖道一禪師、南嶽懷讓禪師に參ずる世て衡陽に在りて常

に坐禪を習ふて讓來り問ふ曰く何を作さんと欲する馬祖曰く作佛を圖る讓の磚を取りて前の石上に磨すに曰作磚圖るとは鏡を研ぐが如しと

不爲なり、是れ便ち自己の正體なり、此の外別に佛法の求ひべき無きなり、一日請益の次でに云く、近代の僧侶多く世俗に隨ふべしと云ふ、今思ふに然あらず、世間の賢すらなを民俗にしたがふことをけがれたることゝ云ひて、屈原の如きんば、世は擧て皆よへり、我は獨り醒たりとて、民俗に隨はずして、終に滄浪に沒す、況や佛法は事と事とみな世俗に違背せるなり、俗は髮を飾る、僧は髮を剃る、俗は多く食す、僧は一食す、皆そむけり、然して後に還て大安樂の人となるなり、故に僧は一切世俗にそむけるなり、一日示して云く、治世の法は上み天子より下も庶民に到るまで、各皆な其の官に居する者は其の業を修す、其の人にあらずして其の官に居するを亂天の事と云ふ、政道が天意に合ふ時は、世すみ民やすきなり、故に帝は三更の三點に起させ給ひて、治世の時としましませり、たやすからざることなり、佛の法も只職のかはり業の異なるばかりなり、國王は自ら思量を以て政道をはからひ、先規をかんがへ、有道の臣を覓めて、政ごと天意に相合ふ時、是を

治世と云ふなり、若し是を怠れば、天に背き世は亂れ民苦るしむなり、其れより以下、諸の公卿大夫士庶民、皆各の司ごる所の業あり、其れに順ふて人とは云なり、其れに背くは天事を亂る、故に天の刑(とがめ)を蒙るなり、然あれば佛法の學人も、世を離れ家を出ればとて、徒らに身を安すんせんと思ふこと片時もあるべからず、初めは利あるに似たれども、後には大いに害あるなり、出家の作法に順て全く其の職を治め、其業を修すべきなり、世間の治世は先規有道をかんがへ求れども、先聖先達のたしかに相傳したる例なければ、自ら其の時の例に隨ふこともあれども、佛子はたしかなる先規教文顯然なり、亦相承傳來の知識現在せり、我れに思量あり、四威儀の中において一一に先規を思ひ、先達に隨ひ修行せんに、なじかは道を得ざるべき、俗は天意に合はんと思ひ、衲子は佛意に合はんと思ふ、修業ひとしくして、得果すぐれたれば、一得永得ならん、かくの如く大安樂の爲めに、一世幻化の此身を苦しめて佛意に隨んは、唯行者の心にあるべし、然ありと云へども、亦そゝろに

（淨老）は長翁如淨禪師なりくはしくは上に註せり

身を苦しめ、なすべからざることをなせと、佛敎には勸むることなきなり、戒行律儀に隨ひ以てゆけば、自然に身やすく、行儀も尋常に、人めもやすきなり、ゆゑに只今案の我見の身の安樂を捨てゝ、一向に佛制に順すべきなり、又云く、我れ大宋天童禪院に寓居せし時、淨老、宵には二更の三點まで坐禪し、曉は四更の二點三點よりおきて坐禪す、長老と共に僧堂裡に坐す、一夜も懈怠なし、其の間だ衆僧多く眠る、長老巡り行て睡眠する僧をば、或ひは拳を以て打ち、或ひは履をぬいで打ち、恥かしめ勸めて眠りを醒す、猶眠る時は照堂に行て鐘を打ち、行者を召し、蠋燭をともしなんどして、卒時に普説して云く、僧堂裡に集り居て、徒らに眠りて何の用ぞ、然あらば何ぞ出家して入叢林するや、見ずや世間の帝王官人何人か身をたやすくする、君は王道を治め、臣は忠節を盡し、乃至庶民は田を開き鍬を取るまでも、何人かたやすくして世を過す、是れをのがれて叢林に入て、空く時光を過して畢竟して何の用ぞ、生死事大なり、無常迅速なりと、敎家も禪家も同く勸む、今夕明旦

如何なる死をか受け、如何なる病をかうけん、且く存するほど佛法を行せず、睡り臥して空く時を過すこと最も愚なり、かくの如くなる故に、佛法は衰へ行くなり、諸方佛法の盛んなりし時は、叢林皆坐禪を專らにせしなり、近代諸方坐禪を勸めざれは、佛法澆薄しゆくなりと、かくの如くの道理を以て、衆僧をすゝめて坐禪せしめられしこと、まのあたり是れを見しなり、今の學人も彼の風を思ふべし、亦或る時き近仕の侍者等云く、僧堂裡の衆僧眠りつかれて、或ひは病ひ起り、退心も起りつべし、これ坐の久き故か、坐禪の時尅を縮められればやと申しければ、長老大に嗔りて云く、然あるべからす、無道心の者の假りに僧堂に居するは、半時片時なりとも猶眠るべし、道心ありて修行の志有らんは、長からんにつけていよいよ喜び修せんずるなり、我れ若かりし時、諸方の長老を歷覩せしに、ある長老此の如く勸めて云く、已前は眠る僧をば拳も缺けなんとするほどに打ちたるが、今は老後になりてちからよはくなりて、つよくも打ち得ざるほどに、よき僧も出來らざるなり、諸

方の長老も坐を緩く勧る故に、佛法は衰微せるなり、我は彌よ打べきなりとのみ示されしなり、

亦云く、道を得ることは心を以て得るか、身を以て得るか、教家等にも身心一如と云て、身を以て得るとは云へども、猶一如の故にと云ふ、しかあれば正く身の得ることはたしかならす、今我が家は身心ともに得るなり、其の中に心を以て佛法を計校する間は、萬劫千生得べからず、心を放下して、知見解會を捨る時得るなり、見色明心聞聲悟道の如きも、猶を身の得るなり、然あれば心の念慮知見を一向に捨て、只管打坐すれば、道は親しみ得なり、然あれは道を得ることは正しく身を以て得るなり、是に依て坐を專らにすべしと覺にて勧むるなり、

正法眼藏隨聞記第二終

正法眼藏隨聞記第三

侍者懷奘編

示して云く、學道の人身心を放下して、一向に佛法に入るべし、古人云く、百尺竿頭如何進歩と、然あれば百尺の竿頭にのぼりて、足をはなたば死ぬべしと思ふて、つよく取つく心のあるなり、其れを一歩を進めよと云ふは、よもあしからじと思ひ切て、身命を放下するやうに、度世の業よりはじめて、一身の活計に到るまで、思ひすつべきなり、其れを捨てさらんはどは、いかに頭燃を拂ふて學道するやうなりとも、道を得ることはかなふべからざるなり、たゝ思ひ切て身心ともに放下すべきなり、

有る時、さる比丘尼問て云く、世間の女房なんどだにも佛法とて勤學す、比丘尼の身には少々の不可ありとも、何ぞ佛法にかなはざるべきと覺ゆ、いかんと、

（古人云く云々）石霜和尚云く百尺竿頭如何進歩又古德云く百尺竿頭に坐する人然も得入すと雖も未だ眞と爲さず百尺の竿頭に須らく歩を進めて十方世界に全身を現すへしと

示して云く、此の義然あらず、在家の女人は其の身ながら佛法を學して、得る事はありとも、出家の人出家の心なからずは得べからず、佛法の人を擇ぶにはあらず、人の佛法に入らざればなり、出家在家の義、其の心異なるべし、在家人の出家人の心あるは出離すべし、出家人の在家人の心あるは二重のひがことなり、用心大に異なるべきことなり、作すことの難きにはあらず、能くすることの難きなり、出離得道の行は人ごとに心にかけたるには似たれとも、能くする人まれなればなり、生死事大なり、無常迅速なり、心を緩くすることなかれ、世を捨ては實とに世を捨つべきなり、假名はいかにてもありなんとおぼゆるなり、

夜話に云く、今時世人を見る中に、果報もよく家をも起す人は、皆心の正直に人の爲によき人なり、故に家をも保ち、子孫までも昌ゆるなり、心に曲節ありて、人の爲に惡き人は、設ひ一旦は果報もよく、家を保てる樣なれども、終にはあしきなり、設ひ亦一期は無事にして過す樣なれとも、子孫必す衰微するなり、亦人のために善きことをして、其の人によしと思はれ喜びられんと思ふてするは、あしきに比すれば勝くれたるに似たれとも、猶を是は自身を思ふて、人のために眞によきにはあらざるなり、其の人には知られざれども、人のために好き事をなし、乃至未來までも誰れが爲と思はされども、人の爲によからん事をしをきなんとするを、誠との善人とは云ふなり、況や衲僧は是にこへたる心をもつべきなり、衆生を思ふ事親疎を分かたず、平等に濟度の心を存し、世出世間の利益、すべて自利を思はず、人にも知られず、喜こびられずとも、只人の爲によきことを心の中に作して、我れはかくの如くの心もちたると、人に知られざるなり、此の故實はまづ世を捨て身を捨つべきなり、我が身をだにも眞實に捨てぬれば、人によく思はれんと謂ふ心は無きなり、然あればとて、亦人はなにとも思はば思へとて、惡しきことを行し、放逸ならんは、亦佛意に背くなり、只よき事を行し、人の爲に善事をなして、代りを得んと思ひ、我が名を顯はさんと思はずして、眞實無所得にして利生

の事をなす、即ち吾我を離るゝ第一の用心なり、此の心を存せんと思はゞ、まづ無常を思ふべし、一期は夢の如し、光陰は早く移る、露の命は消え易し、時は人を待ざるならひなれば、只しばらく存じたるほど聊かのことにつけても、人の爲によく佛意に順はんと思ふべきなり、

夜話に云く、學道の人は最も貧なるべし、世人を見るに、財ある人はまづ瞋恚恥辱の二つの難定めて來るなり、寶あれば人是を奪ひ取らんと思ふ、我は取られじとする時、瞋恚たちまちに起る、或は是を論じて問答對決に及び、つゐには鬪爭合戰をいたす、かくの如くのわひだに瞋恚も起り、恥辱も來るなり、貧にして貪ぼらざる時は、先づ此の難を免れて安樂自在なり、證據眼前なり、敎文を待べからず、尒のみならず、古聖先賢是を謗り、諸天佛祖皆な是を恥かしむ、然るに愚癡なる人は財寶を貯へ、そこばくの瞋恚をいだくこと、恥辱の中の恥辱なり、貧ふして道を思ふは先賢古聖の仰ぐ所、諸佛諸祖の喜ぶ所ろなり、近來佛法の衰微しゆくこと眼前にあり、余始て建仁寺に入りし時見しと、後七八年過て見しと、次第にかはりゆくことは、寺の寮寮に塗籠をおき、各各器物を持し、美服を好み、財物を貯へ、放逸の言語を好み、問訊禮拜等の衰微することを以て思ふに、餘所も推察せらるゝなり、

佛法者は衣盂の外に財寶等を一切持べからず、なにを置んが爲に塗籠をしつらふべきぞ、人にかくすほどの物をばもつべからざるなり、盜賊等を怖るゝ故にこそかくし置んと思へ、捨て持たざれば還てやすきなり、人をば殺すとも人には殺されじと思ふ時こそ、身も苦しく用心もせらるれ、人は我れを殺すとも、我れは報を加へじと思ひ定めつれば、用心もせられず、盜賊も愁へられざるなり、時として安樂ならずと云ふことなし、

一日示して云く、宋土の海門禪師、天童の長老たりし時、會下に元首座と云僧ありき、この人は得法悟道の人にて、行持長老にも超たり、有時夜る方丈に參じて、燒香禮拜して云く、請すらくは某甲に後堂首座を許せと、時に禪師流涕して云く、我れ小僧たりし時より、未た此の如きの事を聞かず、汝坐

禪僧として首座長老を所望すること大ひなる錯なり、なんぢ既に悟道せると我れにも越えたり、然あるに首座を望むこと是れ昇進の爲か、許すことは前堂をも乃至長老をも許すべし、その心操卑劣なり、誠に是を以て餘の未悟の僧は推察せられたり、佛法の衰微せること是を以て知ぬべしと云ふて、流涕悲泣す、是れに愧て辭すといへども、猶終に首座に請す、其の後元首座此の詞はを記錄して、自らを愧しめて師の美言を顯はす、今ま是を案ずるに、昇進を望み、物のかしらとなり、長老どならんと思ふことをば、古人是を慙ぢしむ、只道を悟らんとのみ思ふて餘事あるべからず、

有る夜示して云く、唐の大宗即位の後、故殿に栖み給へり、破損せる故に、濕氣あがり、風霧冷かにして、玉體おかされつべし、臣下等造作すへき由を奏しければ、帝の言く、時き農節なり、民定めて愁ひあるべし、秋を待て造るべし、濕氣に侵さるは地にうけられず、風雨に侵さるは天に合はざるなり、天地に背かば身あるべからず、民を煩はさずんば自ら天地に合ふべし、天地に合はゝ身を侵すべからず、と云ふて終に新宮を作らず、故殿に栖み給へり、俗すら猶かくの如く、民を思ふことと自身に超えたり、況や佛子は如來の家風を受て、一切衆生を一子の如く憐むべし、我に屬する侍者所從なればとて、呵嗔し煩はすべからず、いかに況や同學等侶耆年宿老等をば、恭敬すること如來の如くすべしと戒文分明なり、然あれば今の學人も、人には色にいでゝ知られずとも、心の內に上下親疎を分たず、人の爲によからんと思ふべきなり、大小の事につけ人を煩はしめ、人の心を破ること有るべからざるなり、如來在世に外道多く如來を謗り惡みき、佛弟子問て云く、如來はもとより柔和を本とし、慈悲を心とす、一切衆生ひとしく恭敬すへし、何か故にか此のごとく隨はざる衆生あるや、佛の言く、吾れ昔し衆を領せし時、多く呵嗔羯磨(こんま)を以て弟子をいましめき、是れに依て今かくの如しと律の中かに見えたり、然あれは即ち設ひ住持長老として衆を領したりとも、弟子の非をたゞしいさめん時、呵嗔の詞を用ゐるべからす、たゞ柔和の詞を以て誡め勸むとも、隨ふ

(羯磨)は梵語、作法と譯す、比丘罪を犯すときは即ち法を作して呵嗔擯黜する儀法をいふ

べくんば隨ふべきなり、況や學人親族兄弟等の爲に、あらき言を以て人を惡しく呵嘖することは一向にやむべきなり、能々意を用うべし、

亦示して云く、衲子の用心は佛祖の行履を守るべし、第一には先つ財寶を貪ほるへからす、其の故は如來の慈悲深重なること、喩へを以ても量り難し、然あるに彼の所爲行履皆是れ衆生の爲なり、一微塵計りも衆生の爲に利益ならさるべき事を行はせ給はす、其の故は佛は是れ輪王太子にてましませば、即位し給ひて一天をも御意にまかさせたまひ、寶を以て弟子を憐れみ、所領を以て弟子をはぐくみ給ふべきに、何に故に位を捨てゝ自ら乞食を行し給ふや、是れ決定末世の衆生の爲にも、弟子の行道のためにも、利益となる因緣あるへき故に、財寶を貯へす、乞食を行しおき給へり、爾りしてのかた、天竺漢土の祖師の、よきと人にも知られしは、みな貧窮乞食なさしめ給ふなり、況や我が門の祖師、皆な財寶を貯ふべからずとのみ勸むるなり、教家にも此宗を讃するには、先つ貧をほめ、傳來の書錄にも貧を記してほむるなり、いまた財寶に富み、豐かにして佛法を行するとは聞かず、皆よき佛法者と云ふは、或は布衲衣常乞食なり、禪門をよき宗と云ひ、禪僧を他に異なりとする初の興りは、むかし教院律院等に雜居せし時にも、身を捨てゝ貧人なるを以てなり、宗門の家風先つ此のことを存知すへし、聖教の文理を待つべきにあらす、我身も田園等を持たる時もありき、亦財寶を領せし時もありき、彼の時の身心と、此のころ貧ふして衣盂にともしき時とを比するに、當時の心すくれたりと覺ゆる、是れ現證なり、

亦云く、古人の云く、不レン似ニ其ノ人ニ莫レ語ニ其ノ風ヲ、云心ろは、其の人の德を學はす知らすして、其の人の失あるを見て、其の人はよけれども、其の事は惡しさよ、惡き事をよき人もするかなと思ふべからすとなり、只其の人の德を取て、失を取ることなかれ、君子は德を取て失を取らすと云ふは、此の心なり、

一日示して云く、人は必す陰德を修すべし、陰德を修すれば、必す冥加顯益

（丹霞天然禪師）唐の南陽丹霞山の天然禪師、慧林寺に在り一日大寒に遇ふ乃ち木佛の像を焚て煖を取るを院主之を舍利師と呵して曰く吾れ是れ何の主ぞと曰く茶毘すると若しらば師曰く然らば我を貴めんやと

あるなり、設ひ泥木塑像の麁惡なりとも、佛像をは敬ふべし、黃卷赤軸の荒品なりとも、經教をは歸敬すべし、破戒無慚の僧侶なりとも、僧體をは仰信すべし、內心に信心を以て敬禮すれば、必ず顯福を蒙るなり、破戒無慙の僧、疎相の佛、麁品の經なればとて、不信無禮なれば必ず罰を蒙るなり、然あるべき如來の遺法にて、人天の福分となりたる佛像經卷僧侶なり、故に歸敬すれば必ず益あり、不信なれば罪を受るなり、いかに希有に淺猿（あさましく）くとも、三寶の境界をは歸敬すべきなり、禪僧は善を修せず功德を用ひずと云ふて、惡行を好むは究めたるひが事なり、先規いまだ惡行を好むことをきかず、丹霞天然禪師は木佛を燒く、是れらこと惡事と見なれども、一段の說法の施設なり、彼の師の行狀の記を見るに、坐するに必ず儀あり、立するに必ず禮あり、常に貴き賓客に向へるが如し、暫時の坐にも必ず跏趺して叉手す、常住物を守ること眼睛の如くす、勤修するものあれば必ずこれを賀す、少善なれども是を重くす、常途の行狀ことに勝れたり、彼の記をとゝめて今の世までも叢林の龜鑑とするなり、爾のみならず諸方の有道の師、先規悟道の祖を見聞するに、皆戒行を守り、威儀をとゝのへ、設ひ少善といへども是を重くす、いまだ悟道の師の善根を忽諸することを聽かず、故に學人祖道に隨はんと思はゞ、必ず善根を輕しめざれ、信仰を專らにすべし、佛祖の行道は必ず衆善の聚まる處なり、諸法皆佛法なりと通達しつる上は、決定惡にして、佛祖の道に遠ざかり、善は決定善にして、佛道の緣となると知るべし、若しかくの如くならば、なんぞ三寶の境界を重くせざらんや、

亦云く、今ま佛祖の道を行せんと思はゞ、所期も無く、所求も無く、所得も無ふして無利に先聖の道を行じ、祖々の行履を行ずべきなり、所求を斷じ、佛果を望むべからざればとて、修行を止め、本の惡行に住まらば、却つて是れ本の所求にとゞまり、本の窠臼に墮するなり、全く一分の所期を存せずして、只人天の福分とならんとて、僧の威儀を守り、濟度利生の行履を思ひ、衆善をこのみ修して、本の惡をすてゝ、今の善にとゞこほらずして、一期行

じもてゆかば、是を古人も打破漆桶底と云ふなり、佛祖の行履と云は此の如くなり、

龐居士）居士字は道玄馬祖道一禪師に參じて法を嗣ぐ

一日僧來て學道の用心を問ふ、次でに示して云く、學道の人は先須く貧なるべし、財おほければ必ず其志を失ふ、在家學道のもの、猶は財寶にまとはり、居處をむさぼり、眷屬に交はれば、設ひ其の志しありと云へども、障道の因緣多し、古來俗人の參學する多けれども、其の中によしと云ふも猶を僧には及ばず、僧は三衣一鉢の外は財寶をもたず、居處を思はず、衣食を貪らざる間だ、一向に學道すれば分分に皆得益あるなり、其のゆへは貧なるが道に親きなり、龐公は俗人なれども僧におとらず、禪席に名をとゝめたるは、かの人參禪のはじめ、家の財寶を持ち出して海に沉めんとす、人是れを諫めて云く、人にも與へ佛事にも用ゐらるべしと、時に他に對して云く、我已に窓なりと思ひて是れを捨つ、寃として何そ人に與ふべき、寶は身心を愁へしむるわたなりと云ひて、つゐに海に入れ了りぬ、然ふして後ち、活命の爲には糞をつくりて賣て過ぐるなり俗なれども かくの如く、財寶を捨てゝこそ善人とも云はれけれ、いかに況や僧は一向にすつべきなり、

僧の云く、唐土の寺院には定まりて僧祇物あり、常住物等ありて、置れたれば、僧の爲に行道の資緣となりて、其の煩ひなし、此の國は其の義なければ、一向捨棄せられては、中中行道の違亂とやならん、かくの如くの衣食資緣を思ひあてゝあらばよしと覺ゆ、いかん、

示して云く、然あらば、中中唐土よりは、此の國の人は、無理に僧を供養し、非分に人に物を與ふることあるなり、先つ人は知らず、我れは此の事を行じて道理を得たるなり、一切一物も持たず、思ひあてがふことも無ふして十餘年過ぎ了りぬ、一分も財を貯へんと思ふこそ大事なれ、僅の命をいくるはものことは、いかにと思ひ貯へざれども、天然としてあるなり、人皆な生分あり天地是れを授く、我れ走り求めざれども必ず有なり、況や佛子は如來遺囑の福分あり、不求自得なり、只一向にすてゝ道を行せば、天然にこれあるべし、

是れ現證なり、

亦云く、學道の人多分云ふ、若し其のことをなさば世人是を謗せんかと、此の條太た非なり、世間の人いかに謗するとも、佛祖の行履聖教の道理にてだにもあらば依行すべし、設ひ世人擧つてほむるとも、聖教の道理ならず、祖師も行せざることならは依行すべからず、其れ故に世人の親疎、我れをほめ、我れを誹ればとて、彼の人の心に隨ひたりとも、我が命終の時、惡業にも引れ惡道へ落なん時、彼の人いかにも救ふべからず、亦設ひ諸人に謗せられ惡まるゝとも、佛祖の道に依行せば、眞實に我れをたすけられずんば、人の謗ずればとて道を行せざるべからず、亦かくの如く謗し讃する人、必ずしも佛祖の行を通達し、證得せるにあらず、なにとしてか佛祖の道を世の善惡を以て判すべき、然あれば世人の情には順ふべからず、只佛道に依行すべき道理ならば、一向に依行すべきなり、

亦ある僧云く、某甲老母現在せり、我れは卽ち一子なり、ひとへに某甲か扶

持に依りて度世す、恩愛もことに深し、孝順の志しも深し、是れに依ていさゝか世に隨ひ人に隨ふて、他の恩力を以て母の衣糧にあつ、我れ若し遁世籠居せば、母は一日の活命も存じ難し、是れに依て世間にありて一向佛道に入らさらんことも難事なり、若し猶も捨てゝ道に入るべき道理あらば、其の旨いかなるべきぞ、

示して云く、此こと難事なり、他人のはからひに非ず、たゞ自ら能々思惟して、誠に佛道に志し有らば、いかなる支度方便をも案じて、母儀の安堵活命をも支度して、佛道に入らば、兩方俱によき事なり、切に思ふことは必ずとぐるなり、强き敵、深き色、重き寶なれとも、切に思ふ心ふかければ、必ず方便も出來る樣あるべし、是れ天地善神の冥加もありて必ず成するなり、曹溪の六祖は、新州の樵人にて、薪を賣て母を養ひき、一日市にして客の金剛經を誦するを聽て發心し、母を辭して黃梅に參せし時、銀子十兩を得て、母儀の衣糧にあてたりと見えたり、是れも切に思ひける故に、天の與へたりけ

（曹溪の六祖）は慧能大師なり發心して黃梅の弘忍大師に參ず

るかと覺ゆ、能々思惟すべし、是れ最もの道理なり、母儀の一期を待て、其の後障碍なく佛道に入らば、次第本意の如くにして神妙なり、しかれども、亦知らず、老少不定なれば、若し老母は久くとゞまりて、我は先に去ることを出來らん時に、支度相違せば、我れは佛道に入らざることを悔み、老母は是れを許さゞる罪に沉て、兩人俱に益なふして、互に罪を得ん時いかん、若し今生を捨てゝ佛道に入りたらば、老母は設ひ餓死すとも、一子を放るして道に入らしめたる功德、豈に得道の因緣にあらざらんや、尤も曠劫多生にも捨て難き恩愛なれども、今生人身を受て、佛敎にあへる時捨てたらば、眞實報恩者の道理なり、なんぞ佛意にかなはざらんや、一子出家すれば七世の父母得道すと見えたり、何ぞ一世の浮生の身を思ふて、永劫安樂の因を空く過さんやと云道理もあり、是らを能々自ら計らふべし、

正法眼藏隨聞記第三終

正法眼藏隨聞記第四

侍者懷奘編

（南陽忠國師）は六祖慧能大師の法嗣なり心印を受けてより南陽白山の黨子谷に居す唐肅宗徵して待するに師の禮を以てす

一日參學の次てに示して云く、學道の人は自解を執することなかれ、設ひ會する所ろありとも、若し亦決定よからざる事もやあらん、亦是よりもよき義もやあらんと思ふて、廣く知識をも訪ひ、先人の言をも尋ぬべきなり、亦先人の言なりともかたく執する事なかれ、若し是もあしくもやあるらん、信ずるにつけてもと思て、次第にすぐれたる事あらば、其れにつくべきなり、亦云く、南陽忠國師、問二紫璘供奉一、甚處來、奉云、城南來、師云、城南師作二何色一、奉云、作二黃色一、師乃問二童子一、城南師作二何色一、子云、作二黃色一、師云、祇這童子亦可二籠前一賜レ紫對レ御談一、玄云、しかあれば童子も國皇の師として眞色を答ふべし、汝が見所常途に超えずとなり、後來有人の云く、供奉が常途に超えざる過、甚れの處にかある、童子も同く眞色

を說く、是れこそ眞の知識たらめと云て、國師の義を用ひず、故に知ぬ必しも古人の言ばを用ひず、只寔との道理を存ずべきなり、疑心はあしき事なれども、亦信ずまじきことをかたく執して、尋ぬべき義をも問はざるはあしきなり、

亦示して云く、學人の第一の用心は、先づ我見を離るべし、我見を離るゝと云ふは、此の身を執すべからず、設ひ古人の語話を究め、常坐鐵石の如くなりとも、此の身に著して離れずんば、萬劫千生にも佛祖の道を得べからず、いかに況や權實の敎法、顯密の正敎を悟り得たりと云とも、身を執する心を離れずんば、徒らに他の寶を數て自ら半錢の分なし、只請ふらくは、學人靜坐して、道理を以て此の身の始終を尋ぬべし、身體髮膚は父母の二滴、一息とゞまりぬれば山野に離散して、終に泥土となる、何を持てか身と執せん、況や法を以て見れば、十八界の聚散、いつれの法をか決定して我が身とせん、敎內敎外別なりとも、我が身の始終不可得なることを、行道の用心とすること

（十八界）一に眼界、二に耳界、三に鼻界、四に舌界、五に身界、六に意界、七に色界、八に聲界、九に香界、十に味界、十一に觸界、十二に法界、十三に眼識界、十四に耳識界、十五に鼻識界、十六に舌識界、十七に身識界、十八に意識界、これなり

（倶胝和尙）は唐の婺州金華山の倶胝和尙なり凡る所問あれは唯一指を擧す一童子あり和尙に侍す和尙に倣ふて指頭を竪て所問に對ふ後ち和尙に折檻せられ忽ち省悟す

（神光）は後に二祖となり懷可大師といへり

（汾陽）は宋の汾陽太子院の善昭禪師なり

と是れ同しく、先づ此の道理に達すれば、寔の佛道顯然なるものなり、

一日示して云く、古人云く、親近スレハ善者ニ如ニ霧露ノ中ニ行カヽ雖レ不レ濕レ衣ヲ時時ニ有ル潤、謂ふ心は、善人になるれは覺ゑざるに善人となるなり、昔し倶胝和尙に仕へし一人の童子のごときは、いつ學し、いつ修したりとも見ゑず、覺ゑざれとも、久參に近つきたる故に悟道す、坐禪も自然に久くせば、忽然として大事を發明して、坐禪の正門なることを知るべきなり、

嘉禎二年臘月除夜、始て懷奘を興聖寺の首座に請す、卽ち小參の次で、初て秉拂を首座に請ふ、是れ興聖寺最初の首座なり、小參の趣きは、宗門の佛法傳來の事を擧揚するなり、初祖西來して、少林に居して機をまち、時を期して面壁して坐せしに、某の歲の窮臘に、神光來參しき、初祖最上乘の器なりと知て、接得して、衣法共に相承傳來して、兒孫天下に流布し、正法今日に弘通す、當寺始て首座を請し、今日初て秉拂を行なはしむ、衆の少きを憂ふることと莫れ、身の初心なるを顧みることなかれ、汾陽は僅に六七人、藥山は

（藥山）唐の朗州藥山の唯儼禪師なり
（竹の聲に云々）香嚴智閑禪師一日瓦礫を以て竹を擊ちて聲を作すを聞き省悟す
（桃の花に云々）靈雲志勤禪師一日桃花を見て悟道す

十衆に滿たざるなり、然あれども皆佛祖の道を行じき、是を叢林のさかんなると云ひき、見すや竹の聲に道を悟り、桃の花に心を明らむ、竹豈に利鈍あり迷悟あらんや、花何ぞ淺深あり賢愚あらん、花は年年に開くれども、人みな得悟するに非ず、竹は時時に響けども、聞く者盡く證道するにあらず、たゞ久參修持の功により、辨道勤勞の緣を得て、悟道明心するなり、是れ竹の聲の獨り利なるにあらず、亦花の色の殊に深きにあらず、竹の響き妙なりと云へども自ら鳴らず、花の緣をまちて聲を起こす、花の色美なりと云へども、獨り開くるにあらず、春風を得て開くるなり、學道の緣もまたかくの如し、此の道は人人具足なれども、道を得る事は衆緣による、人人利なれども、道を行ずることは衆力を以てす、ゆへに今ま心を一つにし、志をもつはらにして、參究尋覓すべし、玉は琢磨によりて器となる、人は練磨によりて仁となる、いづれの玉か初より光りある、誰人か初心より利なる、必ず須からくこれ琢磨し練磨すべし、自ら卑下して學道をゆるくすることなかれ、古人の云く、

（洞山の麻三斤）とは昔し僧あり洞山の守初禪師に如何是佛と問ふ洞山答へて云く麻三斤と是なり

光陰空くわたることなかれと、今問ふ、時光は惜むによりてとゞまるか、惜めどもとゞまらざるか、すべからくしるべし、時光は空くわたらず、人は空くわたることを、人も時光とおなじくいたづらに過すことなく、切に學道せよと云ふなり、かくのごとく參究を同心にすべし、我れ獨り擧揚するも、容易にするにあらざれども、佛祖行道の儀、大概みなかくの如くなり、如來の開示に隨ひて得道するもの多けれども、亦阿難によりて悟道する人もありき、新首座非器なりと卑下することなかれ、洞山の麻三斤を擧揚して同衆に示すへしと云て、座を下て後ち、再び皷を鳴らして、首座秉拂す、是れ興聖最初の秉拂なり、懷奘三十九の歳なり、

一日示して云く、俗人の云く、何人か好衣を望まざらん、誰人か重味を貪らざらん、然あれども道を存せんと思ふ人は、山に入り、雲に眠り、寒むきをも忍ひ、飢ゑをも忍ふ、先人苦みなきに非す、是れを忍ひて道を守ればなり、後人是れを聽て道を慕ひ、德を仰くなり、俗すら賢なるは猶かくの如し、佛

（在世）は佛の在世の時をいふ

（大小の律藏）は大乘小乘の律藏なり

道豈に然らさらんや、古人もみな金骨にはあらず、在世もことごとく上器にはあらず、大小の律藏によりて諸の比丘をかんがふるに、不可思議の不當の心を起すもありき、然あれども後には皆得道し、羅漢となれりと見たり、しかあれば我れらも賤く拙なしと云ふとも、發心修行せば、決定得道すへしと知て、即ち發心するなり、古へも皆苦を忍ひ、寒にたえて、愁ひなから修行せしなり、今の學者苦しく愁るとも、只しひて學道すべきなり、

示して云く、學道の人、悟を得ざることは、即ちたゝ舊見を存ずるゆへなり、本より誰がをしへたりとも知らざれども、心と云は念慮知覺なりと思ひ、心は草木なりと云へば信せず、佛と云へば相好光明あらんずると思ふて、佛は瓦礫と說けば耳を驚かす、かくのごときの執見、父も相傳せず、母も敎授せず、只無理自然に久く人のことばにつきて信し來れることなり、然あれば今も佛祖決定の說なれば、あらためて心は艸木と云はば、便ち艸木を心と知り、佛は瓦礫といはば瓦礫を便ち佛なりと信して、本執をあらため去らば道を得

べきなり、古人の云く、日月あきらかなれども浮雲是れをおほふ、叢蘭茂せんとすれども秋風吹て是れをやぶると、貞觀政要にこれを引て賢王を惡臣とに喩ふ、今ま云く、浮雲をおふとも久しからず、秋風破ふるとも亦開くべし、臣わるくとも、王の賢强くんば轉せらるべからず、今ま佛道を存せんことも、亦かくの如くなるべし、いかに惡心おこるとも、かたく守り久く保たば、浮雲もきゑ秋風も止まるべきの道理なり、

一日示して云く、學人初心のときは、道心ありても無ても、經論聖敎等を能々見るべし、まなぶべし、我れ始てまさに無常によりて、聊か道心を發し、終に山門を辭して遍く諸方を訪ひ、道を修せしに、建仁寺に寓せし中間、正師にあはず、善友なき故に、迷て邪念を起しき、敎道の師も先つ學問先達にひとしくして、よき人と成り、國家にしられ、天下に名譽せん事を敎訓する故に、敎法等を學するにも、先つ此の國の上古の賢者にひとしからんことを思ひ、大師等にも同じからんと思ひき、因に高僧傳、續高僧傳等を披見して、大

唐の高僧、佛法者の樣子を見しに、今の師のをしへの如くにはあらず、亦我が起せるやうなる心は、皆經論傳記等にはいとひにくみけりと思ひしより、やうやく道理をかんがふれば、名聞を思ふとも、當代下劣の人によしと思はれんよりも、只上古の賢者向後の善人をはづべし、ひとしからんことを思ふとも、此國の人よりも、唐土天竺の先達高僧をはぢて、彼にひとしからんと思ふべし、乃至諸天冥衆諸佛菩薩等にひとしからんとこそ思ふべけれと、この道理を得て後には、此の國の大師等は土芥の如くにおぼえて、從來の身心皆あらためき、佛の一期の行儀を見れは、王位をすてゝ山林に入り、成道の後も一期乞食すと見えたり、律に云く、知家非家捨家出家と云云、古人云く、奢て上賢にひとしからんと思ふことなかれ、賤ふして下賤にひとしからんと思ふことなかれと、云こゝろは、共に慢心なり、高ふしても下らんことを忘るゝことなかれ、安ふしても危からんことを忘るゝことなかれ、今日存するとも明日もと思ふことなかれ、死の至てちかくあやふきこと脚下にあり、

示して云はく、愚癡なる人は其の詮なきことを思ひ云ふなり、此につかはるゝ老尼公ありけるが、當時いやしげに在るをはづる顏にて、ともすれば人に向ては、昔しは上臘にてありしよしを語る、たとひ而今の人にさもありと思はれたりとも、なんの用とも覺えぬ、甚だ無用なりとおぼゆるなり、皆人の思はくは此の心あるかと覺ゆるなり、道心の無きほども知られたり、是れらの心を改めて、少し人には似るべきなり、亦有る入道の、極めて無道心なるあり、去り難き知音にてある故に、道心おこらんこと佛神に祈誓せよと云はんと思ふ、定て彼れ腹立して中をたがふことあらん、然れども道心を發さゝらんには得意にてもたがひに詮なかるべし、

示して云く、古へに、三たび復さふして後に云へと、云ふ心は、凡そものを云はんとする時も、事を行せんとする時も、必ず三たび復さふして後に言行すべしとなり、先儒のおもはくは三度び思ひかへりみるに、三度びながら善ならば云ひ行なへと云ふなり、宋土の賢人等の心ろは、三度び復さふすと云

は、幾度も復せと謂ふ心なり、言ばよりさきに思ひ、行よりさきに思ひ、思ふたびごとにかならず善なれば言行すべきとなり、禾子も亦必ず然かあるべし、我が思ふことも、言ふことも、あしきことあるべき故に、まづ佛道に合ふや否やとかへりみ、自他の爲に益ありやいなやと能々思ひかへりみて、後に善なるべくんば行ひもし、言ひもすべきなり、行者若しかくのごとく心を守らば、一期佛意に背かざるへし、予昔年初て建仁寺に入りし時は、僧衆隨分に三業を守て、佛道の爲め、利他のために、惡きことをば云はじとし、各各志させしなり、僧正の德の餘殘ありしほどは、かくの如くなりき、今時は其の儀なし、今の學者しるべし、決定して、自他の爲め佛道の爲に詮あるべきことならば、身をわすれても言ひ、若くは行ひもすべきなり、其の詮なきことは言行すべからず、宿老耆年の言行する時は、末臘の人は言ばをまじふべからず、是れ佛制なり、能々是れを思ふべし、身をわすれて道を思ふことは、俗猶此の心あり、むかし趙の閻相如と云ひし者は、下賤の人なりしかども、賢なるによりて、趙王にめしつかはれて、天下の事を行ひき、趙王の使として、趙璧と云玉を秦の國へつかはさしめたまふ、彼の璧を十五城にかへんと秦王の云し故に、相如にもたせてつかはすに、餘の臣下議して云く、是れはどの寶を相如ごときの賤人に持たせてつかはすこと、國の人なきに似たり、餘臣のはぢなり、後代のそしりなるべし、途にて此の相如を殺して、璧を奪ひ取らんと議しけるを、ときの人ひそかに相如にかたりて、此のたびの使を辭して命を保つへしと云ひければ、相如云く、某がし敢て辭すべからず、相如王の使として、璧を持て秦にむかふに、佞臣の爲めに殺されたると後代に聞ゑんは、我ためによろこびなり、我が身は死すとも賢の名は殘るべしと云て、終にむかひぬ、餘臣も此の言ばを聽て、我れら此の人をうちうることあるへからずとていまりぬ、相如遂に秦王に見えて、璧を秦王にあたふるに、秦王十五城をあたふまじき氣色見えたり、時に相如はかりごとを以て、秦王にかたりて云く、その璧にきずあり、我れ是れを示さんと云て、璧

をこひ取て、後に相如が云く、王の氣色を見るに、十五城を惜める氣色あり、然あらば我が頭べを以て、此の璧を銅柱にあてゝ、うちわりてんと云て、瞋れる眼を以て、王を見て銅柱のもとによる氣色まことに王をも犯しつべかりし、時に秦王の云く、汝璧をわることなかれ、十五城を與ふべし、あひはからはんほど、汝ぢ璧を持べしと云しかば、相如ひそかに人をして璧を本國へかへしぬ、後に亦澠池と云ふ處にて、趙王と秦王とあそびしに、趙王は琵琶の上手なり、秦王命じて彈せしむ、趙王相如にも云ひ合せずして即ち琵琶を彈じき、時に相如、趙王の秦王の命に隨へることを瞋て、我行て秦王に簫を吹かしめんと云て、秦王につげて云く、王は簫の上手なり、趙王聞んことをねがふ、王吹たまふべしと云しかば、秦王是れを辭す、相如か云く、王若し辭せば王をうつべしと云ふ、時に秦の將軍劔を以て近づきよる、相如これをにらむに兩目はこゝろびさけてけり、將軍恐て劔をぬかずして歸りしかば、秦王ついに簫を吹くと云へり、亦後に相如大臣となりて、天下の事を行ひし時に、

かたはらの大臣我れに任さぬ事をそねみて、相如をうたんと擬する時に、相如は處々ににげかくれ、わざと參内の時も參會せず、おぢおそれたる氣色なり、時に相如が家人いはく、かの大臣をうたんこと易きことなり、なにが故にかおぢかくれさせたまふと云ふ、相如か云く、我れ彼をおそるゝにあらず、我が眼を以て秦の將軍をも退け、秦の璧をも奪ひき、彼の大臣うつべきことと云ふにも足らず、然あれどもいくさを起し、つはものを集むることは、敵國を防ぐためなり、今ま左右の大臣として國を守るもの、若し二人なかをたがひていくさを起して、一人死せば一方缺くべし、然あらば敵國喜びていくさを起すべし、かるがゆゑに二人ともに全ふして國を守らんと思ふ故に、彼れといくさを起さずと云ふ、かの大臣此のことば聞て、はぢて還て來り拜して、二人共に和して國をおさめしなり、相如身をわすれて道を存することかくの如し、今ま佛道存することも、彼の相如が心の如くなるべし、寧ろ道ありては死すとも、道無ふしていくることなかれと云云、

示して云く、善惡と云ふこと定め難し、世間の人は綾羅錦繡をきたるをよしと云ふ、麁布糞掃衣をわるしと云ふ、佛法には此れをよしとし、淸しとし、金銀錦綾をわるしとし、けがれたりとす、かくの如く、一切のことにわたりて皆然り、予が如きも、聊か韻聲をとゝのへ、文字をかきすゞるゝを、俗人等は尋常ならぬことに云ふもあり、亦有人は出家學道の身としてかくの如きのことと知れるとそしる人もあり、いづれをか定めて善として取り、惡としてすつへきぞ、文に云く、はめて白品の中にあるを善と云ふ、そしりて黑品の中におくを惡と云ふと、亦云く、苦を受くべきを惡と云ふ、樂をまねくべきを善と云ふと、かくの如く子細に分別して、眞實の善を見て行し、眞實の惡を見てすつべきなり、僧は淨淸の中より來れるものなはれ、人の欲を起すまじきものを以てよしとし、きよきとするなり、

示して云く、世間の人多分云く、學道のこゝろざしあれども、世は末世なり、人は下劣なり、如法の修行にはたゆべからず、只隨分にやすきにつきて結緣を思ひ、他生に開悟を期すべしと、今ま云ふ、此の言は全く非なり、佛敎に正像末を立ること、暫く一途の方便なり、在世の比丘必すしも皆すゞれたるにあらず、不可思議に希有におさましく下根なるもありき、故に佛、種々の戒法等をまうけ玉ふこと、皆わるき衆生下根の爲なり、人々皆な佛法の器なり、かならず非器なりと思ふことなかれ、依行せば必す證を得べきなり、既に心あれば善惡を分別しつべし、手あり足あり、合掌歩行にかげたる事あるべからず、しかあれば佛法を行ずるには、器をえらぶべきにあらず、人界の生は皆な是れ器量なり、餘の畜生等の生にては叶ふべからず、學道の人只明日を期することなかれ、今日今時ばかり佛法に隨て行しゆくべきなり、

（正像末）正は正法、像は像法、末は末法なり世尊の滅後敎法の世に存すること此三時の不同ありと說く

示して云く、俗の云く、城を傾むくることは中にさゝやき言出來るに依るなりと、亦云く、家に兩言ある時は針をも買ふことなし、家に兩言なき時は金をも買ふあたひありと、俗猶家をたもち城を守るに、同心ならざれば終には ろぶと云へり、況や出家人は一師に學して、水乳の和合せるが如くすべし、

（六和敬）和は和同、敬は愛敬なり、一に同戒和敬、二に同見和敬、三に同行和敬、四に身慈和敬、五に口慈和敬、六に意慈和敬これなり

（會禪師）宋の楊岐山の方會禪師なり

亦六和敬の法あり、各々寮々をかまへて、身をへたて〻、心ろ〻に學道の用心することなかれ、一船にのりて海をわたるが如し、同心に威儀を同ふし、たがひに非を改め、是に隨て同く學道すべきなり、是れ佛在世より行じ來れる儀式なり、

示して云く、楊岐山の會禪師はじめ住持の時、寺院舊損して、僧のわづらひありし時、知事申して云く、修理あるべしと、會の云く、堂閣破れたりとも、露地樹下にはまさるべし、一方破れてもらば一方のもらぬ處に居して坐禪すべし、堂宇造作によりて僧衆悟りを得べくんば、金玉を以てもつくるべし、悟は居所の善惡にはよらず、只坐禪の功の多少にあるべしと、翌日の上堂に云く、楊岐乍住ノ屋壁疎ナリ、滿床盡ク布ク雪ノ眞珠、縮ニ卻ノ項ヲ暗ニ嗟吁スベシ、良久シテ云、翻テ憶フ古人樹下ノ居ト、たゞ佛道のみにあらず、政道も亦かくの如し、唐の太宗はいやをつくらず、龍牙云く、學道ノ先ツ須ク且ク學スレ貧ヲ、學デ貧ヲ貧ニノ後ニ道方ニ親ヒと云ふ、昔し釋尊より今に至るまで、眞實學道の人たからにゆたかなりとは聞かず見ざるなり、

一日有る客僧問て云く、近代遁世の法は各各齋料等のことをかまへ、用意して後のわづらひなきやうに支度す、是れ小事なりと云へども、學道の資緣なり、かけぬればことの違亂出來る、今師の御樣を承り及ぶには、一切其の支度なく、只天運にまかすと、若し實にかくのごとくならば、後時の違亂あらんか、いかん、

答て云く、事皆な先證あり、敢て私典を存するにあらず、西天東地の佛祖皆かくの如し、白毫一分の福の盡る期あるべからず、何ぞ私に活計をいたさん、亦明日の事はいかにすべしとも定め圖り難し、此の樣は佛祖のみな行じ來れる所ろにて私なし、若し事闕如して絶食せは、其の時にのぞんで方便をもめぐらさめ、兼て是を思ふべきことにはあらざるなり、

示して云く、傳へ聞く、實否は知らざれども、故持明院の中納言入道あるとき祕藏の太刀を盜まれたりけるに、士の中に犯人ありけるを、餘の士沙汰し

出してまゐらせたりしに、入道の云へらく、此れは我が太刀にあらず、ひがことなりとてかへされたり、決定その太刀なれども、士の恥辱を思ふてかへされたりと、人皆な是を知りけれども、其の時は無爲にしてすぎけり、故に子孫も繁昌せり、俗なほ心ある人はかくの如し、いはんや出家人必ずしも此の心あるべし、出家人はもとより身に財寶なければ、智慧功德を以てたからとす、他の無道心なる、ひがことなんどを直に面てにあらはして、非におとすべからず、方便を以て彼れのはらたつまじき樣に云ふべきなり、暴惡なるは其の法久しからずと云ふ、設ひ法を以て呵嘖するとも、あらき言葉なるは法も久しからざるなり、小人下器はいさゝかも人のあらき言ばに必ず即ちはらたち、恥辱を思ふなり、大人上器には似るべからず、大人はしかあらず、設ひ打たるれども報を思はす、今我國には小人多し、つゝしまずんはあるべからざるなり、

正法眼藏隨聞記第四　終

正法眼藏隨聞記第五

侍者懷奘編

一日示して云く、佛法の爲には身命を惜むことなかれ、俗猶道の爲には身命をすて、親族をかへりみず、忠を盡し節を守る、是を忠臣とも云ひ、賢者とも云ふなり、昔し漢の高祖隣國といくさを起す時、ある臣下の母敵國にありき、官軍も二た心有らんかと疑ひき、高祖もかれ若し母を思ひて敵國へさることもやあらんずらん、若しさあらば軍やぶるべしとてあやぶむ、爰に彼の母も、我が子もし我れによりて我が國へ來ることもやあらんかとおもひ、誠ていはく、われによりて、いくさの忠をゆるくすることなかれ、我れもしいきていたらば汝ぢ二た心もやあらんと云ひて、劔に身をなげてうせてけり、其の子本よりふた心ろなかりしかば、其のいくさに忠節を致す志し深かりけると云ふ、況や衲子の佛道を存するも、二た心無き時まことに佛道に契ふべ

し、佛道には慈悲智慧本よりそなはる人もあり、設ひ無き人も學すれば得るなり、只身心を俱に放下して、佛法の大海に廻向して、佛法の教に任せて私曲を存することなかれ、亦漢の高祖の時、ある賢臣の云く、改道の理亂は繩の結ぼれるを解くが如し、急にすべからず、能々むすびめを見てとくべしと、佛道も亦かくの如し、能々道理を心得て、行ずべきなり、法門を能く心得る人は、必ず強き道心ある人、よく心得るなり、いかに利智聰明なる人も、無道心にして、吾我をも離れ得ず、名利をも棄て得ぬ人は、道者ともならず、正理をも心得ぬなり、

示して云く、學道の人は、吾我の爲に佛法を學することなかれ、只佛法の爲に佛法を學すべきなり、其の故實は、我が身心を一物ものこさず放下して、佛法の大海に廻向すべきなり、其の後は一切の是非管することなく、我が心を存することなく、なし難く忍び難きことなりとも、佛法の爲につかはれて、しひて此れをなすべし、我が心に強てなしたきことなりとも、佛法の道理なるべからざる事は放捨すべきなり、穴な賢こ、佛道修行の功を以て、かはりに善果を得んと思ふことなかれ、只一度佛道に廻向しつる上は、再ひ自己をかへりみず、佛法のおきてに任せて行じゆきて、私曲を存することなかれ、先證皆かくの如し、心にねがひ求ることなければ即ち大安樂なり、世間の人も他にまじはらず、己れが家ばかりにて生長したる人は、心のまゝにふるまひ、己が心を先として、人目をしらず、人の心を兼ざる人は、必ずしもあしきなり、學道の用心も亦かくのごとし、衆にまじはり師に順して、我見を立せず、心をあらためゆけば、たやすく道者となるなり、學道は先づすべからく貧を學すべし、名をすて利をすて、一切諂らふことなく、萬事なげすつれば、必ずよき道人となるなり、大宋國によき僧と人にも知られたる人は、皆貧窮人なり、衣服もやぶれ、諸緣も乏しきなり、往日天童山の書記道如上座と云し人は、官人宰相の子なり、しかれとも親族をも遠離し、世利を貪らざりしかば、衣服のやつれ破壞したること、目もあてられざりしかとも、道

徳人に知られて、名山大寺の書記とも成られしなり、予あるとき如上座に問て云く、和尚は官人の子息にて富貴の種族なり、何ぞ身にちかづくる物、皆下品にして貧窮なるや、如上座答て云く、僧となればなり、

一日示して云く、俗人の云く、寶はよく身を害する怨なり、昔も是れあり、今も是れ有りと、云ふこゝろは、昔し一人の俗人あり、一人の美女をもてり、時に威勢ある人是を請ふ、彼の夫是を惜む、終に兵を起して其家を圍めり、既に奪ひ取られんとする時、夫か云く、我れ汝が爲に命を失ふと、女が云く、我れも夫の爲に命を失はんと云て、高樓より落て死す、そのゝち彼の夫うちもらされて、彼に物語りにせしとなり、亦云く、昔し一人の賢人、州吏として國政を行ふ時に、息男あり、官事により父を辭し、拜して去る、時に父一正の縑を與ふ、息の云ふ、君は高亮なり、此の縑いづくよりか得たるや、父云く、俸祿のあまりなりと、息去りて皇帝に奉りまゐらせて、その由を奏す、帝太た其の賢なることを感じたまふ、息男申さく、父は名をかくす、我れは名を顯はす、眞に父の賢勝れたりと、此の心は一正の縑は、是れ少分なれども、賢人は私用せざることと聞えたり、亦寔の賢人は名をかくす、俸祿なれば使用するよしを云ふなり、俗人猶を然り、況や學道の衲子、私を存することなかれ、亦寔の道を好まば道者の名をかくすべきなり、亦云、仙人ありき、或人問て云く、如何がして仙を得ん、仙人の云く、仙を得んと思はゞ仙道を好むへしと、然れば學人も佛祖の道を得んと思はゞ、須く佛祖の道を好むへし、

示して云く、昔し國王あり、國を治て後ちに諸の臣下に問ふ、我好く國を治む、よく賢なりやと、諸臣みな云く、帝甚だよく治む、太た賢なりと、時に一臣ありて云く、帝は賢ならずと、帝の云く、故は如何、臣が云く、國を治て後ち、帝の弟に與へずして息に與ふと、帝の心にかなはずして、追ひ立られて後、亦一臣に問、朕よく仁なりや、臣が云く、甚だ仁なり、帝の云く、其の故いかん、臣が云く、仁君には必ず忠臣あり、忠臣は直言あるなり、前

きの臣太だ直言なり、是れ忠臣なり、仁君にあらずんば得じと、帝是を感じて、即ち前きの臣をめしかへさるゝなり、亦云く、秦の始皇のとき、太子の花園をひろめんとの玉ふ、臣の云く、最もよし、花園ひろふして鳥獸多く集りたらば、鳥獸を以て隣國の軍を防くべしやと、是に依て其の事止まりぬ、亦宮殿を作り、柱を漆にぬらんと言ふ、臣の云く、最も然るべし、柱をぬりたらんには、敵とゞまらんかと、然あれば其の事も止りぬ、儒教の心はかくのごとく、たくみに言を以て惡事をとゞめ、善事をすめゝしなり、禰子の人を化する意巧も、其の心有べきなり、

一日僧問て云く、智者の無道心なると、無智の有道心なると、始終いかん、答て云く、無智の有道心は終に退すること多し、智慧ある人は無道心なれども、終には道心を起すなり、當世も現證是れ多し、然あれば先づ道心の有無を云はず、學道を勤むべきなり、道を學せば只た貧なるべし、內外の書籍を見るに、貧ふして居所もなく、或は滄溟の水に浮び、或は首陽の山にかくれ、或は樹下露地に端坐し、或は塚間深山に卓菴する人もあり、亦富貴にして財多く、朱漆をぬり、金玉をみがきて、宮殿等を造るもあり、俱に典籍にのせたり、然といへども、後代をすゝむるには、皆貧にして財なきを以て本とす、詔りて罪業を誡むるには、富て財多きを驕奢の者と云て誹れるなり、

示して云く、出家人は必ず人の施を受て喜ぶことなかれ、亦受ざることなかれ、故僧正の云く、人の供養を得て喜ぶは佛制にたがふ、喜ばざるは檀越の心にたがふ、此の故實用心は、我に供養するに非ず、三寶に供養するなり、かるがゆへに彼の返事には、此の供養は三寶定て納受有るべしと言ふべきなり、

示して云く、古へに謂ゆる君子の力は牛に勝れり、然あれども牛とあらそはすと、今の學人我が智慧才學人に勝れたりと存するとも、人と諍論を好むことなかれ、亦惡口を以て人を呵嘖し、怒目を以て人を見ることなかれ、今時の人多く財をあたへ恩を施せども、嗔恚を現じ、惡口を以て謗言する故に、

必ず逆心を起すなり、昔眞淨文和尚衆に示して云く、我ひかし雲峰とちぎりをむすんで學道せしとき、雲峰同學と法門を論し、衆寮にてたかひに高聲に論談し、つねには互に惡口に及び、諠譁しき、諍論已にやんで、雲峰我れに謂て云く、我と汝と同心同學なり、契約淺からず、何が故そ、我れ人とあらそふに口入をせざるやと、我れそのとき揖して恐惶せるのみなり、其の後彼も一方の善知識たり、我れも今住持たり、往日おもへらく雲峰の論談畢竟無用なり、況や諍論は定りて僻事なり、諍ふて何の用ぞと思ひしかば、我は無言にして止りぬと云ふ、今の學人も最もこれを思ふべし、學道勤勞の志しあらば、時光を惜て學道すべし、何の暇まありてか人と諍論すべき、畢竟して自他共に無益なり、法門すらしかなり、何かに況や世間の事において無益の論をなさんや、君子の力ら牛にも勝れりといへども、牛と諍そはず、我れ法を知れり、彼に勝れたりと思ふとも、論して人を掠め難ずべからず、若し眞實の學道の人ありて法を問はゞ、法を惜むべからす、爲に開示すべし、然あれとも猶それも、三度問はれて一度答ふべし、多言閑語することなかれ、我れも此の眞淨の語を見しより後、尤も此答は我身にもあり、是れ我をいさめらるゝと思ひし故に、以後終に他と法門の諍論せさるなり、

示して云く、古人多くは云ふ、光陰空く度ることなれ、亦云く、時光徒らに過すことなかれと、今學道の人須く寸陰を惜むべし、露命消やすし、時光速かにうつる、暫くも存する間は餘事を管することなかれ、唯須く道を學すべし、今時の人、或は父母の恩を捨て難しと云ひ、或は主君の命は背き難しと云ひ、或は妻子眷屬に離れ難しと云ひ、或は眷屬等の活命存し難しと云ひ、或は世人誹謗しつへしと云ひ、或は貧ふして道具調ひ難しと云ひ、或は非器にして學道に堪へかたしと云ふ、かくのごとく識情を廻らして、主君父母をも離れはす、妻子眷屬をもすてはす、世情に隨ひ、財寶を貪ぼるほどに、一生空く過して、正しく命終の時に當ては後悔すべし、須く靜坐して道理を案し、速かに道心を起さんことを決定すべし、主君父母も我に悟りを與ふべからず、

妻子眷屬も我が苦みを救ふべからず、財寶も我が生死輪廻を截斷すべからず、世人も我をたすくべきにあらず、非器なりと云て修せずんば、何れの劫にか得道せんや、只須く萬事を放下して、一向に學道すべし、後時を存することなかれ、

示して云く、學道は須く吾我を離るべし、設ひ千經萬論を學ひ得たりとも、我執を離れずんば終に魔坑に落つべし、古人の云く、若し佛法の身心なくんば、いづくんぞ佛となり祖と成らんと云云、我を離るゝと云ふは、我が身心を佛法の大海に拋向して、苦しく愁ふるとも、佛法に隨て修行するなり、若し乞食をせば人是をわるし、みにくしと思はんずるなれど、かくのごとく思ふ間だは、いかにしても佛法に入得ざるなり、世の情見をすべて忘れて、唯道理に任せて學道すべし、我身の器量を顧み、佛法に契ふまじなんぞ思ふも、我執を持たる故なり、人目を顧み、人情を憚かるは、即ち我執の本なり、只佛法を學すべし、世情に隨ふことなかれ、

一日侍問て云く、叢林勤學の行履と云ふは、如何、

示して云く、只管打坐なり、或は樓上、或は閣下に定を營み、人に交はりて、雜談せず、聾者の如く、瘂者の如くにして、常に獨坐を好むべきなり、

一日參の次に示して云く、泉大道の云く、風に向て坐し、日に向て眠る、時の人の錦を被たるに勝りたり云云、是の言は、古人の語なりといへども少し疑ひあり、時の人と云は、世間貪利の人を云か、若し然らは敵對最も下れり、何ぞ云ふに足らん、若しは學道の人を云か、然らば何ぞ錦を被たるに勝れりと云ふや、此の心を察するに、猶を錦を重もんする心有るかと聞こゆ、聖人は然あらず、金玉と瓦礫と齊く執することなし、故に釋迦如來牛女が乳粥を得て食し、馬麥を得て食す、いづれも等くす、法に輕重なし、人に淺深あり、當世金玉を人に與ふれば重しとして取らず、亦木石なぞをば輕として是を受て愛す、金玉本とより土の中より得たり、木石も大地より生せり、何ぞ一つをば重しとて取らず、一つをば輕しとて愛せん、此の心を案ずるに、重きを得て

は執する心あらんか、輕きを得ても愛する心あらば、咎は等しかるべし、是れ學人の用心すべき事なり、

（大小權實）（佛教に大乘小乘權教實教あり）

示して云く、先師全和尚入宋せんとせし時、本師叡山の明融阿闍梨、重病起り病床にしづみ、既に死せんとす、其の時かの師云く、我既に老病起り、死去せんこと近きにあり、今度暫く入宋をとゝまりたまひて、我が老病を扶けて、冥路を用ひて、然して死去の後其の本意をとけらるべしと、時に先師弟子法類等を集めて評議して云く、我れ幼少の時雙親の家を出て、後より此の席の養育を蒙ていま成長せり、其の養育の恩最も重し、亦出世の法門、大小權實の教文、因果をわきまへ、是非をしりて、同輩にも超ぬ、名譽を得たること、亦佛法の道理を知て、今入宋求法の志しを起すまても、偏に此の師の恩に非ずと云ことなし、然るに今年すでに老極して重病の床に臥したまへり、餘命存しがたし、再會期すべきにあらず、故にあなかちに是を留めたまふ、師の命もそむき難し、今ま身命を顧みず入宋求法するも、菩薩の大悲利生の

爲なり、師の命を背て宋土に行ん道理有りや否や、各の思はるゝ處をのべらるゝべしと、時に諸弟人々皆云く、今年の入宋は留まらるべし、師の老病死已に極れり、死去決定せり、今年ばかり留りて、明年入宋あらば、師の命を背かず、重恩をもわすれず、今や一年半年入宋遲きとても、何んの妨けかあらん、師弟の本意相違せず、入宋の本意も如意なるべしと、時に我れ末腦にて云く、佛法の悟り今はさてかうこそありなんと思召さるゝ儀ならば、御留り然あるべしと、先師の云く、然あるなり、佛法修行これはとにてありなん、始終かくのごとくならば、即ち出離得道たらんかと存すと、我が云く、其の儀ならは御留りたまひてしかあるべしと、時にかくのごとく各の總評し了て、先師の云く各の評議、いづれもみな留まるべき道理ばかりなり、我れが所存は然あらず、今度留りたりとも、決定死ぬへき人ならば、其に依て命を保つべきにもあらす、亦我れ留りて看病外護せしによりたりとて、苦痛もやむべからす、亦後に我あつかひすゝめしによりて、生死を離れらるべき道理にも

あらす、只一旦命に隨て師の心を慰むるばかりなり、是れ卽ち出離得道の爲には一切無用なり、錯て我が求法の志しを障へしめられは、罪業の因緣とも成ぬへし、然あるに若し入宋求法の志しをとげて、一分の悟りをも開きたれば、一人有漏の迷情に背くとも、多人得道の因緣と成りぬへし、此の功德もしすぐればすなはちこれ師の恩をも報しつへし、設ひ亦渡海の間に死して本意をとげずとも、求法の志しを以て死せば、生々の願つきるべからす、玄奘三藏のあとや思ふへし、一人の爲にうしなひやすき時を空く過さんこと、佛意に合なふべからず、故に今度の入宋、一向に思切り畢りぬと云て、終に入宋せられき、先師にとりて眞實の道心と存せしこと是らの道理なり、然あれば今の學人も、或は父母の爲、或は師匠の爲とて、無益の事を行じて、徒らに時を失ひて、諸道にすぐれたる佛道をさしおきて、空く光陰を過すことなかれ、時に裝問て云く、眞實求法の爲には、有爲の父母師匠の恩愛の障緣を一向にすつべき道理はまことに然かあるべし、但し父母師匠の恩愛等のかたは一向に捨離すとも、亦菩薩の行を存せん時は、自利をさしおきて利他を先とすべきか、然あるに老師重病切にして、亦他人のたすくべきもなく、幸に保護の我れ一人其の仁に當りたるを、自らの修行ばかりを思ひて、渠を扶けずんば、菩薩の行に背けるに似たるか、たゞ大士の善行をきらふべからず、緣に隨ひ事に觸れて佛法を存すべきか、もしこれらの道理によらば、亦止りてたすくべきか、何ぞ獨り求法を思ひて老病の師を扶けざるや、いかん、示して云く、利他の行も自利の行も、たゞ劣なる方を捨て、勝なる方をとらば、大士の善行なるべし、老病を扶けんとて水菽の孝をいたすは、只今生暫時の妄愛、迷情の喜びばかりなり、迷情の有爲に背きて無爲の道を學せんは、設ひ遺恨は蒙ることありとも、出世の勝緣と成べし、是を思へ是を思へ、一日示して云く、世間の人多く云ふ、某し師の言ばを聞けども我が心に叶はすと、此の言は非なり、知らず其のこゝろいかん、若しは惡敎等の道理の、我が心に違背して非なりと思ふか、これは一向の凡愚なり、亦は師の云へる言

が我が心に契はざるか、若し然あらばなんぞはじめより師に問ふや、亦日來の情見を以て云か、もししかあらば是れは無始よりこのかたの妄念なり、學道の用心と云ふは、我が心にたがへども、師の言は聖教の言理ならば、全く其に隨て本の我見をすてゝあらためゆくべし、此の心が學道第一の故實なり、われ昔日我が朋輩の中に我見を執して、知識をとふらひける者ありき、我が心に違するをば心得ずと云て、我見にあひかなふをば執して、一生空くすぎて、佛法を會せざりけり、我れそれを見て智發してしりぬ、學道は然あるべからずと、かく思ひて師の言ばに隨て、全く道理を得て、其後看經の次でに、或る經に云く、佛法を學せんと思はゞ、三世の心を相續することなかれと、誠に知ぬさきの諸念舊見を記持せずして、次第にあらためゆくべきなりと云ことを、書に云く、忠言逆耳、いふこゝろは、我爲に忠有べきことばは必ず耳に逆するなり、違するとも强ひて隨ひ行せは、畢竟して益有べきなり、一日雜談の次でに示して云く、人の心本より善惡なし、善惡は緣に隨て起る、

喩へば人發心して山林に入る時は、林下はよし人間は惡しとおもはゆ、亦退屈の心にて山林を出る時は、山林は惡しとおぼゆ、是れ卽ち決定して心に定相なし、緣に隨て兎も角もなるなり、かるが故に善緣にあへば心よくなり、惡緣に隨ふへきなり、

亦云く、人の心は決定人の言ばに隨ふと存ず、大論に云く、喩へば愚人の手に摩尼珠をもてるが如し、人是を見て汝下劣なり、自ら手に物をもてりと云を聞て、おもはく、珠はをしゝ、名聞は深し、我は下劣ならんとおもふ、思ひ煩ふて猶を只名聞にひかれ、人の言ばについて珠を捨て他人にとらしめんと思ふはごとに、終に珠を失ふと云々、人の心はかくのごとし、一定此の言ば我爲によしと思へども、名聞にさへられてそれに順はざるもあり、亦一定我爲にあしき事と思ひながらも、名聞の爲なれば先づ隨ふ人もあり、惡にも善にも隨ふときは、心は善惡につるゝなり、故にいかにもとより惡き心なりと

も、善知識に隨ひ、良人に馴るれば、自然に心もよくなるなり、惡人に近づけば我心にも初は惡しと思へども、終にその人のこゝろに隨ひ馴るほどに、おぼえずやがて實に惡く成るなり、亦人の心決定して、他に物をとらせじと思へども、他人强て乞ひぬれば、にくしとおもひ、いやながらも與ふるなり、亦決定して與へんと思へども便宜なく、時すぎぬれば亦やむ事も有なり、然あれば學人たとひ道心なくとも、良人に近づき善緣にあふて、同じ事をいくたびも聞見るべきなり、この言は一度聞たらば、重て聞べからずと思ふことなかれ、道心一度起したる人も、同じ事なれども、聞たびごとに心みがゝれて、いよ〳〵精進するなり、亦無道心の人も、一度二度こそつれなくとも、度々聞ぬれば霧露の中を行くが如く、いつぬるゝとも覺ざれども、自然に衣のうるほふが如くに、良人の言ばをいくたびも聞けば、自然にはづる心も起り、實の道心も起るなり、故に知たる上にも聖教をばいくたびも見るべし、師の言ばも聞たる上にも、重て聞べし、いよいよふかき心有べきなり、學道

（大慧禪師）宋の徑山の大慧杲禪師なり

の爲にさはりと成るべき事をば、重て是に近づくべからず、善友にはくるしくわびしくとも、近づきて行道すべきなり、

示して云く、大慧禪師ある時尻に腫物出ぬれば、醫師此を見て大事の物なりと云ふ、慧の云く、大事の物ならば死ぬべきや否や、醫師云く、ほとんどあやふかるべし、慧の云く、若し死ぬべくんば彌よ坐禪すべしと云て、猶ほ强て坐しければ、其の腫物うみつぶれて別の事なかりき、古人の心かくのごとし、病をうけては彌よ坐禪せしなり、今の人病なふして坐禪ゆるくすべからず、病は心に隨て轉するかと覺ゆ、世間にしやくりする人に、虛言してわびつべき事を云つげぬれば、それをわびしつべき事に思ひ、心に入て、陳せんとするほどに、忘れて其のしやくり留りぬ、我もそのかみ入宋の時、船中にて痢病せしに、惡風出來て船中さはぎける時、やまふ忘れて止りぬ、是を以て思ふに、學道勤勞して他事を忘るれば、病も起るまじきかと覺るなり、

示して云く、俗の野諺に云く、啞せず聾せざれば家公とならずと、云こゝろ

は、人の毀謗をきかず、人の不可をいはざれば、よく我が事を成ずるなり、かくのごとくなる人を、家の大人とするなりと、是れ野諺なりといへども、是を取て衲僧の行履に用ゆべし、他のそしりにとりわはず、他の恨みにとりおはず、他の是非をいはずして、如何んが道を行せん、徹骨徹髓の者は是を得べきなり、

示して云く、大慧禪師の云く、學道は須く人の千萬貫の錢を債ひけるが、一文をも持たざるに乞貰らるゝ時の心の如くすべし、若しこの心あれば、道を得ることやすしといへり、信心銘に云く、至道かたきことなし、唯だ揀擇を嫌ふと、揀擇の心だに放下しぬれば、直下に承當するなり、揀擇の心を放下すると云は、我をはなるゝなり、佛道を行じて、代りに利益を得ん爲に佛法を學すと思ふことなかれ、只佛法の爲に佛法を修行すべきなり、縱ひ千經萬論を學し得て、坐禪の床を坐破するとも、此の心なくんば、佛祖の道を得べからず、只すべからく身心を放下して、佛法の中に置て、他に隨ひて舊見なければ、即ち直下に承當するなり、

示して云く、古人の云く、所有の庫司の財穀をば、因を知り果を知る事に分付して、司を分ち局を列ねて、是を司さどらしむと、いふこゝろは、主人は寺院の大小の事都て管せず、只管工夫打坐して大衆を勸むべきゆゑなり、亦云く、良田萬頃よりも薄藝身に隨んにはしかず、施恩は報をのぞまず、人に與へて悔る事なかれ、口を守ること鼻の如くすれば、萬禍も及ばずと云り、行高ければ、人自ら重んじ、才多ければ人自ら歸伏するなり、深く耕して淺くうゆる、猶ほ天災あり、己を利して人を損する、豈に果報なからんや、學道の人話頭を見る時、目を近づけ力を盡して、能々見るべし、

示して云く、古人の云く、百尺の竿頭にさらに一歩をすゝむべしと、此の心は、十丈の竿のさきにのぼりて、なほ手足をはなちて、すなはち身心を放下するが如くすべし、是に付て重々の事あり、今時の人は世をのがれ家を出ぬるに似たれども、其の行履をかんがふれば、なほ實とに出家の遁世にてはな

きなり、いはゆる出家と云ふは、第一まづ吾我名利を離るべきなり、是を離れずんば行道は頭燃を拂ひ、精進は翹足をしるとも、只無理の勤苦のみにて、出離にはあらざるなり、大宋國にも離れ難き恩愛を離れ、捨て離き世財を捨て、叢林にまじはり、祖席をふる人あれども、密細に此の故實を知らずして行ずる故に、道をも悟らず、心をも明めずして、徒らに一期を空く過すもあり、その故は人の心も初めは道心を起して僧にもなり、知識にも隨へども、佛となり祖とならん事をば思はずして、身の貴く我が寺の貴きよしを施主檀那にも知られ、親類眷屬にもいひきかせて、人にたふとびられ、供養せられんと思ひ、剩へ衆僧は皆な無當不善なれども、我れ獨り道心もあり、善人なる由を方便して云ひきかせ、思ひしらせんとする樣もあり、是れ等は云ふに足ざるもの、五闡提等の惡比丘のごとし、決定地獄に落る心ばへなり、これをものもしらぬ一向の在家人は、道心者貴き人なりと思へり、此れを少したちいで、施主檀那をも貪らず、父母妻子をも捨てはてゝ、叢林に交りて行道するもあれども、本性懶惰懈怠なる者は、ありのまゝに懈怠する事も慙かしければ、長老首座等の見る時は相かまへて行道するよしをなして、見ざる時は事に觸れて怠り、徒らにおくるもあり、是は在家にしてさのみ無當ならんよりはよけれども、猶ほ吾我名利を捨得ざるなり、亦總じて師の心もかねず、首座兄弟の見るをも見ざるをも顧みず、常に思はく、佛道は人の爲ならず、身の爲なりとて、我身心こそ佛となり祖とはならんと、眞實に勤め營む人もあり、是は以前の人々よりはまことの道者かと覺れども、これも猶ほ我が身よくならんと思ひて修する故に、なほいまだ吾我を離れず、亦諸佛菩薩に隨喜せられんことを思ひ、佛果菩提を成せんことを思ふも、我欲名利の心なほすて得ざる故なり、此等までではいまだ百尺の竿頭を離れずとりつきたるが如し、只身身を佛法になげすてゝ、更に悟道得法までをも望む事なく修行するを以て、是を不汚染の行人とは云なり、有佛の處にもとゞまることをゝず、無佛の處をも急に走過すと云ふは此の心ろなり、

示して云く、衣食の事は、兼てより思ひあてがふことなかれ、若し失食絶烟せば、其の時に臨で乞食せん、その人に用事いはんなど思ひ設けたるも、即ち物を貯る邪命食にて有るなり、衲子は雲の如く、定れる住所もなく、水の如くに流れゆきて、よる處もなきをこそ僧とは云ふなり、縱ひ衣鉢の外に一物も持たずとも、一人の檀那をも賴み、一類の親族をも賴むは、即ち自他ともに縛住せられて、不淨食にてあるなり、かくのごとく不淨食等を以て、やしなひもちたる身心にて、諸佛清淨の大法を悟らんと思ふとも、とても契ふまじきなり、たとへば藍にそめたる物は青く、蘗にそめたる物は黄なるが如く、邪命食を以てそめたる身心は、即ち邪命身なるべし、此の身心を以て佛法をのそまば、沙を壓して油を求るが如し、只時にのぞみて、兎も角も道理に契ふやうにはからふべきなり、かねてとかく思ひたくはふるは、皆たがふことなり、能々思量すべきなり、

示して云く、學人各知るべし、人々大なる非あり、憍奢(おごり)是れ第一の非なり、内外の典籍に是を等しく戒めたり、外典に云く、貧ふして諂らはざるはあれども、富て奢らざるはなしといひて、なほ富を制して奢らざらん事を思ふなり、最もこれ大事なり、よくよくこれを思ふべし、我が身下賤にして、高貴の人におとらじと思ひ、人に勝れんと思ふは、憍慢のはなはだしきものなり、しかあれど、是は戒めやすし、亦世間に自體財寶に豐かに、福分もある人は、眷屬も圍遶し、人もゆるす、それを是とし憍るゆゑに、傍らの賤き人は、これを見て羨み痛むべし、人のいたみを自體富貴の人いかやうにかつゝしむべきや、かくの如き人は、戒めがたく、その身も慎むことならざるなり、亦心に憍心はなけれども、ありのまゝにふるまへば、傍らの賤き人はうらやみいたむべきなり、是をよくつゝしむを、憍奢をつゝしむとは云ふなり、我身の富は果報にまかせて、貧賤の人見てうらやむをはゝからざるを、憍心と云なり、外典に云く、貧家の前を車に乘て過ることなかれと、しかあれば我が身朱車にのるべくとも、貧人の前をば憚るべしと云々、内典も亦かくの如し、

然あるに今の學人僧侶は、智慧法門を以て人に勝つべきと思ふなり、必ずしも此を以て憍ることなかれ、我より劣れる人のうへの非義を云ひ、或は先人傍輩等の非義をしりて誹謗するは、是れ憍奢のはなはだしきなり、古人の云く、智者の邊にしては負くるとも、愚者の邊にして勝つべからずと云々、我れがよく知たる事を、人の惡く心得たりとも、他の非を云ふは亦是れ我れが非なり、法門をいふとも先人先輩を誹らず、亦愚癡蒙昧なる人の淡み嫉みつべきところにては、能々是を思惟すべし、予も建仁寺に寓せし時、人多く法門等を問ひき、その中には非義も過患も有しかども、此の儀をふかく存じて、只ありのまゝに法の德を語りて、他の非をいはず、無爲にしてやみにき、愚者の耽見ふかきは、我が先德の非を云とて、かならず嗔恚を起すなり、智慧ある人の眞實なるは、佛法の道理をだにもこゝろ得ぬれば、人はいはざれども、我が非及び我が先德の非をも思ひしりてあらたむるなり、かくのごときの事、よく〳〵思ひしるべし、

示して云く、學道の最要は坐禪これ第一なり、大宋の人多く得道すること、みな坐禪のちからなり、一文不通にて無才愚癡の人も、坐禪をもつぱらすれば、その禪定の功により、多年の久學聰明の人にも勝るゝなり、しかれば學人は祇管打坐して、他を管することなかれ、佛祖の道は只坐禪なり、他事に順ずべからず、ときに柴問て云く、打坐と看讀とならべて此を學するに、語錄公案等を見るには、百千に一つも聊か心得ることも出來るなり、坐禪にはそれほどのことの驗しもなし、然かあれども猶は坐禪を好むべきか、答て云く、公案話頭を見て聊か知覺有る樣なりとも、それは佛祖の道にとほざかる因緣なり、無所得無所悟にて、端坐して時を移さば、即祖道なるべし、古人も看語祇管坐禪ともに勸めたれども、猶は坐をもはらにすゝめしなり、亦話頭に依てさとりをひらきたる人あれども、其れも坐の功に依りてさとりのひらくる因緣なり、まさしきは坐によるべし、

正法眼藏隨聞記第五終

正法眼藏隨聞記第六

侍者懷奘編

示して云く、人を愧づべくんば明眼の人を愧づべし、予在宋の時天童の淨和尚、侍者に請するにいはく、元子は外國人たりといへども、器量人なりと云ふて請す、予堅く此を辭す、其故は和國に聞ゆん爲にも、學道の稽古の爲にも、大切なれども、衆中に具眼の人ありて、外國人として大叢林の侍者たらんこと、大國に人なきに似たりと難ずることやあらん、最もはぢつべしと思ひて、書狀を以て此旨をのべしかば、淨和尚聞て、國を重んじ、人を愧ることを感じ、許して更に請し玉はざりしなり、

示して云く、或る人の云く、我は病者なり、非器なり、學道には堪へず、法門の最要を聞て、獨住隱居して身をやしなひ、病をたすけて、一生を終へんと思ふと、これは太だ非なり、先聖必ずしも金骨にあらず、古人豈に咸く皆

上器ならんや、滅後を思へばいくばくならず、在世を考るに人々みな俊なるにあらず、善人もあり、惡人もあり、比丘衆の中に不可思議の惡行なるもあり、最下品の器量もあり、しかれども卑下しやめりなんと稱して道心をおこさず、非器なりと云て學道せざるはなし、今生に若し學道修行せずんば、何れの生にか器量の人となり、無病の者と成て學道せんや、只身命を顧りみず、發心修行するこそ、學道の最要なれ、

示して云く、學道の人衣食を貪ることなかれ、人々皆食分あり、命分あり、非分の命食を求るとも得べからず、況や學佛道の人にはおのづから施主の供養あり、常乞食たゆべからず、亦常住物もこれあり、私の營みにあらず、果蓏(くさのみ)と乞食と信心施との三種の食は、皆な是れ淸淨食なり、其の餘の田商士工の四種の食は、皆不淨の邪命食なり、出家人の食分にあらず、昔し一人の僧あり、死して冥途に行く、閻王の云く、此の人は命分いまだつきず、かへすべしと、冥官云く、命分つきずといへども、食分すでに盡く、王の云く、荷

葉を食せしむべしと、しかりしよりその僧よみかへりて後ち、人中の食物食することをにず、只荷葉のみを食して、殘命を保てり、しかあれば出家は學佛のちからによりて食分も盡くべからず、白毫の一相、二十年の遺因、歴劫に受用すとも盡べきにあらず、たゞ行道を專らにして、衣食を求むべきにはあらざるなり、身體血肉だによくもてば、心も隨てよくなると、醫方等にも見えたり、いはんや學道の人持戒梵行して、佛祖の行履に任せて身を治むれば、心も隨て調ふなり、學道の人言ばを發せんとする時は、三度顧て自利利他の爲に、利あるべくんば是を云ふべし、利なからん言語は止まるべし、かくのごときの事も、一度にはにがたし、心にかけて漸々に習ふべきなり、雜話の次でに示して云く、學道の人衣食にわづらふことなかれ、此の國は邊地小國なりといへども、昔も今も顯密の二教に名を得後代にも人にも知られたる人おほし、或は詩歌管絃の家、文武學藝の才、其道を嗜む人もおほし、かくの如き人々未だ一人も衣食に豐かなりと云ことを聞かず、皆貧を忍び他事を忘れて、一向に其の道を好むゆゑに、其の名をも得るなり、いはんや祖門學道の人は、渡世を捨てゝ一切名利に走らず、何とかして豐かなるべきぞ、大宋國の叢林には、末代なりといへども、學道の人千萬人ある中に、或は遠方より來り、或は鄕土より出たるも有り、いづれも多分は貧なり、しかあれども、いまだ貧をうれへとせず、只悟道の未だしきことをのみ愁へて、或は樓上或は閣下に坐して、考妣に喪するが如くにして、一向に佛道を修するなり、まのあたり見しことは、西川の僧遠方より來れりし故に、所持の物なし、纔に墨二三丁もてり、そのあたひ兩三百文、此國の兩三十文にあたれるを持て、唐土の紙の下品なる、極めて弱きを買ひとりて、襖ま或は袴などに作てきぬれば、起ち居に破るゝおとして、あさましきをも顧みず、うれへざるなり、或る人の云く、汝鄕里にかへりて、道具裝束とゝのへよと、答て云く、鄕里遠方なり、路次の間に光陰を空ふして、學道の時を失せんことを憂ふと云て、猶更に寒をも愁へずして、學道せしなり、しかある故に、大國にはよき人も

出來るなり、

示して云く、傳へ聞く、昔日雪峰山の開山の時は、寺貧窮にして、或は絶烟し、或は綠豆飯をむして食して、日を送て學道せしかども、後には一千五百人の僧常に斷ざるなり、昔しの人はかくのごとし、今もまたかくのごとくなるべし、僧の損ずることは多く富貴より起るなり、如來在世調達が嫉妬を起せしことも、日に五百車の供養より起れり、唯自らを損するのみに非ず、亦他をして惡をなさしむる因緣なり、實の學道の人、何としてか富貴となるべき、たとひ淨信の供養も、多くつもらば恩の思ひを作して報を思ふべし、此の國の人は亦我が爲に利を思ひて施をいたす、笑ひて向へる者によく與はさだまれる世の道理なり、只他の心にしたがはんとしてなさば、これ學道の障りなるべし、只飢を忍び寒を忍で一向に學道すべきなり、

一日示して云く、古人の云く、聞くべし、見るべし、得るべし、亦云く、得ずんば見るべし、見ずんば聞くべしと、云ふ心は、聞んよりは見るべし、見んよりは得るべし、未だ得ずんば見るべし、未だ見ずんば聞くべしとなり、

亦云く、學道の用心は只本執を放下すべし、まづ身の威儀をさきとしてあらたむれば、心も隨ふて改まるなり、先づ律儀戒行を守れば、心も隨ふて改まるべし、宋土には俗人等の常の習ひに、父母に孝養の爲に宗廟にて各々聚會し、泣まねをするほどに、終には實に泣くなり、學道の人も初めより道心なくとも、只しひて佛道を好み學せば、終には實の道心も起るべきなり、初心學道の人は、只衆に隨ふて行道すべきなり、はやく用心故實等を學し知らんと思ふことなかれ、用心故實等のことも、只獨り山にも入り、市にもかくれて、行せん時あやまりなく、能く知りたるは好きことなり、衆に隨ふて行せば道を得べきなり、たとへば船にのりて行くには、我は渭ゆくやうをも知らざれども、よき船師に任せてゆけば、知りたるも知ざるも彼の岸に至るが如し、善知識に隨て、衆と共に行じて、私しなければ自然に道人となるなり、學道の人たとひ悟りを得ても、今は至極と思ふて行道をやむることなかれ、道は無

窮なり、悟りても猶行道すべし、むかし良遂座主の麻谷に參ずる因緣を思ふべし、

示して云く、學道の人は後日をまちて行道せんと思ふことなかれ、たゞ今日今時をすごさずして、日々時々を勤むべきなり、爰にある在家人長病せしが、去年の春のころ、予にあひちぎりて云く、當時の病ひ療治せば、必定妻子を捨て、寺の邊に庵室をかまへむすんで、一月兩度の布薩にあひ、日々行道法門談義を見聞して、隨分に戒行を守りて、生涯を送らんと云ひき、その後種々に療治せしに依て、少き元氣あり、しかれども亦再發ありて、日月空くすごしき、今年正月より俄に大事になりて、苦痛次第にせむるほどに、日來支度する庵室の道具をはこびて作るほどのひまもなき故に、先づ人の庵室をかりて住せしが、わづかに一兩月の中に死し去りぬ、前夜に菩薩戒をうけ、三寶に歸して、臨終よくして終りぬれば、在家にて妻子に恩愛を惜み、狂亂して死せんよりは、尋常ならねども、去年思ひよりたりし時に、在家を離て寺

（布薩）梵語に云く布薩とは諸惡不善の法及ひ諸の煩惱を捨て自法を證得し梵行を修する事を究竟す云々又云く半月々々に自ら前の半月より今の半月に至るまで犯戒せざるやを觀て若し犯すある者は同意の所に於て懺悔す云々と見えたり

にちかづき、僧になれて行道しておはりたらば、すぐれたらましと存ずるにつけても、佛道修行は後日を待つまじき事と覺るなり、身の病者なれば病ひを治して後より修行せんと思ふは、無道心のいたす處なり、四大和合の身は誰か病無からん、古人必ずしも金骨にあらず、只志だに至りぬれば、他事を忘れて行するなり、大事身の上に來れば、必ず小事を忘るゝ習ひなり、佛道は一大事なれば、一生に窮めんと思ひて、日々時々を空くすごさじと思ふべきなり、古人の云く、光陰虛く度ることなかれと云々、病を治せんと營むほどに、除かずして增氣し、苦痛いよ〳〵せめば、少しも痛のかるかりし時に行道せんと思ふべし、强き痛みを受ては、尙ほ重くならざるさきにと思ふべし、重く成ては死せざるさきにと思ふべきなり、病を治するには、減ずるもあり、增するもあり、亦治せざれども減じ、治するに增するもあり、これを能々思ひ分くべきなり、行道の人居所等を支度し、衣鉢等を調へて、後に行道せんと思ふことなかれ、貧窮の人衣鉢資具にともしくして、調ふを待つほどに、

次第に臨終ちかづきよるはいかん、ゆゑに居所を待ち、衣鉢を調へて、後に行道せんと欲せば、一生空く過すべきなり、只衣鉢等はなけれども、在家も佛道は行ずるぞかしと思ひて行ずべきなり、亦衣鉢等は只有るべき僧體のかざりなればなり、實の佛道行者はそれにもよらず、より來らば有るに任すべし、あながちに求ることなかれ、有ぬべきを持たしとも思ふべからず、病も治しつべきをわざと死せんと思ひて、治せざるも外道の見なり、佛道の爲には命を惜むことなかれ、亦惜まざることなかれ、より來らば灸治一所煎藥一種なんど用ゐん事は、行道の障りともならじ、行道をさしおきて、病を治するをさきとして、後に修行せんと思ふは非なり、

示して云く、海中に龍門と云處ありて、洪波しきりにたつなり、諸の魚ども彼の處を過ぬれば、必ず龍となるなり、故に龍門と云なり、いま思ふ、彼の處洪波も他所にことならず、水も同くしはゆき水なり、然れども定まれる不思議にて、魚ども彼の處を渡れば必ず龍と成る、魚の鱗もあらたまらず、身

も同じ身ながら、たちまちに龍となるなり、衲子の儀式も亦かくのごとし、處も他所にことならねども、叢林に入りぬれば、必ずしも佛と成り祖となるなり、食も人と同く喫し、衣も同く服し、飢を除き、寒を禦ぐことも、齊しけれども、只髮を剃り、袈裟を着して、食を齋粥にすれば、忽ちに衲子と成るなり、成佛作祖遠く求むべきにあらず、只叢林に入ると入らざるとは、彼の龍門を過ると過ぎざるとの別の如し、亦俗の云く、我れ金を賣れども人の買ふなしと、佛祖の道も亦かくのごとし、道を惜むにはあらず、常に與ふれども、人の得ざるなり、道を得ることは、根の利鈍にはよらず、人々皆法を悟るべきなり、精進と懈怠とによりて、得道の遲速あり、進退の不同は志の至ると至らざるとなり、志しの至らざることは無常を思はざる故なり、念々に死去す、畢竟して且くも留まらず、暫く存せる間だ、時光を空くすごすことなかれ、古語に云ふ、倉にすむ鼠、食に飢ゑ、田を耕す牛草に飽かずと、云ふ心は、食の中にありながら食にうゑ、草の中に住しながら草に乏し、人も

かくのごとし、佛道の中に有りながら道にかなはざるものなり、名利希求の心止まざれば、一生安樂ならざるなり

示して云く、道者の行は善行惡行につき、皆おもはくあり、凡人の量る所にあらず、昔し慧心僧都、一日庭前に草を食ふ鹿を、人をして打ち拂はしむ、時に或る人問て云く、師慈悲なきに似たり、草を惜みて畜生を惱ますか、僧都の云く、しかあらず、吾れ若し是を打ち拂はずんば、此の鹿ついに人になれて、惡人に近づかん時は必ず殺されん、この故にうちおふなりと、これ鹿を打ち拂ば慈悲なきに似たれども、內心は慈悲の深き道理かくのごとし、

一日示して云く、人ありて法門を問ひ、或は修行の法要を問ことあらば、納子はかならず實を以て是を答べし、若くは他の非器を顧み、或は初心未學の人にて心得べからずして、方便不實を以て答ふべからず、菩薩戒の心は、縱ひ小乘の器ありて小乘の道を問ふとも、只大乘を以て答ふべきなり、如來一期の化儀も亦同じ、方便の權教は實は無益なり、只最後の實教のみ實に益あ

り、しかあれば他の得不得を論せず、只實を以て答ふべきなり、若し箇中の人を見ば、實德を以て是を見るべし、外相假德を以てこれを見るべからず、

昔し孔子に一人あり、來て歸す、孔子問て云く、汝ぢ何を以てか來て我に歸するや、云く、君子參內の時此を見しに、頤々(けだかく)として威勢あり、故に歸す、

ときに孔子弟子に命じて、乘物裝束金銀財物等を取出して此を與へて、汝は我に歸するにあらずと云ふてかへせり、亦云く、宇治の關白殿、ある時鼎殿に到て、火を焚く所を見玉へば、鼎殿是を見て云ふ、いかなる者ぞ案內なく御所の鼎殿へ入ると云て追出されて後、關白殿先の惡き衣服等をぬぎかへて、頤々として裝束して出たまふ時、さきの鼎殿はるかに見て、恐れ入てにげにき、時に殿下裝束を竿の先にかけ拜せられけり、人これを問ふ、答て云く、吾れ他人に貴びらるゝことを我が德にはあらず、只此の裝束ゆゑなりと云へり、おろかなる者の人を貴ぶことかくのごとし、經敎の文字等を貴ぶことも亦かくのごとくなり、古人の云く、言は天下に滿れども口過なく、行天下に遍け

れども怨害なしと、是れ即ち云べき所を云ひ、行ふべき事を行ふ故なり、是れは至德要道の言行なり、世間の言行も、私曲を以てはからひ行ふは、おそらくは過のみわらん、衲子の言行は先證是れ定れり、私曲を存すべからず、佛祖行じ來れる道なり、學道の人各々自ら己身を顧るべし、身を顧ると云ふは、吾が此の身心いか樣に持べきぞと顧るべし、然るに衲子はすでに是れ釋子なり、如來の風儀を慣ふべきなり、身口意の威儀は先佛行し來れる作法わり、各々其の儀に隨ふべし、俗すら猶は服は法に應じ、言は行に隨ふべしと云へり、況や衲子は一切私を用ふべからず、

示して云く、當世學道する人、多分法を聞く時、先づ能く領解する由を知らじと思ひ、答の言ばのよからん樣を思ふほどに、聞くことばが耳を過すなり、總じて詮する處道心なく、吾我を存するゆゑなり、只須く先づ吾我を忘れて、人の云はんことを能く聞得て、後に靜に案じて、難もあり不審もあらば、追ても難じ、心得たらば重て師に呈すべし、當座に領する由を呈せんとするは、法を能くも聞得ざるなり、

示して云く、唐の太宗の時、異國より千里の馬を獻せり、帝これを得て喜ばずして自ら謂へらく、縱ひ我れ獨り千里の馬に乘て千里を行とも、隨ふ臣なくんば其の詮なきなりと、故に魏徵を召して此を問ひ玉へば、徵云く、帝の心と同じと、依て彼の馬に金帛をおふせて返さしむ、世間の帝王たにも無用のものをば喜へたまはずしてかへせり、況や衲子は衣鉢の外は決定して無用なり、無用の物是を貯てなにかせん、俗すら猶は一道を專らに嗜むものは、田苑莊園等を持することを要とせず、只一切國土の人を百姓眷屬とするなり、相法橋遺ニ囑ス子息ニ、たゞすべからく當道をもつはらはげますべしと云へり、況や佛子は萬事を捨て、專ら一事を嗜むべし、是れ第一の用心なり、

示して云く、學道の人參師聞法の時に、能々極めて聞き、重て聞て決定すべし、問ふべきを問はず、云ふべきを云ずして過しなば、必ず我れが損なるべし、師は必ず弟子の問を待て言を發するなり、心得たることをも、いくたび

も問て決定すべきなり、師も弟子に好く心得たるかと問て、云ひきかすべきなり、

示して云く、道者の用心は常の人に異ることあり、故建仁寺の僧正在世の時に、寺中絶食することありき、時に一人の檀那、僧正を請じて、絹一疋を施す、僧正歡喜して人にもたしめず、自ら取て懷中して、寺に歸て知事に與へて云く、明旦の淨粥等に作すべしと、然るに有る俗人の所より所望して云く、愧かましき事有て絹二三疋入用あり、少々にてもあらば給はるべき由を申す、僧正卽ちさきつかたの絹を取返して、すなはちこれを與ふ、時に知事の僧も衆僧も思の外に不審するなり、後に僧正云く、各は僻事とこそ思はるらん、然れども吾が思はくは、衆僧は面々佛道の志し有て集れり、一日絶食して餓死するとも苦しかるべからず、世に交れる人のさしあたりて事缺る苦惱を扶けたらんは、各の爲にも利益すぐれたるべしと云へり、まことに道者の案じ入たることかくの如し、

示して云く、佛々祖々皆な本は凡夫なり、凡夫の時は必ずしも惡業もあり、惡心もあり、鈍もあり、癡もあり、然れども、盡く改めて、知識に隨て修行せしゆゑに、皆佛祖と成しなり、今の人も然あるべし、我が身愚鈍なればとて卑下することなかれ、今生に發心せずんば何の時を待てか行道すべきや、今强て修せば必ずしも道を得べきなり、

示して云く、帝道の故實の諺に云く、虛襟に非ざれば忠言をいれずと、云心は、己見を存せずして、忠臣の言ばに隨て、道理にまかせて帝道を行はるゝなり、禿子の學道は用心故實も亦かくのごとくなるべし、わづかも己見を存せば、師の言ば耳に入ざるなり、師の言ば耳に入ざれば、師の法を得ざるなり、只法門の異見を忘るゝのみにあらず、世事及び飢寒等を忘れて、一向に身心を淸めて聞く時、親く聞得るなり、かくのごとく聞く時は、道理も不審も明らめらるゝなり眞實の得道と云ふは、從來の身心を放下して、只直下に他に隨ひゆけば、卽ちまことの道人となるなり、是れ第一の故實なり、

正法眼藏隨聞記第六終

麓草分

解題

本書は鈴木正三禪師が佛道修行の人は修行未熟にして向上に至ること難ければ淺きより深きに入り麓の草を分けて頂上に登るべしとの意もて修行者の心得べき十七事を懇切に示されたるもの也中に就て衲子分上に係れること多しと雖も俗士の心得べきことも亦少からず向上の一路に辿らんと欲する人は此書を以てそが枝折とも爲すべき也

編者識

麓草分

鈴木正三

剃髪受戒の時可レ著レ心事

佛道修行に趣く人は、淺きより深きに入り、麓の草を分け頂上に登る可し、修行未熟にして向上に至る事かたし、意を得處は古德直示の手段に眼を著くべし、雖レ然肝要は先づ身に相應したる心遣をなすべし、去れば剃髪受戒の時きより心を著て知るべき理あり、此の身は不淨穢惡の身なり、惡業煩惱の身なり、愚癡暗鈍の身なり、三意四趣に墮すべき身なり、四苦八苦に責らるべき身なり、然るに佛々祖々出世ありて、難行苦行の功により、種々方便をたれ、樣々敎化を殘し置き給ひて、濁世末代の我等に至るまで、救とり給はん御願力有難き事共なり、今日髪を剃り、衣鉢をうけてより、貴人高人父母九族の上に坐し佛語祖語を學得し、終に修行成就して、佛祖の慧命を續き、永く三

（衣鉢）五祖弘忍大師法を六祖懷能大師に傳ふるに衣鉢を授けて其傳法の信と爲すことあり其れより傳法のことを衣鉢を授くといへり

界を出離せん事、生々世々の本懷此時なりと思ひ定て、隨喜の思ひをなして、先づ名利の二つを離るべし、名と云ふは、萬代に名を殘し、譽をあらはさん願也、利と云ふは財寶を求めて榮華を極めん望みなり、人間一生は名利の二つに使はれて、片時も安き事なくして、日夜苦しむのみならず、此念に引れて、地獄餓鬼畜生修羅の四惡趣に墮して、八寒八熱の苦を受け、飢餓羸瘦互相殘害の悲をうけ、出期更になかるべきに、唯今佛弟子となる事喜の中の悅、何事か之れに如ん哉、必ず成佛得脫すべしと大誓願を發して、佛祖の敎を守るべし、此の心誠なくば、髪剃りたるしるしなく、鬼畜にかはり有るべからず、既に佛弟子と成つて、鬼畜の心たるべき事、天罰佛罰免るべからず、閻老是を免さんや、恐ても猶恐るべし、三界を出るを以て、出家の二字を得たり、名を穢す事なかれ、人身受がたし、況や佛弟子と成る事は、盲龜の浮木に不レ異、此度此身を救はずして、又何れの生を期すべきやと、一筋に思ひ定めて、信心堅固にして、佛道修行に進むべし、若輩にして此の意を得ざらん人は、

（出離）は煩惱生死を出離することなり

（四諦十二因緣生空）四諦は苦諦集諦滅諦道諦なり十二因緣は一に無明、二に行、三に識、四に名色、五に六入、六に觸、七に受、八に愛、九に形、十に有、十一に生、十二に老死これは因と緣と相對して起す所

出家して益あるべからず、出離の願力を以て修行せずんば、出家の名を得ると云とも、偏に佛法商人なるべし、

可レ敬二禮三寶一事

夫れ三寶と云ふは、佛寶法寶僧寶也、是を三寶とあがめ奉る、是れに三種の義あり、同體三寶、別體三寶、住持三寶也、同體三寶と云ふは、眞如覺性を佛寶と名付け、眞如に執持の義有るを法寶と名付け、眞如に和合の義有るを僧寶と名付く、又別體三寶と云ふに二宗あり、一つには丈六の金身を佛寶と云ひ、四諦十二因緣生空の敎へを法寶と云ひ、四果緣覺を僧寶とす、二つには大乘に說く三身の如來は是れ佛寶也、二空の敎は是れ法寶なり、三賢十聖は是れ僧寶也、又末世住持三寶あり、木にきざみ繪にあらはす形像を佛寶とし、三藏文句を法寶となし、剃髮染衣同一理事を僧寶とす、去れば末世濁亂の時に至つて、佛弟子佛恩を忘れ、佛意をしらず、信仰なき時は、三寶の威光隱れて、萬民無明の闇に迷ふ、信心堅固にして、如來の敎を守る時は、三寶の

（四果緣覺）四果は聲聞所證の果位にして一に須陀洹果、二に斯陀含果、三に阿那含果、四に阿羅漢果これ也聲聞は佛の聲教を聞て悟り緣覺は十二因緣を觀して悟る者をいふ

（三身）法身、報身、應身これなり

（二空）我空法空なり

（三賢、十聖）三賢は一に十住、二に十行、三に十回向の諸位の菩薩をいふ、十聖は十地の諸菩薩なり十地とは一に歡喜地、二に離垢地、三に發光地、四に焰慧地、五に難勝地、六に現前地、七に遠行地、八に不動地、九に善慧地、十に法雲地、空とは五蘊皆空の法をいふ是れ聲聞緣覺の依る所の法也

光りあらはれて、國土明なり、萬事を抛て一心をはげますべし、去れば堂塔に參詣せんには、家を出るより、心をしづめて信心を發すべき心得あり、佛々祖々の出世なくは、末世の衆生悉く鬼畜にかはり有るべからず、まのあたり諸佛の出世にもれきたる事は、我等宿業拙き故なり、雖レ然今人間に生れ來て、佛敎を耳にふれ、尊形を繪像木像にあらはし、堂塔伽藍に安置せしむるを拜み奉る事忝なしと悅で、直に佛御在世の思をなして、身命を抛つて禮すべし、身命を抛つほどの信力なくんば功德有べからず、既に和光の跡をたれ、又佛閣を立て置るゝ事は、衆生濟度の方便也、結緣の利益ひなしからるべからず、然るに無道の我等是を知らず、佛陀神明をも敬はず、何により てか生死を離れんや、專ら三寶の加護を仰ぐべし、三寶を禮する時、信心を發すべき文句有りて、今此三界皆是我有其中衆生悉是吾子、此文を念得して佛恩を察すべし、末世の我等に至るまで、慈みを殘し給ふ事、かたじけなきにあらずや、釋尊御一人のみならず、何れの佛とて替り給はんや、總じて恩

五に難勝地、六に現前地、七に遠行地、八に不動地、九に善慧地、十に法雲地これなり（三藏文句）三藏とは經、律、論これなり此三各々一切の文理を含藏す故に藏といふ（和光）老子經に云く和二其光一同二其塵一云々と出たり

を知る心中に無量の得益有り、恩を知れば信心有り、信心則清淨の心也、信は是道の本功德の母と云へり、信なくして道を得る事あるべからず、道なくして心の安きこともあるべからず、無道の心より煩惱起つて、日夜に心をなやまし、身をせむる事限りなし、然るに佛道修行の人の中に、淺智の人は卽心是佛也、何れの佛をか敬はんと云ふ、如レ是の邪見多し、去れば卽心是佛の敎へは、いづくより傳來るや、唯是佛祖の敎へなり、然れども言語は尊し、敎たる人は徒らなりといはんや、爰に愚痴の遁世者有て云く、我は唯今道有る智識を尊ぶ也、木像は唯木也、繪像は筆の跡也、更に尊き所なしと云て、佛像を用ゐず、我見を專らとす、予彼遁世者に向つていはく、唯今道者を尊ぶは尤なり、去れど其知識遷化の後、或は木像に作り、或は位牌になして立て置かば、是れ皆な木なりとて放却すべき心なり、さて不義至極の人かなと云へばひしとつまりて心を飜しき、去れば佛像を輕んずる人の卽心卽佛の語を用るも僻事也、願くは言敎佛像隔てなく、一筋に生身の如來と念得して信心

を發し、身命を捨てゝ敬禮し、自己の功德を勤むべし、

守レ義可二修行一事

佛道修行する人は、專ら義を守るべし、義なくして修行成就すべからず、義は己れに在て萬事にわたれり、去れば出家は衆生濟度の願力を以て、出離解脫のために修行するは義なり、欲心を本として譽れを願ひ、知識の位を望み、寺を住持せん志を以て、修學するは不義也、生死の大事を守るは義なり、生死を忘れて世間に落するは不義也、坐禪工夫を專らとするは義也、懈怠不信なるは不義也、勇猛精進の心を以て修するは義なり、怯弱にして退屈を生ずるは不義なり、禁戒を守て威儀正しきは義なり、破恥無慚なるは不義なり、話頭公案を提撕して、大疑團を起すは義也、慮知分別の心を以て、解會に涉つて是とするは不義なり、經陀羅尼を誦して、佛に奉り萬靈を弔ふは義なり、佛を信せず亡魂を救はざるは不義也、身を忘れて人を惠むは義なり、身を思ひ人を忘るゝは不義なり、佛神に詣ても一事因緣を祈るは義也、名聞利養を

（一大事因緣）一とは一實相なり大とは其

性廣博なるが故に名く事とは佛の出世度生の儀式なる故に名けて事と爲す因とは衆生此實相を具して成佛の因なるが故に因と名け緣とは佛此實相を證し能く起て生を度するが故に緣と名く法華經に云く如來惟以テ一大事ノ因緣ヲ故ニ出ニ現スー於世ニ と蓋し佛の世に出現するは皆衆生の本具の一實相を開示して其れを悟入せしめんとするにあるのみ

祈るは不義也、幻化無常の理を守るは義なり、有相に着するは不義也、慚愧の心有て修行するは義也、無慚無愧なるは不義なり、人の命を扶けんために我が身を捨るは義なり、我身を扶けんことを思ひて、人を捨るは不義也、臨テ危ニ不レ變ヲ不ニルヵ動轉一は義也、心を變じて動轉するは不義なり、父母師長縱へ非義なりとも、敬ひ隨ふは義なり、我が理を立て恩に背くは不義也、此の外限りなしと云へども、此の旨を以て察すべし、

行脚ニ有ニ功德一事

諸方行脚をなす、嶮難の道を過ぎ、身心を責め業障を盡すの德あり、體羸れば諸念なし、色體安樂なる時は種々の念增長す、念により三界火宅の焰休む事なし、念滅すれば自己淸淨なり、淸淨なれば佛心に近し、去れば國々を廻り、山々を越え、淵々をつたひ、大河小河を渡り、心を淸め、靈佛靈社に參詣して、信心を發し、靈性淸淨の氣をうけて、自己淸淨となし、山水草木珍石に向ひても、彼れが淸淨の氣をうけて、自己を淸め、貴賤上下善惡の人に

觸れて、自己の非を改め、心をやはらげ、自他の差別なき理を知り、心を住むる處なく、萬境に着せずして、一生は唯浮世の旅なる事を觀して、樹下岩谷あばらやに臥して心を澄し、捨身の心を守りて、專ら淸淨の氣を移すべき修行也、眼を着けて行脚せば、氣の熟するに隨つて、信心堅固となりて、常住工夫をなすべし、如レ此相應せば、途中則ち禪定と成つて、一切善惡さはりなく、工夫の中に萬事をなして、間斷する事有るべからず、懈怠の心を以て、空く行脚をなす事なかれ、行脚は須らく行脚の眼を具すべしと云へり、

可レ守ニ一言一句一事

一言一句を聽て領會すれば、萬言萬句を知る也、大梅は卽心卽佛の一句を聞て、大休歇の田地に至り、六祖は應無所住而生其心の文を聞て契悟したまふなり、何れの言句にても、人々緣あるの語を以て、大疑團を起して守らんには、多言更に詮なし、無智の人、多智を羨む事有るべからず、傳へて聞き學て知るは、誠の智にあらず、元來自己に本智あり、唯自己の無明を明むべし、

（大梅ハ唐の大梅山の法常禪師なり初め大寂祖尙に參ず大寂問ふて如何か是佛と云く卽心是佛と師卽ち大悟す後又馬祖大師に參ず祖問ふて何か是佛と師亦卽心卽佛と答ふ）

、大寂に語て曰く馬師向テレ我ニ道フ即心即佛ニ我便チ向テ這裏ニ住ス（大休歇）正心論に一切貪嗔痴の結縛を放下するを小休歇と曰ひ一切佛法知見利生の念を放下するを大休歇と曰ふと見へたり

（六祖）は懷能大師なりたゞ出家せざる時貧しくして樵りして其母を養ふ一日新を負ふて市中に至り偶ま客の金剛經を讀むを聞き忽無所住而生其心の句に至りて契悟す

（理入行入）のことは及故集の本文にくわしく出たり

（十二頭陀）頭陀は梵語、抖擻と譯す煩惱を抖擻するの義なり、一に飧ニ叔靜處ニ、二に常乞食、三に次第乞食、四に一食、五に部量食、六に過中不飲漿、七に著弊衲衣、八に塚間坐、九に樹下坐、十に露地坐、十一に但坐不臥ニ、十二に隨ごれなり

（次第乞食）とは乞食の時次を論ぜず衆生を輕ぜず貧富を擇ばず常に平等一心にして次第に乞ふをいふ是れ頭陀行なり

（常乞食）とは諸の貪欲を離れて常に乞食を行し以て色身を資助し道業を助成す若し食を得ると貪欲等の念を起さず又食

文字言句は自己をくらます黑雲なり、心頭に一物を著けざるは佛心なり、願くは佛法世法一切を放下して、一句の本意に達すべし、是れ萬法の源也、此の本源に通徹する事は、信心堅固によるべし、佛々祖々の敎然かなり、縱へ文字言句達者なり共、情識を盡くす功德とも成るべからず、況や出離生死に於てをや、誠の心なくば、何にたる行業も皆な徒ら事なり、專ら信心堅固にして、一句を守る人、縱へ見性の旨なしとも、情識の妄想自然に消滅して、身心大安樂なるべし、達磨大師も理入行入の二つを立て給へり、行入何ぞ空かるべきや、若又一句の疑團破れて、心眼大に開くるに於ては、生死長夜の夢さめて、一物なき安養の淨土、極樂世界に至るべし、此の外何に事を學得せんや、信取せよ〳〵、

乞食有二得失一事

佛祖乞食を行じ給ふ事、十二頭陀の行力なり、次第乞食常乞食を用ゐたり、此行身心を責め、著相の念に離れ、衆生の慳貪を破り、無緣の者を利益し、一言の德を施し、功德を積で、淸淨無碍の心に至らんためなり、惡く心得て乞食せば、偏に餓鬼の業なるべし、然らば乞食の用心を能く知べし、明朝乞食に出でんと思ふには、宵より强く誓願を發すべし、明日は在々所々の戸々門々に立て緣を結すび、家々の亡靈を救ひ、慳貪邪見の者に功德をあたふべし、佛祖の恩を報せんこと、衆生濟度に如くはなし、衆生を濟度する事は、身命を法界に抛つの外は有るべからずと、思ひ定て、第一捨身の心を守るべし、第二慈悲の心を起すべし、第三如夢幻泡影の偈を守べし、此三正しからずして、衆生に功德を授くる事叶ひがたし、三界の萬靈三途八難の苦患に替るべしと願力をなし、寺を出るより心に相應の經呪を讀誦し、心を强く持ち、牙齒をかみ合ひ、眼をすゑ、坐禪の心地を能く用ゐ得て、慳貪慈悲の家隔てなく、貧家を愍れみ、一切衆生の苦患を思ひやり、高位下賤平等の心を以て、そろ〳〵と歩行して、順逆の緣結び得て、立寄る所の亡靈殘りなく、請取りたりと觀念し、めぐりおはりて歸るさには、淸水の邊りに立倚り、諸行無

を得ずとも嫌はせず得ずとも得とに於て心常に平等なるをいふ是れ頭陀行なり（如夢幻泡影の偈）金剛經の偈に云く一切有爲法如夢幻泡影如露亦如電應作如是觀とありなり

常是生滅法の理に住し、或は施餓鬼、或は經呪を讀誦し、心の及ぶほど用ふて、放下して歸るべし、家に歸ても油斷なく常に經陀羅尼を誦して萬靈を用ふべし、托鉢の偈に云く、財法二施功德無量、檀波羅密、具足圓滿、

學文有二得失一事

學文をする人に三種の義あり、一には佛經語錄を見る時は、文句に眼を著けて直に意を受る人有あり、縱ば三界無安猶如火宅の文を見る時は、我更に火宅を知らず、結句火宅を樂むなりと意得て、思ひ入て是を見、又如夢幻泡影の文に向ひては、如露亦如電に思ひ入て、是を見、文句毎に此の如く眼を著けて守る人有り、是は則ち書に向て坐禪工夫をなして、實有の念を責むる人なり、二には廣學多聞を好で、經文語錄に心をはなさず、沙汰の間をたのしみ、何れの經、如何なる錄に此の如くの理あり、此外別の事なし、我佛祖の意をしりたりと心得て、此の如く人にも授くるを本意とする人あり、此人は有爲の法をはなるゝ事かたし、三には智者の名をたてん事を本意として、數

多の聖教語錄を沙汰して、名聞に住し慢心を以て、無智の人をいやしめ、我は顏する人あり、此人のためには學文却てあだとなる、世人の憎をうけ、人のまじはりも疎にして、自然に身もつまり、世に立つ事も自由ならず、我一人を賤めは、聞傳る末々世にあまねくひろまりて、萬人我をいやしむる事、全くまぬがるべからず、學する所の知惠何のためぞや、佛祖の言教を見る事は我慢の幢を折り、自己の非をあらため、無我無人と成つて一切衆生を愍み、功德をあたにしめんためなり、殊に和合僧と云へり、六の和合なくば僧にあらず、一には身和合して共に住し、二には語和合して諍ふことなく、三には意和合して違ふことなく、四には戒和合して同修し、五には見和合して同解し、六には利和合して同均す、かほどの理をさへ知らずして、淺き事を鼻にかけ、專ら人我を發し、我は智ありと我慢をなす人を、智者とせんや、唯是れ佛祖のかたきなり、法を知るものは、恐ると云へり、世人に眼あり、慚愧の心なきは出家にあらず、愼ても猶愼びべし、佛祖の本意は唯離相離名なり、

可レ觀二無常一事

夫れ菩提心と云ふは、無常を觀ずる心也と云へり、釋尊因地の御修行、雪山童子たりし時、道を過ぎ給ふに谷の底にて諸行無常是生滅法と唱る聲あり、此文肝に銘じ尋ね入て見給へば、痩衰たる鬼神有り、今の文は汝唱へたるやと宣へば、鬼神然也と云ふ、童子宣はく、此の文の末有るべし、願くは聽聞せん、鬼神云く、嗟なる人の肉をあたゝ給はゞ唱ふべしと、童子宣はく、幸ひ我が持たる肉身をあたふべし、偈文を唱へよ、鬼神則ち生滅滅已寂滅爲樂と唱ふる也、童子峯に登り、路の邊りなる毘婆沙石に諸行無常是生滅法生滅滅已寂滅爲樂と書付け給ひて、諸行無常の文を埋な苔け、是生滅法の文を洗ふな水、末世の衆生成佛の緣となるべしと誓つて、谷に下り彼の鬼神に向て、高き所より身をなげ給へば、忽ち口中より赤白の蓮華生じ、童子を擎げ上げ奉る、是は眞の鬼神にあらず、天帝釋の化現なり、童子の修行有難し、必ず一切衆生を濟度し給ふべしとて、うせ給ふ也、諸行無常の眞理言に宣る事わ

たはず、既に雪山童子の命にかゝて末世に殘し給ふなれば、疎なるべきにあらず、雪山童子衆生濟度の御志、心肝に銘ぜざるべきや、此の四句の文を聞て、隨喜の涙なからんは、疎なる心なり、佛道修行の人は、偏に諸行無常を觀ずべし、光陰更にとゞまらず、時人を待つ事なし、四時の遷變、飛花落葉の色、目の前に分明なり、時々に生死の到來する事を知るべし、念々無常也年月の移る事山水の流るゝに異ならず、此身は水の泡にあらずや、心をとゞむべき事なし、朝に紅顏有るも夕べには白骨となる、昨日見し人今日はなし、南隣に哭し北里に悲みて、人を送るの泪盡きず、山下に添ひ原上に添ふて、骨を埋ひの土乾く時なく、北邙の煙立ちやむ際なし、親におくれ子を失ひ、夫を先に立て妻に離れ、二度逢ふ事なくして、愁嘆の泪に咽び魂を斷つ有樣、見るに心の痛まざらんや、有情と云ひ非情と云ひ、唯是れ無常の鏡也、誠に有爲の轉變眼に遮ぎると雖ども、迷倒の我等是を見ず、奪精の猛鬼責め來るを（奪精の猛鬼）とは死のことなり

も辨へず、齡既に衰へて起居苦しく、死期既に近しと雖ども、常住の念休む

時なく、偏に世路を思ふ念強くして、三途の業日々に増長せり、懲くべし恐るべし、ながらへはつべき身にあらず、日數をかぞへて限りあり、電光朝露よとならず、忽ち死期に至るべし、俄に悔ゆ共甲斐有るべからず、其時安樂の思ひあらんや、萬事は皆非なり、偏に諸行無常を悟るべし、

以二願力一可二修行一事

夫れ迷倒の衆生苦海に落ち入て、生死に流涙する事車のめぐるが如し、諸佛諸祖出世有て、是を愍れみ、大慈大悲の心を以て、直に成佛の道を施し給ふと雖ども、三界輪廻の我等更に信力なくして、是をしらず、たまゝ佛道修行に赴くといへ共、著相の念盡きずして、空しく有漏の癡福をなして、出離の縁となす事なし、動もすれば意馬妄想の叢に入て、歸るべき路を忘れ、心猿名利の梢に移りて離るゝ事なし、依レ茲無上菩提を餘所に見て、出離解脫の願力なく、利益慈悲をも思はず、冥の照覽をも恐れず、解脫の大法をも渡世の業となし、有相執著の念に住し、我は佛弟子なりと思へり、自己の德益

（有漏の癡福）漏は生死に漏落するの義なり有は因果亡せざるを有と曰ふとあり衆生見思の煩惱に因つて生死を出離する能はず之を有漏と名く生死を出離せざる善業は癡福なり

なきのみならず、剩へ萬人の心に違つて、却て嘲を受け、他人を引て惡道に入るべき事、兼て知らずば有るべからず、出家の二字を穢す事無慚無愧の至なり、一筋に無始輪廻の業をまぬがれんと思ひ定めて、大誓願を發し、菩提の心を祈るべし、生死を出離する事は、唯願力によるべし、増賀聖と云ひし人は、幼少より道心深くして、天台山の根本中堂の藥師に千夜通夜して道心を祈り、其の後ち伊勢大神宮に詣で祈給ふに、神明夢中の詫宣に、道心を發さんとならば、身を身と思ふ事なかれとなり、是を聞て先づ名利を捨つべしとて、衣裝脫捨て、乞食共にくれて、赤裸にて所々乞食して、四日と云に山に登り、慈惠僧正の室に入り給ふに、狂人なりと言ひあへり、師匠の僧正のいさめをも聞給はず、走り出で、大和國多武の峯に籠居して、一生をおくり給ふとなり、佛道修行せん人は、増賀の心を學て、佛神に詣ても出の離道を祈らんには、なぞか感應なかるべき、不信懈怠の輩何によりてか成佛せんや、專ら願力強くして、志をすゝめて眞實を發し、義を正しく守るべし、先づ志と

云は菩提を催す本也、眞實と云は菩提心の決定なり、義と云は煩惱を截斷するの劔也、此の三つは鼎の三足の如く、一つもかげては道を成就する事かたし、譬へば菓の花ささて後實となり、熟して味あり、藥ともなり、毒ともなる、初中後三つの相應然かも、佛道修行する人も、三つの相應なくして、出離する事叶ひ難し、志有て眞實うすき人も有り、眞實有て義のよはき人もあり、故に成佛の人稀れなり、去れば志は菩提の花なり、眞實は菩提の實なり、義は菩提の味なり、熟する時は萬病を治する大藥なり、總して志眞實と云は萬事に渡れり、藝能稽古の上にも、志眞實なくしてかなはず、君臣父子夫婦兄弟朋友の交りにも、志し眞實なきは人倫にあらず、然りと雖ども義なくして正理を行ずる事かたし、それ愚闇の凡夫は愚痴迷妄に眞實強くして、少しの事に恨みふかく、理もなき事に嗔をなし、更に正理を辨へず、妄惡の心に引れて冥きより冥きに入て、胸をやき、一念亂れて狂人となり、或は自害をし、或は窓靈鬼神となり、或は大蛇となるまで念力強し、其の外さま〳〵惡

念をあらはすなり、又た惡人は惡行に眞實有て、人をそこなひ身を破り、萬人のあだとなりて、專ら苦患を以て、大地獄を作り堅めて、永き住家となす、皆是好む所の眞實の業力、目前に在り、如此愚癡につき十が一も菩提にすゝむ眞實あらば、何れの人か佛果に至らざらめや、去れば道を修せん人は先づ邪正を知るべし、隨分眞實有て修行する人も、或は惡を捨て善を取り、或は凡夫を嫌て佛を求め、或は極樂淨土快樂に著し、或は經文經說を專とし、或は奇特神變を尊び、終に有漏心盡さずして、空しく輪廻の業をなして、是を成佛道也と思へり、然る間夢幻泡影の文においては、聞くとも信せず、思ひよらず、縱へ信ずると云へ共、更に有所得の念離れず、兎にも角にも有相執著の念强さは、唯是れ凡夫の妄心也、如此の理に眼をつけて、一切苦樂順逆榮辱名利總て、夢中の妄想なりと知て、自己の本源に向て大疑團を起すべし、眞の道心と云は、志と眞實と義と融通して、勇猛精進の心となりて、切なる心、急なる心起て、夢中共に一大事と云は心に備はる大事也、疎なる

（夢幻泡影の文）は金剛經の四句の偈文なり前に出たり

（有所得の念）は卽ち有相執著の念にして諸法皆空に達せざるものなり

（全身脱去）其終る所を知らざるをいふ
（坐脱立亡）坐脱は坐のまゝ死するをいひ立亡は立ちたるまゝ死するをいふ

心にて知るべきに非ず、一大事を思ふ人は、晝夜の差別なく工夫の中に萬事をなして、勇猛の心無るべからず、若し夢中に間斷ある人は、疎なる故と知るべし、曉の三時は一入すゝむ時節なり、未だ此の心起らずして、夜は眠に沈み、晝は萬事にうばはるゝ人、何を以てか佛果に到るべきや、古德に全身脱去の人あり、坐脱立亡の人あり、唯是れ信力行力のなす所ろなるべし、今の人とて替有るには有るべからず、偏に信力よはきの替なるべし、眞の修行をせん人は、一筋に勇猛の心を用て、直に出離生死の願力を強く發し、萬事を放下して、解脱の道にすゝむべし、

可レ守二捨身一事

法性城中に自己の寃敵競ひ起て、既に國を傾けんとす、何れの所より來る寃敵ぞや、明かに知るべし、身を思ふ一念也、此念より起つて、三惡四趣となり、分れて八萬四千の煩惱となる、皆是れ自己の寃敵なり、此の心を除滅せん事捨身を守るにしくばなし、身に添ふ敵防ぎがたし、大事の敵を滅すべき事、

心よはくしては叶ふべからず、信力堅固を大將軍と定めて、捨身の軍兵を先として、勇猛精進の武士を頭と定め、幻化無常の劔を用て、自己の本源に向て十二時中切に急に責め入るべし、動もすれば色身則ち煩惱の城郭となり、此心は惡業無明の主人となりて、己を滅すなり、我等が敵は此心なり、此身は煩惱の袋なり、彼に隨ふ時は惡道に入り、彼をしたがふる時は、安樂世界に入る、偏に此の身心を愛すべからず、古人云く自己を見る事寃家のごとしと、去れば此臭肉を愛せんには出離する事有るべからず、智者は獄中の囚人の如しと云へり、未だ此意を得ざらん人は、唯能く捨身を守て、齒をくひ合せ、眼をすゑて、直に頸をきらるゝ心を用て、生死を急に守るべし、或は屍と成りて、棺の中に入て、上の薪の火にもゆる心を用ゆべし、或は大火中に飛入て、火中の心を守るべし、或は千騎萬騎の敵の中へかけ入て、大將の頭を取るべき心を用ゆべし、捨身堅固ならずして、出離の道を修する事全く叶ふべからず、怯弱の心中より寃敵來る、嗔恚は地獄の寃敵、貪欲は餓鬼の寃敵、

愚痴は畜生の寃敵、人我は修羅の寃敵なり、愛念執着は苦海の寃敵、喜悦の心は輪廻の寃敵なり、總じて一切の念皆是れ自己の寃敵にして、自己より自己を責むるの敵なりと云へども、捨身の心堅固にして、自己を守る時は、自己に對する敵なし、縱へ一念起ると云へども、刹那に消滅す、去れば念の起るは病、續かざるは藥也と云へり、此の起滅の心に向て、切に急に本源に責め入るべし、箇の心は何に物ぞ、味方となり敵となる、汝は是れ何誰ぞ、箇の心の本源是れ什麼物ぞ、責むるは又何物ぞと、大疑心大勇猛心を以て、命を限りに責め入るべし、信力强盛せるに隨つて、情識の寃敵自然に滅して、內外打成一片ならば、忽然として大休大歇の寶藏開けて、煩惱は則ち菩提の眷屬と成りて、心王歡喜の殿に居住して、我國安全なるべし、是れ偏に捨身成就の功德なり、

（刹那）俱舍論に時之極少者名二刹那一とあり

（內外打成一片）とは身心一如となること

不レ可レ忘二自己一事

如二猫ノ捉一レ鼠頭尾一般にして、雙目眸かず、自己を正しく守るべし、心他に

移る時は、煩惱の賊競ひ起て、自己の主人となる、彼れに司どられて後は、彼を亡す事難し、去れは常に六根門を堅く守て、煩惱の賊を防くへし、佛道修行の簡要は、自己を守る所にあり、十二時中において、刹那も間斷すべからす、夢中共に守る心なくては全く叶ふべからず、本來自己の主人、六賊煩惱に犯されて威光を失ふなり、貪嗔癡の三毒の念を始めて、一切の煩惱自己に發り來る時、彼に隨ては身命も捨て安し、彼にひかれて惡道に入る事は、更に苦とも知らず、暗きより猶闇に入るべき事を思ふ、偏に是れ自己を忘れたるの誤りなり、自己を離れて道なし、專ら自己に眼を著けて、本源を知るべし、佛界魔界是非善惡萬法總て自己にあり、心外に法なし、自己を愛樂する時は妄心迷亂す、自己を殺得する時は此心無事なり、心は唯心をまぞはす敵なり、心に心ゆるすべからす、古人云く煩惱は心によるが故に有也、無心ならは煩惱何ぞかゝはらんと、去れは心生するを凡夫とし、心滅するを道者とす、達磨云く迷時ハ人逐レ法ヲ、解時法逐レ人ヲ、解ル時ハ識攝レ色ヲ、迷フ時ハ色攝レ識ヲ、但有

（六根）は眼根、耳根、鼻根、舌根、身根、意根これなり根とは能生の義にて六識を生ずる根本なるが故に根といふ

（六賊）楞嚴義疏に云く眼耳鼻舌及與二身心一六爲二賊ノ媒一自刼家寶ニ云ヘリ

（怨憎會苦）は常に怨惡せる人と反て集會するを云ふ（求不得苦）世間の事物求む所多くは得る能はざるをいふ（愛別離苦）親愛する人と反て別離して共に居する能はざるをいふ（五陰盛苦）五陰は色受想行識なり陰は蓋覆の義にて此五陰眞性を蓋覆して顯發せざらしむるをいふ盛とは此五陰の身生老病死等の衆苦

心ニ分別計較自心現量スル者ノ悉皆夢也と、然るに迷の我等、夢を夢とも知らず、顚倒の心に住して此心をくらまし、無常を忘て常住となし、苦をとめて樂となし無我の我を實と定め、不淨を以て淸淨となす、自己不淨をしらんとならは、野邊の屍を見るべし、臭肉に何の樂みか有るや、專ら苦惱計り也、生、老、病、死、怨憎會苦、求不得苦、愛別離苦、五陰盛苦、是身に著きたる八苦なり、又十惡有り、殺生偷盜邪婬、身につきて三つの科也、妄語綺語惡口兩舌口につきて四つの科也、貪欲瞋恚愚癡は意につきて三つの科也、此十惡一つとして遍るゝ所なく、身心苦痛云ふ計りなし、殊に四百四病內外より責を受る苦患かぎりあるべからず、又煩惱は八萬四千と云へり、此念日夜責め來て、身心を苦むる事際なし、是皆身より出てたる苦惱なり、此理を辨へず、偏に此の身を愛樂して、苦海に浮沈する事は、唯自己を忘て迷妄せる故なり、然る間上四恩を報すべき願力なく、況や下三有を濟度すべき心あらんや、惡業の爲めには强て進むといへども、善根菩提に曾て進まず、專ら自己の分上を忘

聚まる故に五陰盛苦と名く（四恩）一に國王恩、二に父母恩、三に師友恩、四に檀越恩、これなり

れて、狂人に異ならず、去れは年の積るをも知らず、行道のつたなきをも知らず、家職を勤むべき事をも知らず、命の限りあるをも知らず、病のをかすをも知らず、無事の事を好むをも知らず、一切の恩をも知らず、物の愍みをも知らず、徒らに光陰を過す事をも知らず、心に僞りの有るをも知らず、へつらひの心有るをも知らず、惡心の有るをも知らず、義理にそむくをも知らず、總て自己の僻を知らざれは、まして余所のそしりを辨へずして、みたりに他の是非を說き、煩惱の心に住して、貪欲甚し、佛佛祖祖是を憐み給ひて、諸教を施し給ふといへども、暗暗として眞理を見ず、更に自己の得益なし、此理を慚愧せん人は、一言一句の中に一切の功德有る事を信して、句中の意に疑著して、一句を守るへし、古佛の偈に云く、身從二無相中一受生、猶如二幻出諸形像一幻人心識本來無、罪福皆空無二所住一、如二此の趣文句の理を見るといへども、幻人心識本來無なる事を知るべからず、專ら自己の迷暗を忘れて、餘所をさたして空く日

を過すのみなり、去ば口に無常を說くといへども、其心は常住なり、全く無常を知る人なし、總て言句の意、自己に通徹せざる事を知て、言句に疑著して守るを自己を忘れぬ人と云也、佛祖の言句慮知分別を以て會得して、是を正理とする人は、猥に慢心起て必ず魔道に入るべし、古來より大善知識と名を得たる人の中に、魔道に入たる證據世に多く語りならはせり、唯是れ自己を忘れて、心外に法を見たる科故なり、去れは己に眼を著くべし、己を守て本源を悟るべし、刹那も懈怠する事なかれ、古人云く學道須二鐵漢一着二手心頭一便判、直趣二無上菩提一一切是非莫レ管、是れ自己を守るの簡要也、

有二修行多途一可レ知二邪正一事

夫れ修行の趣き多途あり、先づ無智にしては佛意知り難しとて、廣學多聞を好みて、語錄聖敎に眼を曝す人有り、或は樹下山林を好み、孤峯幽谷を栖家として、明月淸風に心を澄し、浮雲流水を友とする人あり、或は禁戒を守て、慈悲正直無欲淸淨柔和忍辱を旨として、佛行正しく、少惡をも恐るゝ人あり、

或は他力本願を旨として、念佛を用る人有り、或は觀念觀法を用る人有り、或は坐禪工夫を用て、初學の輩に至るまで、一向に禪定を與る人有り、或は祖師の活法にはこり、向上の言句を用て、在家の男女に至るまで、見性成佛を授る人有り、其外品々多途ありといへども、佛祖の本意に相應して、有爲の法を去て、無上菩提に至るべき願力を以て、修行する人稀なり、誠の道心と云ふは、初學より三界出離を强く守て、離相離名に住し、有相執著の念根を截斷して、虛空同體となる修行者を可なりとす、此外何たる殊勝をあらはすとも、皆以て虛妄なるべし、古人云く、發心不レ正萬行空施といへり、然る間だ大力量を具する古人も難行難解と云々、然るに近年邪解を用る人あり て、道俗男女に至るまで、悟りを安く授けて、人をそこなふ類あり、縱へ少見解ありと雖ども、著相の念盡すことかたし、況や自己の修行もなき人の我心を本として、さまゝ計りて、さもなき事を悟りと定むる事大罪至極せり、大休歇と云ふは各別の事なるべし、古人休去歇去に就て七去の修行を立て、

或は牧牛の圖をなして、十段の修行を立ておかれたり、何れも古德の修行疎なる事なし、心をとめて語錄を見るべし、今の人及ぶ事に有るべからず、生死を截斷する事やすかるべきにあらず、三界の獨尊釋迦牟尼如來、難行苦行十二年の功を以て、臘月八日に見明星悟道あり、二祖、達磨に心を將ち來れと責られて、雪夜に立て左のひぢを切り給ふ、又五祖會中七百人の見解を尋ね給ふにも、盧行者一人のみ其旨を得給へり、若しやすく悟る事あらば、五祖方便なくして大衆を空しくし給ふといはんや、其時の學者皆以て矇昧なる故といはんや、七百人中今時の人にをとるべきや、又南岳、六祖に參じ給ふに、什麼物か恁麼に來ると云はれて、ひしとつまりて、八年を經ても契はず、十六年を經て印可を得給ふ事も愚鈍なりといはんや、其外聞聲悟道、見色明心、一言下の大悟人有りと云へども、古人の修行今の人に比ぶべからず、古人得法のきらい道に云く、有心を以て求ひべからず、無心を以て得べからず、語言を以て造るべからず、寂默を以て通ずべからずと、無門云く、將三百六

（二祖）初祖達磨大師嵩山に在し時二祖慧可大師來り見ゆ初祖願みず時に天の大雪二祖雪中に會ふに立て積雪膝を過くるに至るも厭はず道を求むること切にして遂に利刀を取て自ら左臂を斷つに至る而して初祖に安心を問ふ初祖云く將レ心來レ汝ガ與レ汝ガ安心云々

（五祖）は黃梅の弘忍大師なり一日諸の門人を喚て曰く汝等各々一偈を作り來て吾に呈して看せしめよ若し大意を悟る者は衣法を付して第六代の祖と爲さん云々と而して慧能大師に參せしとき六祖問て曰く什麼の處より來る師曰く嵩山より來る六祖曰く恁麼に來る師曰く說似一物即不中と云々（無門云）禪宗無門關に出たり趙子狗子の話の評唱なり

（南嶽）は懷讓禪師なり六祖慧能大師に參せしとき六祖問て曰く什麼の處より來る師曰く嵩山より來る六祖曰く什麼物か恁麼に來る師曰く說似一物即不中と云々（無門云）禪宗無門關に出たり趙子狗子の話の評唱なり

（三百六十骨節八萬四千毛竅）は通身全體といふまでの義なり

十骨節八萬四千毫竅ニ通身起ニ箇疑團一、參ニ箇無字一、晝夜提撕、莫レ作ニ虛無會一、莫レ作ニ有無會一、如ニ呑ニ了箇熱鐵丸一相似、吐又吐不レ出、蕩ニ盡從前惡智惡覺一、久々純熟、自然內外打成一片、如ニ啞子得ニ夢、只許ニ自知一、驀然打發、驚レ天動レ地、如下奪ニ得關將軍太刀一入上手、逢レ佛殺レ佛、逢レ祖殺レ祖、於ニ生死岸頭一得ニ大自在一、向ニ六道四生中一遊戲三昧、且作麼生提撕、盡ニ平生氣力一擧箇無字一、造不ニ問斷一、好似ニ法燭一點便着一、古人の敎然か也、今時何れの人か生死岸頭に大自在を得、六道四生遊戲三昧なるべき、如レ此の理を餘所に見る事愚癡の至にあらずや、今時悟りを授くる人、專ら人我の心强く、名聞利養に住して、我は悟りたると云へり、古人綿密の修行を以て、末世の敎へを殘し置き給ふ、其の品限りなし、又禪箴に云く、

循レ規守レ矩ヲ無繩自縛　縱橫無碍ナルハ外道魔軍　存心澄寂ナルハ默照邪禪
恣意忘緣ハ墮ニ落ス沉坑一　惺々不昧ハ帶鏁擔枷　思善思惡ハ地獄天堂
佛見法見ハ二鐵圍山　念起ハ卽覺弄スル精魂一漢　兀然習定ハ鬼家ノ活計

（箇無）僧、趙州に問ふ狗子に還て佛性あり や也た無き や趙州云く無と即ち此の無なり

（虚無）無云々）此の趙州の無字は虚無の無か有無なと或は無字とは其義全く別なり

（如二匽子得レ夢）打成一片地の心に至て此の無字の話頭を發明せば匽子の夢を見たる如く其理を人に語るを得ず只自知すべきのみ

（關將軍）は蜀の關羽なり

（逢レ佛殺レ佛云々）已に佛祖を殺す況んや魔外をや

（四生）卵生、胎生、湿生、化生これなり

（遊戯三昧）三昧は梵語、譯して正定とも又は正受とも云ふ生死流涙に在て心を亂さぬと云ふ義なり大悟の人は地獄も極樂も縱ひ地獄に入も圍囲に遊戯すると同し心持なり

進則迷レ理退則乖レ宗　不レ進不レ退有氣レ死人　且道、如何ヵ履踐

努力ヲ須三了二却今生一　莫レ教三永劫受二餘殃一

如レ此の理を信せずして、淺智の人我心を是となし、專ら邪見に落ちて、人をそこなふ事天罰まぬかるべからず、或長者悟りたりとて、豁達自在をはたらき、氣遣ひて、あらぬざまして自害したり、或長老江湖を着け、多衆を集め、高慢して氣遣ひ鼻長くなり狂ひけるを、衆僧七日七夜經をよみ責めけるに、山々の天狗名乘て退く、然れどもいまだ本氣ならず、大衆般若經にて責ければ、我は明義法印也、般若經能く知たり、少しも用べからずとて、大衆を罵る事すさまじかりけるに、衆中よりさては般若の體を云へといはれて、ひしとつまりて返答なし、大衆彌々責て、般若の體を云へ〳〵と云て、四方より經にて頭を打ち責ければ、頭はれて則ち本氣せり、或僧志深く眞實ありけるに、邪師法を免しければ、其れより氣遣ひて心に責られ、西國へ行て自害したり、或は悟たりとて、本尊經位牌を取捨て狂ひ、或は悟たりとて、向上になりて

人を賤め、或は悟たりとて耻を知ぬを本意とし、或は悟りたりとて山居などして、異風を用ゐ、樣々人を迷す類多し、又女人邪法を得て、心に責られ、兩年狂ひ終に死せり、或女人邪法を得て、赤裸に成て門外まで走り出でたり、或女人金襴の掛落（くはらく）をさげがみの上にかけて寺參しけるが、後は狂ひ死けり、或士邪法を得て腹切たるも二人あり、或士悟りたりとて、向上なるを傍輩是を尊びて、親く友なひけるに、不圖氣遣ひて、彼傍輩を一たち切てにげにき、狂ひてより本氣せず、或士邪法を得て、心に責られ、衰へ果て終に死したるもあり、此外悟たりとて氣遣て狂ふを、やう〳〵して本氣になす類ひ限りなし、皆是れ今の人々なれば其名をしるさず、然れば一大事を修せん人は、專ら邪正を知るべし、法のため惡しき人多しと云へども、取分七つ有り、一には酒を好む人、二つには世間を是非する人、三には悟をやすく授る人、四には豁達を用ゐて勤行疎なる人、五には我慢の心有る人、六には名聞のつよき人、七には欲ふかき人、此外心をつけて惡しき友に遠ざかるべし、假にも生

死の大事を說き幻化無常を談ずる人に親近すべし、麻の中の蓬鏡なるべし、

可レ離二實有見一事

一切有爲法、如夢幻泡影、如露亦如電、應作如是觀、此身は幻化無常也、四大本空也、何くより來り何くに去るや、只夢中の戲也、去れば夢中に人民居所金銀財寶樣々有りと見れども、夢醒れば一つもなし、世の中に無量の事共ありと見れども、形有る物は皆な滅す、家財珍寶實體なし、榮耀名利總て虛妄也、古佛の偈に云く、起二諸善法一本是幻、造二諸惡業一亦是幻、身如二聚沫一心如レ風、幻二出無根無實性一、然るに着相の我等、自己の虛幻なるを辨へず、無明の睡深くして、夢の中に夢をなし、諸の念休む時なし、何によりてか生死を出離せんや、迷と悟のかはりは、夢の醒るとさめざると也、夢中の心に三界あり、三界無安猶如火宅と說き給也、速かに火宅を出づべし、火宅を出る敎多しといへども、莫妄想の一句を見るべし、佛と云も妄想、法と云も妄想、善と云も妄想、惡と云も妄想也、去れば一切妄想なりと見るも又妄

想也、唯一切に離れて此一句を透得せば、無明深夜の夢醒めて、明明了了として本源を知るべし、直に相應なき人は、唯能く幻化の理に眼を著けて、一切時中間斷なく色卽是空と守るべし、

吊二亡者一有二得失一事

亡者を吊ふに經陀羅尼を誦し、佛行を修して亡者の功德とす、佛語の中の眞理、佛行の功德先自己に移り來つて、眞實の心發り、則ち自己淸淨となる、淸淨極る時は無心無念となる、此心虛空に普くして不通の處なかるべし、然れば亡者を吊ふには先つ自己淸淨にして無念の得益有り、却て亡者に吊はるゝにあらずや、然るに亡者を吊ふ時は、經陀羅尼を誦じ、佛行をなし、苦勞をして、施主の功德として、我か得益にあらずと思て、布施の輕重を計りて自心を穢がす事、大罪至極せり、大切の功德を行して、剩へ惡道の因となす事僻なりと知るべし、幼少より佛弟子となつて、身心をいましめ修行する事、欲心のためなるべからず、出離解脫の誓願也、此理を忘れて佛事孝養をなす

時、亡魂を救ひ自己を修すべき心はなくして、先つ布施を思ふ事無慚無愧の至りなり、此心によりて修行す共永く餓鬼の苦を免るべからず、去れば他を吊ふは、必ず自己の得益なる事を慥に知て、親疎の隔てなく、布施の高下を思ふべからず、佛意を學ぶ佛弟子何ぞ利欲に墮在せんや、出界出離の修行者なり、正理に背て邪路に入るべからず、一筋に出家の二字を守て、出離の行業をなすべし、

非人に施す物事

非人に物を施すに就て、大事の施物佛物を惡業の非人に施す事は、彼に業を重て苦をあたふるなりと云ふ人あり、是大なる僻なり、出家は一切衆生を度するを以て本意とす、然らば彼業人をば何たる方便を以て救ふべきや、佛語祖語をあたふるとも、惡業の非人是を受くべからず、唯慈悲心を以て食をあたへ、物をくれて喜はしめは、此慈悲有難しと必ず善心を起すべし、たひ〳〵彼れに善心を起さしむる事功德にあらざらんや、如〻此慈悲方便を以て

彼か心をやはらげ、機に隨て教化せば、自然に教に隨ふべし、慳貪心を以て彼に向はゝ、非人の心中彌々惡業起るべし、一切の人に惡心を授く事我科にあらざらんや、既に佛弟子と成て佛意を學ぶ輩無悲の心有るべからず、一切衆生を見て憐む心なくは佛弟子にあらず、衆生濟度の願力强くして、慈悲を專らとすべし、縱へ在家の男女たりとも、慈悲の心なからんは人倫にあらず、

一寺主可離欲心事

一寺の主たる人、我が家と思ふべからず、寺舍は唯佛菩薩の家なり、家財雜具等に至るまで更らに我が物にあらず、此身元來地水火風の借物なり、既に三界を出るを以て出家と名を得たり、何をか我が物となすべきと觀察すべし、若し施物來らんには、則ち本尊の物となして預り置くべし、全く心に受る事有るべからず、是は亡者一生の中執著して造り置たる惡業煩惱の形ちなり、欲心を堅めて持ち來るなりと深く思ひ恐て、一紙半錢疎にせすして、佛物に使ひ、衆僧をはぐくみ、寺舍建立のためとなし、非人等に施すべし、全く我

（三輪清淨）輪は車輪にして擺碾の義に採る施者受者施物の三清淨なれば能く欲心を擺碾するに譬ふ

か物となすべからず、いとゝ不淨穢惡の身心に、信施の物を取り入て、衣服食物と樂む心あらば、瘦せたる馬に重荷を著けたるが如くにして、劍樹刀山如何がこすべきや、然れば亡者の利益ともならずして、却て地獄の業と成るべし、依」茲三輪清淨をしめさるゝ施者清淨、受者清淨、施物清淨の理を學ぶべし、異國にも本朝にも、施受の義に就て種種の過失多し、まのあたり或寺施物充滿せり、住持名僧なりとて、學徒尊敬限なりし、雖」然死期苦患强くして、火の病をうけ、身赤くなりて大熱せり、大桶に水を入れ替〳〵ひやしけり、或長老火の病をうけて苦痛して、死ては息をふきかへし〳〵、十二三日して死去す、此たぐひ世に多し、或長老夜半にさけぶ聲大なり、衆僧室に走り入り、是を起して子細を尋ぬるに、閻魔王より二人の使來りて責たると云ふ、七箇日も過ぎざるに、檀那死して吊ひに行く、馬上にてあつと一聲云ふて、其まゝすくみて本性なし、三日言ず、惣身あか〳〵成り大熱して死去せり、或長老死期苦痛强して、舌三寸ばかぬけ出てたるも二人有り、或長老名僧と

沙汰せり、老後は氣違て死期畜生の如くなり、或長老病苦强くして、伏してより身をうごかす事能はず數日經たり、左を下にするに左の脇に毒腫出來、右を下になすに右の脇に毒腫出來、又せなかを下にすればせなかに毒腫出來て、惣身くさり臭くしてよりつくへき樣なし、死期には猪來りて責めけり、三箇月を經て死せり、此のたぐひ世に多し、或長老檀那を誹ひ、死人を奪ひ取り、沙汰の限りなる有樣なりしに、次の年氣違て狂ひけり、籠舍させ置くに、糞を食し人に打ちつけ、大音聲にてさけび、三箇年を經て死せり、或長老信施多くして亡靈を吊ふ事は疎なるに、俄に野山を走り廻り、大地より劔茂く生出で、足をつらぬきふぢべき所なしとて、一足飛しておそろし〳〵と云て狂ひ死けり、惣して獨庵の僧に至るまで病苦おろかにして死するは少し、恐るべし〳〵、財寶貯へ置て死後まで耻を曝す類ひ僧俗に就て其數多し、殊に出家として利欲を思ふは大罪也、三界出離を旨とすべし、三界を出てゝ一の家あり、知るべし〳〵、以二大圓覺一爲二我伽藍一身心安二居平等性智一、

檀那對談の事

檀越、寺に參詣せば、住持思ふべき樣は、惣して諸檀那は沙門に歸依して、成佛すべき爲也、此人々を救ひ得すは、出家の科なりと深く心に置べきなり、然し我に衆生濟度の德ありやとかへり見て慚愧すべし、凡そ先つ檀越に信心を發さしむ事第一なり、信心を發さしむる方便は、常に勤行正しく、亡者萬靈を能く吊ひ、佛前を淸淨にして、燒香間斷なく、塔廟を掃地し、庭の塵を掃て人の心を淸むべし、住持の心淸淨に用ゐ、或は生者必滅の理を說き、或は無常幻化の理を云ひ、或は十惡萬邪の理を說き、或は臭肉不淨を談じ、或は顚倒迷妄せる理を說き、或は上四恩を敎へ、或は三惡四趣の苦患を說き、其外機に隨て佛語祖語を與へ、專ら著相の念を奪ふべし、假にも渡世の沙汰、榮耀名利を云ふべからす、若し貪りの心を以て檀那を馳走し、剩へ在家へ物をやり、諂ひの心にて寺の資緣を得、寺を造りかざりて、身のためとせば、師檀共に地獄に入べし、永劫の苦患豈思ひ知らざらんや、恐るべし〳〵、一

生は唯一睡の夢也、

菟草分 終

快馬鞭

解題

本書は東嶺和尚の開示せられたる法語也師は近江の人、享保六年を以て生る初め大光寺の古月禪師に參して省あり後ち鵠林和尚に見えて侍者となる數年にして盡く室内の事を參得す辛參苦修の餘遂に重疾を致す百藥効なし自ら謂へらく我既に宗趣を究むと雖も若し一旦死し去らば何ぞ法門を益するを得んと因て無盡燈論一編を著し以て鵠林に呈して曰く此中若し採る可きあらば請ふ以て後に貽さん若し杜撰にして採る可きなくんば速に火中に投せよと鵠林一見して便ち云く是以て後世の點眼藥と作すべしと師遂に鵠林を辭して京都に往き唯病を養ふて生も得死も得任運自在にして時日を消す一日無心中より鵠林平生の受用底を徹見す是より病亦隨て輕快なるを得て歡喜に堪へず書を馳せて鵠林に報せしに林之を見て大に喜び即ち裁答して曰く必ず速に歸來せよと師因て直に束裝し歸て鵠林に隨ふ林法衣を出し師に付して曰く此金襴衣

は我れ曾て之を服して四たび碧巖錄を講せり今以て汝に傳ふ宜しく後世斷絶せしむること莫れと師之を頂受す是より師資商論、宗旨を建立し五位十重禁等微細の要旨に造詣究盡せり故を以て當時鵠林衆中「微細東嶺」「大器遂翁」の稱ありき鵠林既に老て氣力漸く衰ふるや師代て學者を鉗鎚し俊衲英髦の其門より出でし者頗る盛んなりき蓋し師が如きは近代希に見る所の禪傑にして鵠林が金襴衣を以て特り師に付したるもの抑も所以ある也

本書は師が初心の學者の爲めに大道の祕訣及び其平生用心の要義を示し間亦信不及者の陋見を破して之を啓廸せられたるものなり若し本書を以て快馬の一鞭と爲し道に進んで休せずんば天下の人を踏殺するが如きも亦豈難しとせんや

編　者　識

快馬鞭序

夫レ諸佛ノ眞源ハ、衆生ノ本有也、雖レ然ト因フ背ク覺ニ自隔ツ、緣テ合スルニ塵ニ遂ニ失ス矣、於レ是三光師老、特ニ悲ミ憫ミ爲メニ誘ヒ引センル頑嚚之徒ヲ、述フ法語數篇、幷道歌廿一首ヲ、可レ謂ツ夜途ノ玉炬ナリト也、讀テ之則チ從リ麁及ヒ細ニ、自リ淺至ラ深、親ク嚴ニ此道進趣之軌ナ焉、若シ能ク熟讀ノ而深ク凝サ心慮ヲ者、大事因緣其レ庶幾シ乎、爰ニ某禪人、請フ叙セントニ斯篇之起盡ヲ、不レ忍ヒニ確ク辭スルニ因テ應スニ于其需ニ云レ爾、

寛政庚申六月日

大靈叟書ニ于濃陽璧觀亭ニ

快馬鞭卷之上

東嶺和尚

入道要訣

夫れ禪宗の凡夫地より、直に佛地に登ると云ふに、五の料簡あり、一つには同性の義、二つには異塗の義、三つには憤勵の義、四つには進修の義、五つには歸本の義なり、是を要路とす、

○第一同性の義と云ふは

人人具足する本性と、三世諸佛の本性と無二なり、功德莊嚴も均し、光明赫奕たり、智惠神通悉く同じ、譬へば大日輪の光明の山河大地を照さゞる處なきが如し、賤き糞土の上も、貴き金玉の中も、替るとなく、明かなり、然に盲人は其光りの中に在ながら、見ず知らず、悲むべし

○第二異塗の義と云ふは

本性は諸佛衆生と同體不二なれども、其の意の指す處、各別なり、佛は內に向て本心を照し給ふ、衆生は外に向て萬境に亘る、故に愛する物に貪慾を起し、惡む者に瞋恚を起し、思ひ凝て愚癡となる、此三毒の性に迷ひ昧されて、本心をも失へり、貪慾深きものは餓鬼となり、瞋恚深きものは修羅となり、愚癡深きものは畜生となり、三毒齊きものは地獄に墮て種種の苦みを受く、是を四惡趣と云ふ、恐るべきの至なり、貪瞋癡あれども自ら誡め、恣にせざるものは人間なり、生生此の身を失はず、貪瞋癡漸くしづまりて、誡めざれども恣まゝならざるものは天上に生る、是を六慾天と云ふ、三毒の性滅して定慧の德あれども、定愛の見ありて、瞋癡の餘習有り、是色天十八種の中に生る、定愛已に盡れども、未だ佛の知見を開かざる、是を無色界の四天と云ふ、聲聞緣覺の行者此天にあり、前の四惡趣に人天を加ふれば六道となる、聲聞緣覺と菩薩と佛とを加ふれば、即十界となる、凡そ六道の中は、設ひ人天の樂を受るも、皆苦の本なり、如何となれば、貪瞋癡煩惱の深き心を以て、此世

（六欲天）は欲界の六天なり
（色天十八種）は色界十八天なり